

日本への回帰

第22集

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰
(第二十二集)

―第三十一回学生青年合宿教室(島原)の記録より―

は し が き

昨年七月六日の衆参同日選挙で、自民党は衆議院で三百議席を越す大勝を収めた。戦後四十年、政治状況を測る一つの座標軸であった「保守」対「革新」といふ図式は崩壊した。しかし政権政党である自民党は、今や何を「保守」するかといふ思想の核を失った。問題はより深刻の度を加へたといふべきであらう。政治の世界に過度に倫理を要求することは無理であらうが、民族興亡の根幹にかかはるやうな重大問題が、政権維持の具に供せられる現状は、何としても黙視しがたい。われわれはその顕著な具体例として、昨年の「教科書問題」と「靖国神社公式参拝中止問題」の二つを挙げるべきであろう。

まづ昨年五月下旬から七月上旬にかけての、「新編日本史」検定をめぐる問題である。日本を守る国民会議編『新編日本史』の原稿本の内容を「復古調教科書」といふ一種の予断を与へる見出しで、「朝日新聞」がスクープしたのは昨年の五月二十四日であった。五月二十七日一旦検定に合格した内閣本に対して、七月七日の最終決定に至るまで実に四次にわたる大修正が行はれた。その修正は「南京事件」や「安重根」に関する中韓両国の抗議といふ、明らかな内政干渉によるものであるが、それに便乗する形で目に余る自己規制が行はれた。他国の教科書の内容について異議を申し送ると

いふことは、国際通念に反することであり、政府はさういふ外圧に対して防波堤の役割に徹することが常識であらう。然るに今回の修正措置は、外務官僚、官房長官、首相といふ権力の中枢が、聖域であるべき教育の世界に公然と介入して来た。そして、この公然たる侵犯を、マスコミは全く問題にしなかった。左翼が外国と通謀して、政府の意図を潰すといふ従来のパターンとは、今回は全く違ってゐた。四年前の、侵略、進出をめぐる教科書問題で、政府は検定基準の一部を変更し、「近隣のアジア諸国との間の近現代の歴史的事象の扱ひに、国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がなされてゐること」といふ小川文相談を發表した。この安易な政治的妥協が大きな禍根となつた。今一つは靖国問題である。中曾根首相は「戦後政治の総決算」「タブーへの挑戦」をかかげて登場した。それは何よりも「東京裁判史観」の破棄を意味してゐた筈である。首相は一昨年八月十五日の終戦記念日に、靖国懇の答申を踏まへて、憲法の政教分離原則に抵触しないといふ前提で公式参拝に踏み切つた。しかし、やがて中国からA級戦犯合祀の事実に対して「不快感」が表明されるや否や、徐々に軌道修正を始めた。秦豊参院議員提出の靖国神社問題に関する質問趣意書への答弁書が閣議決定されたのは一昨年十一月五日であつた。秦氏がA級戦犯問題に関連して、「政府は日本による侵略戦争の責任を追究した極東軍事裁判に疑義を有してゐるのか」とただした点について、「平和条約（サンフランシスコ平和条約）十一条により、わが国は極東国際軍事裁判所の裁判を受諾している」と公式に言明した。この文脈に即する限り、この時点で政府は過ぐる大東亜戦争が「侵

略戦争」であったことを肯定したのである。

いふまでもなく、サンフランシスコ条約第一条に明言されてゐる如く、昭和二十七年四月二十八日の条約発効の日までは「戦争状態」であり、東京裁判は戦時下の一方的な軍事裁判であつた。従つて刑死したA級戦犯は広義の戦死者である。講和発効の翌年の第十六国会の議決により援護法が改正され、いはゆる「戦犯」の遺族に対して、戦死者の遺族と同一の扱いがなされるやうになつたことは、国家による「戦死者」としての追認であつた。既に法的にも明確に決着のついた問題が、なぜ今になって浮上して来るのか。中国が公式参拝を「不快」とするのは、そこにA級戦犯が合祀されてゐるからだ、といふ論理である。過ぐる戦争を「侵略戦争」と断ずる東京裁判史観に従ふ限り、その指導者を合祀した靖国参拝は好ましくないといふことになる。首相は中国側の論理に同調してここまで後退した。教科書問題で過度の自己規制を促したものと根は全く同じである。この占領遺制の呪縛が断ち切られる日はいつであらうか。われわれの任は重く、道は遠いのである。

末筆ながら、合宿教室に御登壇いたゞいた村松剛、江藤淳両先生には、御多忙にもかかわらず玉稿に對してお心こもる御添削、御加筆を賜り、掲載させていたゞくことができた。ここに改めて厚く感謝の意を表する次第である。

昭和六十二年二月一日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき

一、歴史と人生

学問の再生のために……………	九州大学循環器内科医師	長澤一成……………	3
乃木希典—明治人の『原型』—……………	九州女子大学教授	山田輝彦……………	25
昭和史の一端……………	国民文化研究会副理事長	宝辺正久……………	47

一、講義

日本の外交の歴史と現況……………	筑波大学教授	村松剛……………	65
ことばとところ……………	東京工業大学教授	江藤淳……………	101

一、天皇と政治

『聖徳太子憲法十七條』を正確に読みながら、
日本及び日本人について所懐を述べる

今上天皇の御歌について……………国民文化研究会理事長 小田村寅二郎……………141
……………亜細亜大学名誉教授 夜久正雄……………181

一、短歌入門

短歌創作の手引き……………山口県立高森高校教諭 宝辺矢太郎……………201
創作短歌全体批評……………熊本市役所技師 折田豊生……………223

一、青年のことは

正岡子規に学ぶ……………運輸省港湾局防災課 久米秀俊……………243
心に残る言葉……………鳥栖市役所下水道課 西山八郎……………251

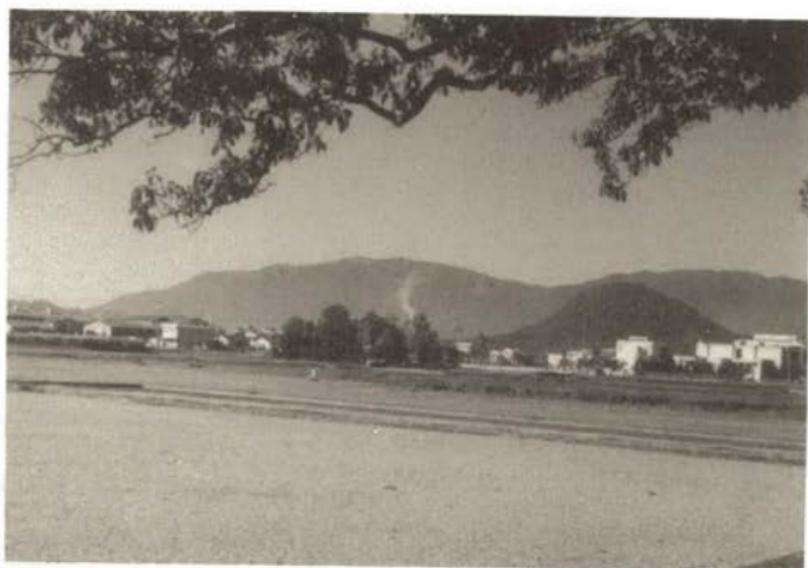
一年のあゆみ……………亜細亜大学法学部 四年 國分俊喜……………261
合宿のあらまし……………西南学院大学文学部 四年 日比生哲也……………277
合宿詠草…………………………311
あとがき…………………………

■ 歴史と人生

學問の再生のために

九州大學醫學部循環器内科

長澤一成



藤原宮跡より畝傍山を望む

此の合宿で學んだこと——聞くことのむづかしさ——

現代青年と歴史

歴史に學ぶ

戦没學徒の遺書

再生せらるべき學問とは

人生に直結した學問のスタアトを

此の合宿で學んだこと——聞くことのむづかしさ——

私が初めて此の合宿教室に参加したのは昭和五十一年、丁度今から十年前です。それから學生時代、そして社會人になつてからも、毎年の此の合宿教室に参加して参りました。此の合宿で私が學んだ事を一言で現す事は出来ませんが、敢へて申し上げるならば、それは、「聞く」ことの難しさでした。皆さんは、「聞く」ことが何故難しいのかと言はれるかもしれない。話したり、書いたり、表現することのほうが、餘程難しいことで、黙つて人の言葉を「聞く」ことなど、誰でも、簡単に遣つてゐることではないか、と思はれるかもしれません。確かに、普段私達は、何の苦もなく人の話を聞いてゐる譯ですが、矢張り、皆、自分の都合のよい様に話を聞いてゐる、或は、聞いた積りになつてゐることが多いのです。他人の言葉に、身が震へる様な感動を覺えたり、自分を虚しくして相手の言葉にじつと耳を傾ける経験、つまりは、その訓練の機會が、次第に少なくなつてゐはしないでせうか。

最近、書物やマスメディアを始め、私達の廻りには實に多くの言葉が氾濫してゐる。しかし、其處では言葉は單なる傳達のための道具として、恰も使ひ捨てのティッシュペーパーの様に扱はれてゐる。この様な世界に慣れ切つて了つた私達は、言葉は、語り手、書き手の

生命の刻印であるといふ、言葉本来の姿を實感し得ない儘、多感な青年時代を過ごしつゝるのではないでせうか。假に、友人や家族との間でその様な経験があつたとしても、古典や先人の言葉と、恰も現世の人と交はる様に個人的な交はりを結ぶといふことは、先づなくなつて了つたやうです。いや、考へてみれば、寧ろ現實の生活に於て、人と人とが言葉を通じて結び付くといふことが、どんなに深い意味を持つてゐるかに氣付かないからこそ、古典や書物とも、眞の交はりを結ぶことが出来なくなつて了つたのではないでせうか。

確かに、時を経るに従ひ、言葉は、人の手垢に塗れて行くものかもしれない。しかし、その下には、いつも生命の刻印としての言葉が生きてをり、忍耐をしながら言葉と附合ひその垢を自らの努力で取り払はうとする人を待つてゐるのだと思へます。私は、此の合宿で、平生、餘り意識せぬ儘過してゐる、言葉を以て人と人が、それも同時代の者のみならず、今は亡き過去の人も、心を通はせて行くことの大事と困難を教へられたと思つてをります。

現代青年と歴史

此方へ参ります前に「諸君！」といふ雑誌に掲載されてゐる石原慎太郎氏のエッセイを讀んでをりましたら、彼が、その母校である一橋大學の學生寮の新築落成の祝宴に招待され、

講演を行つた時のことが、印象深く書かれてゐました。彼は、後輩である一橋大學の學生に「諸君は、経済学というものを学ぶうえでの最高学府に在籍している訳だから、どうか今後、経済学を専攻する者として、古今未曾有の試みを企てて頂きたい。」といふ話をしたさうです。その講演の後、懇親會の席上、或る學生が氏に質問をした。「先程、先生は、何か、古今未曾有の事を遣つてくれと言はれたが、では、具体的には、私達は何をしたら良いのでせうか。」さすがの石原氏も、此には驚いたのですが、又、此が、現代の若者の象徴的な姿であると、痛感したと書いてをられました。

皆さんには、様々な意見がおりだと思ひますが、私にも、石原氏の言はれる様な事が、最近、特に目立つて来た様に思はれるのです。換言すれば、現代の青年は、自分が何をしようとしてゐるのか、そして、何を大切に生きていくのか、かういつた、謂はば「如



何に生くべきか」といふ、汲み盡すことの出来ない問題を、じつと胸に暖めて、自問自答して行く事が、出来なくなりつゝある、と言へるのでは無いでせうか。戦後、日本は驚くべき科学技術の進歩と経済成長を成し遂げました。しかし、それが齎した奢侈と實利、そして、溢んばかりの自由の下で生きる、私達青年の内心の空虚は、最早、覆ふべくもないのです。

さて、更に、氏は、此の様な問題は、戦後四十年にして初めて現れたものであると言つてゐるのですが、私は、少し意見を異にします。確かに、此の様なことが、現象として顕現して来たのは最近の事かも知れぬが、その胚子は、終戦直後の占領政策の中で蒔かれ、四十年の間、成長し續けて来たのだと思はれるのです。だが、此には、少し説明を要する様です。

昨年此の合宿教室は「戦後を考へる」といふテーマが一本の縦糸になつて、織り成されてゐた様に思ひます。その内容は、『日本への回帰 第廿二集』に詳しいのですが、此處で、わが國の戦後の歩みを振り返るに當つて、再び、皆さんと一緒に讀んで見たい文章があります。それは、小田村四郎氏の「占領政策と日本」の中の次の一節です。

「さて、占領後遺症の最大のものとは何か。それは最初に申し上げたやうに、日本國民が國家意識を喪失させたことだと思ひます。空間的にも時間的にもです。(中略) 時間的とは、全ての民族國家は長い歴史の積み重ねによつて存在してゐるに拘らず、二千年の歴史を有す

るわが国に対して、占領以前の歴史を全て抹殺し、その一体性、連続性を否定しようとする思考様式です。民族の過去、尊い生命を捧げて国の独立を守り、世界に誇る文化を築き上げて来た父祖の業績に対する謙虚さを喪失し、甚だしきはこれを呪詛の対象にしようとするのです。」

此處で使はれてゐる「時間的國家意識」とは、取りもなほさず、先輩や祖先達が築き上げ、跡附けて来た歴史への、共感のこととせう。しかし、今や、現在を生きる私達は、その共感を持ってなくなりつつあり、しかも、此の冷たい無關心は、自然な時の流れに依るものではなく、寧ろ、戦後の占領政策に依り、意圖的に、作り出された状態であるといふ指摘だと思ひます。此處では、此の問題に具體的に觸れる餘裕はありませんが、是非心にとどめて、これから勉強して頂きたいことだと思ひます。しかし、青年の心から、自らの生き甲斐を希求する氣持が失せ、恰も浮草の様に生きて行くことに何等痛痒を感じなくなつて了つたことと、先輩達の生き様に對する無關心とは、一體どう關係してゐるのでせうか。

歴史に學ぶ

此の事は、言葉を變へれば、歴史に學ぶことと、私達の生き方とが、何う繋がるのかといふことだと思ひます。此は、以前知つたことですが、紀元前四八〇年アテネ、スパルタを中心としたギリシャ都市國家群は、侵攻して来たペルシャ軍を迎へ撃つて大戦鬪を展開しました。有名なペルシャ戦争の一駒です。ペルシャは、陸海相呼應して、ギリシャに迫り、その數、陸兵參十萬、兵船八百隻から成る大軍でした。此時、陸路を攻め寄せたペルシャ軍を、テルモピレイで迎へ撃つたのが、レオニダス率ゐるスパルタ軍だつたのです。しかし、さしものスパルタ軍も、數十萬のペルシャ軍の前に、奮戦虚しく、此の地で玉碎してしまひました。しかし、その後、アテネを中心としたギリシャ海軍の健闘により、サラミスの海戦に勝利したギリシャは、ペルシャを壓倒して和を結びます。玉碎しながらも、寡兵よく數日間持ちこたへたスパルタ軍の勇名は、テルモピレイの戦として今日まで、語り繼がれてゐるのですが、そのテルモピレイの地に、今でも、ひとつの石碑が残つてをり、それには、かう記してあるさうです。「道行く人よ、スパルタに行つて告げてくれ。私達はスパルタ人の命によつて此處で死ぬのだ。」石碑は、誰が建てたのかも判らぬのですが、此の石碑の言葉こそ、歴史

の本質を語つてゐる様に思はれるのです。

此處でいふ歴史とは、勿論、皆さんが受験勉強で遣つて来た、年代や出来事の羅列と暗記などではありません。「スパルタに行つて告げてくれ」といふ過去の人々の、思ひ溢れた、言葉そのものなのです。過去の事實の全てが歴史として残つて行く譯ではない。過去を生きた人々の、深く、強い思ひが、時を超えて、歴史として傳へられて来た。現代の歴史を貫いて流れてゐる最も大切な本質をなすものは、自分は此の様に生きたのだ、そして、それを傳へて欲しいといふ古人の痛切な思ひであると、私は思ふのです。此の切實な思ひは、言葉といふ形を取り、それを、實際には、経験しなかつた人の心をも動かす力を持つてゐる。何故なら、それは、多くのひとが、古人の中に自分の姿を見出したからでせう。すなはち、歴史には、私達が、平生、意識しない儘に生きてゐる、自分自身の姿が寫されてゐるのです。それ丈ではない、或る時は身を挺して困難に當り、或る時は大きな喜びに包まれ、そして、又、或る時は深い悲しみを味はふ。それを言葉にしながら、人生を眞摯に生きて行つた先人の姿に、今を生きる私達が、共感や疑問を抱き、自問自答を重ねながら、生き方を定めて行く、それが、歴史に學ぶことの本義でせう。

私達が、言葉を使ふ時、先づ模倣することから始めたやうに、生き方といふものも、矢張、先輩達が、どう生きたかを模倣することに始まるのです。しかし、先程の小田村氏の言葉の

様に、私達は、歴史に對する無關心を是とする、意圖的に作られた空間の中で成長し、今も、その中で呼吸してゐるのです。しかも、潤澤な物質と高度な技術、そして溢れんばかりの自由。此處では、形而下的な、欲望を満たすことが人生の目標となり、生き方の規範などといふ事は、陳腐なこととして、省みられなくなつて了つてゐるかの様に、歴史に冷淡になつて了つたが為に、つまり、生き方を模倣する事をしなくなつたが為に、パンにあらざる人生の目標を、自分の意志と努力で求めて行くことが出来なくなりつゝあるのです。そして、更に、恐ろしい事は、私達青年が、さういふ自分に對して、何等戦慄を感じなくなつて了つてゐる事なのです。

戦没學徒の遺書

此處に御紹介するのは、約十年前の頃の合宿で、夜久正雄先生が、御話しになつた、一人の若き戦没學徒の遺書であります。此處にも、その折り一緒に、先生の御話を聞いた方が、大勢いらつしやいますが、私は、先生が、涙ながらに讀んで行かれる此の遺書の言葉を辿りながら、涙が溢れてくるのを、どうしやうもありませんでした。此の遺書を殘された方は、茶谷武氏といつて、昭和廿年四月廿三日、フィリッピン、ルソン島タクボといふ處で、弱冠

廿三歳で戦死された方です。夜久先生は、大學卒業後、當時の府立一中夜間部の教員をなさつてゐたのですが、茶谷氏は、その時の教へ子だつた譯です。そして、此の遺書は、戦死される直前に、御家族に宛てて出されたものですが、戦後三十年の歳月を経て、夜久先生の知る處となつたものです。

遺書

父上
母上様へ

武モタウくオ役ニ立ツ時ガ参リマシタ。生ヲ稟ケテ二十余年唯ノ一度モオ心ヲ安マセルコトナク過シテ来タコトヲオワビ致シマス。今ノ私ノ氣持ハ吉田松陰先生ノ「親思フ心ニ勝ル親心今日ノ訪レ何トキ克蘭」ト歌ハレタ氣持ソノマ、デアリマス。今思ヒマス二人一倍子ボンノウノ父上ニトツテコレヲヨマレ（ル）ノハドンナデアルカハヨシ全部デナクテモオシハカルコトガ出来マス。デモ此ノ皇国危急ノ秋私達ノ涙ハカクサレネバナリマセン。私ノ肉体ハコ、デ朽ツルトモ私達ノ後ヲ私達ノ屍ヲノリコヘテ私達ヲ礎トシテ立チ上ツテクル第二ノ国民ノコトヲ思ヘバ又之等ノ人々ノ中ニ私達ノ赤キ血潮ガウケツガレテキルト思ヘバ決シテ私達ノ死モナゲクニハアタラナイト思ヒマス。

日本ニ生レタ者ノミニ許サレル永遠ノ生ニ生キルトイフコトガイヘルノデス
之等ノ事ヲ思ヘバ私達ハ涙ヲ流ス前ニ故国ノ勝利ヲ、天壤無窮ヲ祈ラネバナリマセン ドウ
ゾ私ノコトヲ笑ツテホメテ下サイ 武モ笑ツテ散リマス テハ父上母上オ身体ヲ大切ニシテ
下サイ

サヨウナラ

武ヨリ

ワガ生ハ下葉ノ露ト消ユルトモ何カ惜マンコノ秋ニシアレバ
我が肉ハヨシ朽ツルトモアガ魂ハミ空天カケ御国守ラン
征キ／＼テ草ムス屍ト果ツルコソ我身ニツキヌ思ヒナリケレ
神州ノ不滅ヲ信ジ吾ハ唯ニマケノマニ／＼進ミ行カナム
大君ノマケノマニ／＼生き死ナム時ゾ近ツキ吾ガ胸ハル、
同胞之働キミテハ日ニ夜ニモダセシ心今ゾハル、モ
アガ家ノ名ヲケガスナトノタマヒシアガ父ノ言ワスレカネツル

千枝子へ

兄サンハ今死ニツクニ当リオ前ニ一言遺シテオク　ワカラヌ所ガアルカモ知レヌガ来年ハ六年生ニナルノダカラヨクヨンデミナサイ

兄ナキアト茶谷ノ家ノ血統ヲツグノハオ前一人ダ　兄サンハ御国ノ危急ニ身体ノ心ノ一切ヲ陛下ニ捧ゲ日本男児トシテノ責任ヲ果ス為ニ今死ニツクノダ　決シテ泣イテハナラヌ　涙ヲヌグツテコノ大イナル戦ノ勝利ヲ祈ラネバナラヌ　オ前ノ兄ハコノ美シキ尊イ御国ヲ護ル責任ヲ果シタコトヲホコリト思ハネバナラヌ　オ父サンオ母サン先生方ノ言フコトヲヨク守ツテ日本ノ婦人トシテハツカシクナイヤウニ一生懸命勉強シナサイ　モウ少シ大キケレバイフコトモ沢山アルガマダイツテモワカラナイダラウカライハヌ　ソレカラ女学校ニデモ入ツタラ歌ヲ作りナサイ　歌ハ決シテ風流ナモノデハアリマセン　自分ノ心ヲイツハラズカザラスソノマ、三十一ノ文字ニ表ハスノデス。

デハ千枝子ヨ　サヨウナラ

兄ヨリ

確かに、戦争の悲惨を語り盡すことは出来ないでせう。戦争が、私達にとつて、忌み嫌はれるものであるのも、當然でせう。しかし、私達が、人間であるかぎり、此の地上から争ひ

がなくなるといふことはありえないのです。平和をスローガンに戦ふのも、又、人間なので、個人の人生に時として不幸が降り掛かるやうに、一國の歴史にも不幸が生じる。そして、茶谷さんを始め、多くの先輩達が、その悲惨を避けずに、全力を擧げて、これに立ち向かつて行つた。これが、僅かに、四十年前の、私達と同じ年頃の青年の生き方だつたのです。戦争の悲惨をいふのは良い。しかし、その一方では、戦ひに朽ち果てて行つた先輩達が、何を守るために命を賭けたのかを、彼等の身になつて思ふべきではないでせうか。

此の遺書を、初めて讀んだ時、今日の日本が、偶然存在してゐるのではなく、多くの先人達の意志と苦闘の上に成り立つてゐるのだといふ、謂はば、當前のことが、私には、初めて、自分の中に生きた言葉として感じられ、今迄は、抽象的な言葉に過ぎなかつた「歴史」が、具體的な形を執つて迫つて来た様に思ひました。そして、文中の「第二の国民」が、とりもなほさず、私自身であることを思つた時、此の、家族に宛てられた、茶谷さんの言葉は、私への語り掛けとも思はれ、私は、今、重大な付託を受けてゐるのだと感じたのです。その感動の中で、私は、生涯を通して、自分が何をしようとするのかを考へ始めました。

再生せらるべき學問とは

さて、此の講義の演題は、「學問の再生のために」と題しました。皆さんは、學問といふ言葉を聞いてどういふ風に受け止められるでせうか。受験勉強を思ひ出される方もいらつしやるでせう。又、現在の大學の中では、計測出来、他と主觀を交へずに比較する、つまり、客觀的に現象や出来事を捉へる事が學問であると考へられてゐます。文科系、理科系、又、各々の中でも、具體的な方法は異なつてゐるが、その基本的な姿勢は、變らないのです。さういふ中で、古典を讀み、歴史に學び、如何に生きるかを問うていく様なことは、個人的な、いはゞ、趣味の問題として省みられなくなつてしまつてゐます。受験勉強も、大學における研究も、その重要性は、言を待たないが、しかし、此は、私達が、世を涉り、人々に貢獻する為の、一つの手段なのです。大學に進む迄は、受験勉強が、學問であると思ひ、大學では、方法論と技術を學ぶことが學問であると思ふ。だが、私達は、さういふものを、何に使はうとするのか、つまり、如何に生きるかといふ問題を問ひ、鍛へて行く場は、私達の周圍には、皆無と言つても良いほどです。大學の中に、或は、高校の中に、さういふ場が無いのも問題ですが、最も問題なのは、此の空氣の中で、私達自身の心の中から、それが、消え去らうと

してゐることです。さういふ意味で、今日、演題に揚げました「學問」といふ言葉は、謂はば、人生と直結した學問といふ意味を籠めてゐるのです。

かういつた、學問とは、科學的なものである、といふ風潮と真向から戦ひ、生きることの意味を問ふ學問の回復を説き續けた方に、此の合宿に何度も御出講頂いた、小林秀雄先生がいらつしやいます。先生の大著『本居宣長』の中の一節に、伊藤仁齋、荻生徂徠といつた當時の、官學の流れに抗して、「卓然獨立」して、自分の學問を展開していつた近世の儒學者に觸れた箇處があります。

「彼等が、所謂博士家或は師範家から、學問を解放し得たのは、彼等が古い學問の對象を變へたり、新しい學問の方法を思ひ附いたが為ではない。學問の傳統に、彼等が目覺めたといふところが根本なのである。過去の學問的遺産は、官家の世襲の家業のうちには、あたかも財物の如く傳承されて、過去が現在に甦るといふ機會には、決して出會はなかつたと言つてよい。『古學』の運動によつて、決定的に行はれたのは、この過去の遺産の蘇生である。言はば物的遺産の精神的遺産への轉換である。過去の遺産を物品なみに受け取る代りに、過去の人間から呼びかけられる聲を聞き、此に現在の自分が答へねばならぬと感したところに、彼等の學問の新しい基盤が成立した。今日の歴史意識が、其の抽象性の故に失つて了つた、過

去との具體的と呼んでい、親密な交りが、彼等の意識の根幹を成してゐた。」

語義の解釋や注釋に終始してゐるうちに、古典は、一般人の生活とは、縁遠いものとなつて了つた。古典の中に、自分自身の顔を見いだす喜びが、わからなく成つて了つた時に、彼等が現れ、そして、書物の中に、「過去の人間から呼びかけられる聲を聞き」「過去との具體的と呼んでい、親密な交り」を結んでいつたのです。仁齋は、五十年の間、『論語』を讀み續けたさうです。これも、小林先生のエッセイで知つたことですが、仁齋には、『論語古義』といふ著作があります。其の原稿が、現在、天理圖書館に残されてゐるさうですが、その冒頭に、「最上至極宇宙第一書」と、書いては消し、消しては書いてゐる跡が残つてゐるさうです。五十年間讀み續けて來た書物に對する評價を「最上至極宇宙第一書」とし、しかも、それを公言することに一種の躊躇ひを覺え、書いては消して、迷つてゐる。かういふ仁齋の姿を、小林先生は、惚れた女の事を語る男の様だと書いていらつしやいますが、將に、仁齋にとつて、古典を學ぶとは、作者と戀仲になる様なものだつたのでせう。もうひとつ、過去との親密な交はりについて、『本居宣長』の中から引いてみませう。宣長は、晩年の三十年を費やして『古事記』の注釋書である『古事記傳』を書き上げます。その『古事記傳』が完成した寛政十年に、宣長は、次の様な歌を詠んでゐます。

古事記傳を書き終へたる喜びの會をしける

ふるごとのふみをらよめばいにしへのてぶりこととひききみるごとし

宣長にとつても、『古事記』を読むことは、眼前に古人の姿を見るやうなものであつたのである。私達は、かういふ讀書を想像することが、大變困難になつて了つた世に生きてゐる。しかし、如何なる世であつても、生き方といふものが、先づ、學び、模倣するといふことからスタートするといふ、人生に關する基本的原理が、變はらない以上、仁齋等の學問が古くなることは、無いのです。先程の引用の後には、次の様な文章が續きます。「彼等にとつて、古書吟味の目的は、古書を出来るだけ上手に模倣しようとする實踐的動機の實現にあつた。従つて、當然、模倣される手本と模倣する自己との對立。その間の緊張した關係そのものが、そのまゝ、彼等の學問の姿だ。古書は、飽くまでも現在の生き方の手本だつたのであり、現在の自己の問題を不問に附することが出来る認識や觀察の對象では、決してなかつた。」

人生に直結した學問のスタアトを

最後に、此も、江戸時代の儒學者ですが、山鹿素行の『武教小學』の中の一節を讀んでみます。

「大農、大工、大商を天下の三寶となす。士の農工商の業無くして、しかも、三民の長たる由縁のものは、他なし、良く身を修め、心を正しくして、國を治め、天下を平らかにすればなり。」

餘談になりますが、かういふ言葉も、此を、今に、蘇らせるには、私達の心の努力を必要とするのかもしれませんが。例へば、「士農工商」といふ言葉を聞いただけで、もう「身分制度」といふ概念が、私達の心を暗くしてしまふ。そして、此の言葉は、「封建時代」の陳腐な、自分とは縁遠いものになつてしまふのです。しかし、それでは、素行が、「士農工商」といふ制度に見いだした意味に、まつすぐ迫ることは出来ないでせう。

さて、素行の言葉に戻ります。農、工、商、何れも物を創る、動かすといふ行為を通して、

世間に貢献する階級です。ところが、武士はどうだったか。侍の本分は、戦闘です。戦國時代迄は、腰の大刀も、兵學も十分その存在意義をもつてゐた。しかし、徳川の世になり、少なくとも、戦國時代の様な、戦亂は、姿を消してしまひます。かういふ太平の時代に、しかも、何も創り出さない武士といふ階級が、何故、二百六十年もの間、社會の頂點に位置し續けたのか。彼等が強權を以つて、下層階級を抑へてゐたからでせうか。農工商の民が、愚かで、脆弱だったからでせうか。私は研究者ではありませんので、此の事を、實證出来る様な、充分な検討をした譯ではありませんが、常識から考へて、それだけで、此の、武士の二百六十年に亘る地位の安定を説明出来るとは思へません。矢張、農工商の民にとつて、侍は、その存在に、畏敬の念を持つべき、何等かの意義を有してゐたと考へるはうが、餘程自然なことに思へます。では、農工商の民をして武士の存在を納得させてゐたその意義とはなんだつたのか。その答が、此の素行の言葉だったのではないでせうか。侍は何も創り出しはしないが、自分がどう生きるかをいつも考へてゐる。人生の大事に當つて、どう進むべきかを、身を以つて示すべく、毎日を生きてゐる。さういふ、侍の姿に對する共感があつたからこそ、武士達は、農工商の民の、尊敬を得、強權に依らざる統治を維持し得たのではないでせうか。さて、此の素行の言葉を現在に置いて考へてみませう。今や、大學は、技術修得の専門學校だの、社會に出るまでの猶豫期間だの、更には、レジャーランドとさへ言はれてゐる様で

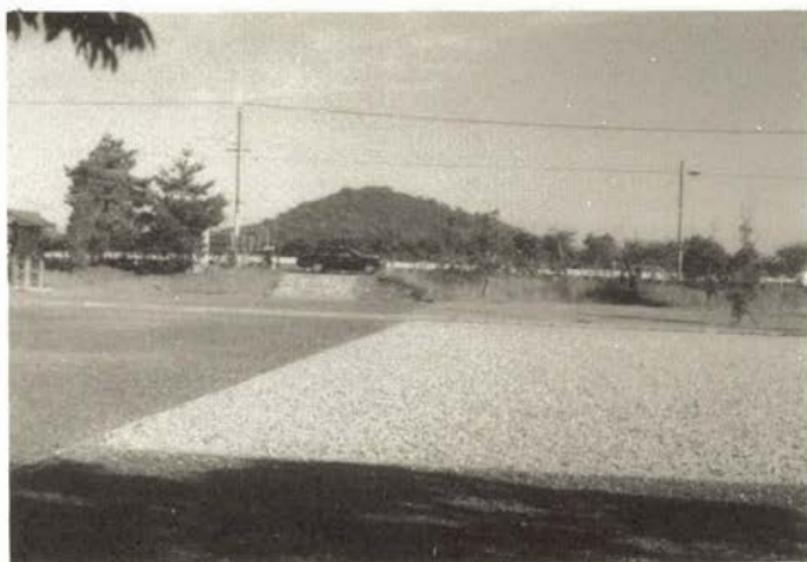
す。確かに、さうなのかもしれません。今や、大學に進むことは、寧ろ當然であり、昔の様に、事更、大學に學ぶことの意義を求めても仕方がないのかもしれない。しかし、矢張、それは、風潮なのです、變はり易い流行なのです。世の中の流れがどうであれ、鋭敏に、そして、眞剣に生きてゐるものにとつて如何に生くべきかといふ問ひは、昔も、今も、變らず、いつも存在してゐるのです。諸君の友人の中には、中學、或は、高校を卒業して既に働いてゐる人がゐるでせう。彼等が、額に汗して働いてゐる間、諸君は、讀書も出来る、一流の人の話を聞くことも出来る。しかし、侍がさうだつた様に、諸君も何かを創り出し、世に貢獻するといふ譯ではない。さういふ四年間の意義を何に求めるのかを、よく考へて貰ひたいのです。「良く身を修め、心を正しくして、國を治め、天下を平らかにする」といつた、己の生き方を問ひ、實踐して行く姿に、素行は、武士の存在意義を認めた譯ですが、現今の大學における、青年の學問に缺落してゐるものは、將に此の點ではないでせうか。假初のものではない、人生の本質と直結する學問に、それも、偏頗なエリート意識ではなく、堂々たる使命感を持つて、進むほかはないと思ふのです。

乃木希典

—明治人の『原型』—

九州女子大学教授
国民文化研究会常務理事

山
田
輝
彦



藤原宮跡より耳成山を望む

はじめに

軍旗喪失

日露戦争

殉死の衝撃

「白樺」以後

をはりに

はじめに

現代といふ時代は、不確定性の時代とか、曖昧の時代とか、モラトリウム人間の時代とか、いろいろな言ひ方がありますが、すべてのものに明瞭な形がなくなり、不鮮明になつて来た時代だと言へます。例へば人間の生死の問題といふやうなことに關しても、昔の人は、家族が死者の枕元に集り、柩を野辺に送り、煙となつて空に上つてゆく魂を、心をこめて嘆くことができた。ところが現在では、殆んどの人が病院の集中管理室のやうなところで医師にみとられて孤独に死んでゆく。しかも脳死の問題などを考へますと、生死の境さへもはつきりしない。生死の問題だけではなく政治状況でも同じことです。保守とか革新とか言ひながら、お互の主張に鮮明な対決点がない。人間の価値観も、何か明確な目標があつて、それに自分の情熱を注いでゆくといふ時代ではなく、適当に楽しく人生を過せば足りるといふ風潮が一般的になりました。価値の相対化と言はれるやうに、絶対的なものは何か恐いものである、狂信につながるといふ考へから、物事を限りなく相対化してゆくと最終的にはニヒリズムになつてしまふ。結局この一瞬一瞬を享樂して楽しく過すのが一番いいといふところに落ち着いてくる。

さういふ時代に「今更、何で乃木さんなのか」といふ疑問を持つ方も多いでせう。私は乃木さんといふ一人の人間を素材として、「歴史」といふものを考へてみたいのです。「明治」といふ時代は果して現在の教科書で教へられてゐるやうに、戦争と重税だけの時代だったのか。たしかに暗い面は沢山ありました。しかし、人間の歴史に完全無欠な歴史といふものはありません。明暗交々の歴史を、心を開いて受け入れ、その時代まで遡つてその人たちと共に生きてみるといふことが必要です。明治は、自虐史観だけで裁断することのできぬ一種の昂揚感を有つてゐます。それは日本人が自らの手で、始めて近代的な統一国家を作り上げた時代です。さういふ時代を代表する典型的明治人として、乃木希典といふ人間を考へてみたいのです。

軍 旗 喪 失

乃木さんが生れたのは、日本の周辺に黒船が去来するやうになつた嘉永二年（一八四九）、亡くなつたのは大正元年（一九一二）九月十三日、六十四歳の生涯です。

乃木さんは毛利藩の支藩、長府毛利家の下級武士の子として、江戸藩邸で生れます。明治維新になつたのが丁度乃木さん二十歳の時です。長州戦争のときには、高杉晋作などと一緒

に、幕府方の小倉、小笠原藩の討伐に砲兵隊長として従軍してゐます。維新後明治二年、京都の伏見に御親衛隊が作られました。天皇は直属の軍隊を持つてをられないので、薩摩、長州、などから藩兵を集めて軍隊を作った。その大将が大村益次郎でした。この二十二歳の時の御親衛隊入隊が、乃木さんの生涯を決定したことになります。正規の軍人としての教育は、この隊における一年に満たぬ訓練だけでした。

乃木さんは二十四歳のとき、当時明治政府の高官であつた黒田清隆といふ薩摩出身の人から東京に呼び出され「おはんは明日から陸軍少佐だ」といはれます。そして明治八年、二十八歳の時、熊本鎮台所属の小倉歩兵第十四連隊に連隊長代理として赴任します。ところが明治八、九年頃は、新政府の方針と、それまで志を同じくして尊王攘夷で幕府を倒した諸藩の人たちとの間に意見の対立が起つてくるのです。明治九年には



熊本之神風連、福岡の秋月の乱、そして乃木さんに一番決定的な悲劇、萩の乱が起ります。萩の乱の中心になつた前原一誠は松陰門下で、久坂玄瑞、高杉晋作などと共に松陰先生から非常に可愛がられた人で、維新と同時に新政府の参議になり、大村益次郎の後を受けて兵部大輔となります。今でいふと陸軍大臣に当る高官ですが、新政府と意見が合はず、萩に帰り、やがて萩の乱が起るわけです。

その萩の乱の時に、前原一誠の参謀格になつたのが乃木さんの弟の次郎、玉木文之進の養子となつて玉木正誼と名乗つてゐた人です。玉木文之進は松陰先生の叔父に当る方で、松陰先生はこの玉木文之進に徹底的に鍛へられた。その教育の余りの激しさに、松陰先生のお母様が「寅次郎お死に」（いつそのこと死んでおしまひ）といはれたといふ逸話があります。乃木さんも文之進の弟子でしたから、文之進は乃木さんの師であり、同時に弟の養父だつたこととなります。

玉木正誼が反乱軍の参謀といふことになれば、乃木さんの官軍との戦の中では、兄弟が官軍と賊軍に分れて相戦はねばならぬといふこととなります。前原一誠はしばしば玉木正誼を小倉にやつて、乃木さんに自分の方に加担してくれるやうに説得する。また別の使者を送つて、「お前のところには銃——当時スナイドル銃といつた火繩銃——が沢山あるだらう。予備の銃を自分たちに廻せ」と言つたりする。その時乃木さんの内心では激しい葛藤があつた筈です。

つまり陛下の軍について、陛下の部下として戦ふか、血肉を分けた弟が参謀である反乱軍に加担するか、さういふ葛藤の中で、どこに忠誠の対象を置くべきか、そのロヤリテイを試されたわけです。しかし、乃木さんの最終的な処置は非常に明快でした。河上徹太郎氏の『吉田松陰』によれば、乃木さんは弟に向つて、「お前は養父に孝行を尽くせ、俺は陛下に忠義を尽くす」と言つたさうです。同じく国を思ふのだけれども道が違ふ、仕方がないといふわけです。「もし銃が欲しければ実力で取りに來い、自分は部下の連隊を率ゐて命がけで戦ふであらう」とも言つてゐます。(因みに萩の蜂起は失敗に終り文之進は自決します。)自分のロヤリテイをどこに向けるかといふことに対して、二十代後半の乃木さんには非情な試煉があつたのですが、それを一まづ乗り越えるわけです。

そして、その翌年西南戦争が起ります。援軍を率ゐて小倉から熊本に向ふ途中、田原坂で軍旗を奪はれるといふ重大な事件が起ります。この事が三十五年後の殉死につながつてゆくことは後で述べます。

乃木さんは西南戦争の翌年、東京の歩兵第一連隊の連隊長として、中佐になつて東京に帰ります。その時、大久保利通の暗殺があつて、国葬が行はれました。その時の儀仗隊長が乃木中佐でした。騎馬に乗つた乃木中佐の姿を見てゐた人の中の一人に、後の静子夫人がをられたのです。静子夫人は薩摩の湯地家の七番目の子供で、娘の時の名前を「お七」と言つて

みました。しかし、結婚後、お七といふ名は江戸ではあまりいゝ名ではない。(八百屋お七の例)。俺の号は静堂だから、その静をお前にやるから静子とつける、といふことで静子といふ名前になられたさうです。

乃木さんには日記が残つてゐるのですが、結婚式は暑い盛りの八月だつたやうです。朝起きてから処理した公務が丹念に記されてゐて、一番最後に「本日婚儀」とたつた四字書いてある。司馬遼太郎さんは、それは乃木の「含羞」だらうと言つてゐますが、その通りでせう。司馬さんの『殉死』の中で読んだのですが、大正元年九月十三日の御大葬の日、その朝、盛装して御遺骸に別れに行く。乃木さんは陸軍大将の軍装、奥さんは着付けが三時間くらゐか、十二単衣のやうな礼服を着て行かれる。一緒に出掛けられる時、その礼服の襟に糸屑が付いてゐたさうです。その糸屑を乃木さんがちよつと取つてやつたといふことが書いてあります。私はさういふ小さなことを読んだ時、乃木さんの人間がふと垣間見られる感じがしました。姑の寿子さんは随分やかましい人だつたし、夫の乃木さんは「厳格主義」の権化のやうな人で、夫人は封建道德の犠牲になられたといふやうな浅薄な断定は慎むべきでせう。

日 露 戦 争

乃木さんの運命を最も大きく決定したのは日露戦争ですが、その前にあと二つくらゐ重要なことがあるのです。一つは明治十九年、三十九歳の時に陸軍少将としてドイツに留学されたことです。当時、既に森鷗外がベルリンに留学してゐました。「独逸日記」によりますと、鷗外は乃木さんに会つて人格的に無言の感動を受けたやうです。鷗外は、乃木少将と、後に参謀総長になり、日露戦争の直前に惜しくも死亡した川上操六少将の二人に会つたのですが、「乃木は長身巨頭沈黙厳格の人なり」と記してゐます。乃木さんの留学は一年間でしたが、その短い期間に十回近く会つてゐます。

ドイツ留学の後と先で乃木さんは全く變つてしまひます。後の乃木さんは謹厳で近寄り難い忠義の権化だといふ感じがしますが、連隊長になつて東京に帰つた三十一歳から、ドイツ留学まで、三十代の日記には、茶屋酒に浸つて、時にはその茶屋から連隊に出勤したりしたといふ記事も見えます。さういふ事実を見ますと、萩の乱で弟が戦死したり、先生の玉木文之進の自決があつたり、西南戦争の軍旗喪失があつたり、さういふ心の傷が疼いてゐたのでせう。紬の着物を着て、角帯を締めて女とたはむれる乃木さんの姿を想像すると、ああ、さ

ういふ過程をやはり乃木さんは辿られたのだな、さぞ苦しかったのだらうなといふ気がして、乃木といふ人を見直すやうな気持ちになります。何が乃木さんを一変させたのか。それはドイツの社会で軍人が果してゐる道義的役割といふことだったのです。勿論戦術面の勉強もあつたでせうが、乃木さんが身につけて帰つたのは端嚴な軍人の美学とでもいふべきものでした。日清戦争には旅団長として中将で出征されますが、この戦争で乃木さんは旅順攻撃を担当します。ところが当時の支那軍の旅順要塞は非常に手薄な要塞だったらしく、一日で陥落します。そのことが、旅順は落し易いところだといふ先入観になり、やがて十年後のあの悪戦苦闘につながつてゆくわけです。

そして、運命の日露戦争を迎へるわけです。小林秀雄先生が乃木さんを論じてをられる点については後で述べますが、歴史といふものは、ある特定の人間に狙ひを定めたやうに、大きな悲劇を強ひるものだと言つてをられます。乃木さんと旅順といふ組合せは、まさにさういふ、誰かが演じなければならぬ悲劇だったのです。御承知のやうに日清戦争で日本は遼東半島を取りましたが、三国干渉によつてロシアに奪ひ取られました。当時の国民は「臥薪嘗胆」と言ひましたが、日本にとつては痛恨の極みでした。その日本から取り上げた旅順に、ロシアは八年の間に大要塞を作り上げたのです。

それは戦史に例のないやうな強固な要塞でした。旅順要塞の砲座のベトン（コンクリート）

の厚さは一メートル三〇センチだつたといひます。一番外側に鉄条網、それから外堀、機関銃の銃座、内堀、砲座といふ順になる。丁度播鉢の底のやうな旅順口の外側の山に、魚鱗のやうに縦横無尽に要塞が作られてゐる。それを落さなければならぬといふ運命に立ち至つた。やはり宿命としかいへないのです。

戦後は時流に乗つて、もつぱら乃木愚將論が横行しましたが、福田恆存さんは「乃木將軍と旅順攻略戦」でそれに反論を加へてをられます。

《私は爾靈山にれいざんの頂上に立ち、西に北に半身を隠すべき凹凸すら全くない急峻を見降した時、その攻略の任に當つた乃木將軍の苦しい立場が何の説明も無く素直に納得でき、大仰と思はれるかも知れませんが、眼頭が熱くなるのを覚えました。／＼乃木將軍が日本の「象徴」なら、旅順要塞はヨーロッパ列強の「象徴」と言へませう。》

つまり旅順といふのは、日本人が感覺的に西洋近代といふものに始めて出会つた経験だつた。そこに肉弾突撃をしなければならぬ、さういふ羽目に追ひ込まれたのです。

第三軍が結成されて、乃木さんが宇品から出航間際に、三十七年五月ですが、長男勝典が南山で戦死をします。日記には「勝典、戦死の報あり」とだけ記されてゐます。そして三十七年十一月三十日、次男保典も二〇三高地で戦死します。二〇三高地が落ちた時、有名な次のやうな漢詩があります。

《爾にれい山さん険けんなれども豈あに攀よじ難がたからんや／男子功名かん艱がたに克かつを期かんす／鉄血山を覆かうて山形改かへまる／萬人ひじ齊ひとしく仰あがぐ爾にれい靈りやう山さん》

二〇三高地を爾にれい靈りやう山さん―爾にれいの靈りやうの山さん―と呼ぶ乃木さんの詩魂の卓たつ拔はくさもさることながら、この呼びかけの中には自分の命令で死んだ六万九千の部下、その中に勝典も保典もふくめて無量の感慨がこめられてゐます。「一人息子と泣いてはならぬ、一人死なせた人もある」といふ俗謡が、当時の民衆の思ひを伝へてゐます。

日本の教科書で日露戦争に言及するとき、何故与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」だけをだすのでせう。さういふ文壇の中枢にゐた華やかな人とは全く無縁のところ、無名の兵士たちはどんな思ひを歌つてゐたでせうか。猿田只介といふ人の歌を紹介しませう。

待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬになにとはなしに

君の為国の為なりとはいへど老いしちち母思はぬにあらず

いさましきはたらきせよといひさして涙にくもる母のみことば

ふた親おやに妾めかけつかへむ国のためいざとはげますけなげなる妻

門の辺におくるみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるる

手をつかへなみだぐみたる教子おしごの姿を見れば胸さけむとす

いざやいざ朝日のみ旗おしたててふみにじらなむ露の醜草しごくき

かういふ歌を詠んで、私情と公情の葛藤の中で、後ろ髪をひかれるやうな思ひをしながら出て行つた大勢の人たちの犠牲の上に、辛うじて日本は大国ロシアに勝つことができたのです。

殉 死 の 衝 撃

明治四十五年七月三十日午前零時四十三分、明治天皇は崩御されます。たまたま乃木さんはその時宮中にゐて、平癒をお祈りしてゐて最も早く崩御の報せを聞きます。年号が大正と改まつたことを確認して、帰宅するとすぐ「乃木希典」といふ表札をはずしてしまひます。現身の乃木さんは、あと四十日ほど生きられますが、少くとも七月三十日の段階で表札はなくなつてゐたのです。

大正元年九月十三日、明治天皇の御大葬の日です。午後八時、葬列は宮門を発し、青山練兵場の葬祭場でお別れの式があり、京都の桃山まで御遺骸を送るといふ順序です。その八時の甲砲を合図に、乃木大将夫妻は自刃されます。十ヶ条からなる「遺言条条」の第一条に、

自分の死は誠に恐れ多いけれども陛下の御跡を追ひ奉つて自殺するといふこと、それから明治十年の西南戦争の時の軍旗喪失の罪の償ひをすることが明記されてゐます。勿論、乃木さんは私的なことには全く触れてゐませんが、萩の乱で戦死した弟のこと、旅順で死んだ勝典、保典のこと、七万近い部下の戦死者のこと、それらすべてを軍旗喪失といふ一点に集約したのだと思ひます。

今の近代文学研究者の中には、漱石の『こゝろ』の主人公である先生の妻の名が「静」であることに注目して、これは乃木静子さんを意識した命名だ。そして、先生が静の心を純白のまま残して死んで行くといふ設定は、乃木さんの夫人道づれへの批判だといふ説をなす人があります。しかしこれは予断に基いた間違ひです。何故なら、遺書の最後の宛名は四名で、静子夫人の兄湯地定基、玉木家の当主玉木正之、実弟の大館集作、それに静子夫人の名が明記されてゐます。道づれにする意図があれば、どうして遺書の最後に夫人の名を書くでせうか。御夫妻の辞世は次の通りです。

うつし世を袂去りましし大君のみあと慕ひて我はゆくなり
(乃木希典)

出でまして還ります日となしときく今日の御幸に逢ふぞ悲しき
(乃木静子)

まことに自然で、悲しくも美しいしらべてせう。

鷗外は当時軍医総監ですから、お車に従つて青山に行き、帰途殉死の報を聞くのです。しかし、その前に、明治四十五年四月二十四日、鷗外日記に乃木さんに関する記述が出て来る最後のものですが、次のやうに記されてゐます。

《乃木大将希典来て、赤十字に関する意見を申せしを謝し、Carmen Sylva妃に逢ひしいとを語り、白樺諸家の言論に注意すべきことを托す。》

後で触れますが、この「白樺諸家の言論に注意すべきことを托す」といふ言葉に注意しておいて下さい。これは乃木さんが明治四十四年、イギリスのジョージ五世陛下の戴冠式に行つて、帰途詩人としても有名だつた、ルーマニアのカルメン・シルヴァ妃に会はれるのです。その時日本の紅葉の美しさに言及された妃に、乃木さんは学習院の庭の紅葉を送り、その御札に妃が羊皮紙にドイツ語で四行詩を書き、美しい紅葉の写生をして返礼されたといふ逸話もあります。無骨一遍の封建道徳の塊といふイメージとは全く別のものがありませう。白樺諸家の言論とは、武者小路実篤や志賀直哉の国家否定の人類主義に対する危惧の表明だつたと思ひます。話がもとにもどりますが、御大葬が済んでの帰途、既に十四日の午前二時頃、鷗外は殉死の報を聞きます。《途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。余半信半疑す。》と日記に書かれてゐます。明治十九年に始まつた二十五年の歴史が一瞬鷗外の胸をかすめたこと

でせう。鷗外にとつては決定的な衝撃だつたと思はれます。そして九月十八日の日記には「午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を舛して中央公論に寄す。」と書かれます。鷗外は乃木殉死の感動を、なまで出すことを抑制して、興津弥五右衛門といふ武士の殉死を通して、自分の強い感動を表明したのです。以後彼が歴史小説の世界へ入っていくことは周知の通りです。

漱石の場合は、鷗外のやうに間髪を入れぬ反応ではなかつた。これは人間関係の違いもあるからでせう。殉死後一年くらゐ経つて、一高で「模倣と独立」といふ講演をします。

この「独立」といふのは、オリジナルといふ意味なのですが、人の真似のできないものとして三つ挙げてをります。それは嘘偽りのない真実の告白といふこと、日露戦争、乃木さんの殉死の三つです。

《乃木さんが死にましたらう。あの乃木さんの死といふものは至誠より出たものである。乃木さんの行為の至誠であるといふことはあなた方を感動せしめる。》

「至誠」といふ言葉で真つ先に浮ぶのは、松陰先生の「至誠にして動かざるもの、未だこれあらざるなり」といふ言葉でせう。松陰の「至誠」は少くとも漱石までは確実に生きてゐたのです。「こゝろ」の先生の遺書の中に次のやうな記述があります。

《すると暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて

天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく胸を打ちました。》

さういふ言葉があつて、奥さんが「では、あなたは殉死でもなさつたらいいでせう」といふやうにからかひます。冗談で言つた「殉死」が、乃木殉死となつて眼前につきつけられたとき、先生の死の決意は固まるのです。「明治の精神に殉死する」といふ遺書を残して先生は死んで行きます。漱石は「こゝろ」といふ作品を通じて、明治といふかけがへのない一回的な、偉大な時代への心をこめた鎮魂歌を捧げたわけです。

「白樺」以後

ところが、漱石、鷗外の次の世代の人たちは全く違つた受け取り方をしました。例へば志賀直哉は殉死の翌日の日記に書いてゐます。

《乃木さんが自殺したといふのを英子よきこから聞いたとき、馬鹿な奴だといふ気が、丁度下女かなにか、無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな感じられた。》

英子は彼の異母妹ですが、冷酷なほどの無関心が見られます。武者小路はもう少し人間的です。それは腹を立ててゐるからです。「白樺」誌上の「三井甲之君に」の中で、次のやうに

述べてみます。

《ゲートやロダンを目して自分は人類的といひ、乃木大将を目して人類的分子を少しももたない人といふのに君は不服なのか。／さうして君は乃木大将をロダンと比較して、いづれが人間本来の生命にふれてゐると思ふのか。乃木大将の殉死が西洋人の本来の生命をよびさます可能性があると思つてゐるのか。／ゴッホの自殺はそこへゆくといふと人類的の処がある。》
ゲートやロダンやゴッホといふやうな人を持ち出して来て、次元の全く違ふことをむきになつて言つてゐるといふ感じです。しかもこれは武者小路の見込み違ひでした。アメリカのウォッシュバアンといふ新聞記者が『乃木』といふ名著を書いてゐたのです。乃木殉死は西洋人にも衝撃的な感動を与へたのです。もし武者小路が『乃木』を読んでゐたら、僕の考へは間違ひだったと訂正したかも知れません。

乃木さんに対して最もつまらない作品を書いたのは芥川龍之介でした。大正十一年に書かれた『將軍』といふ作品です。これは勿論フィクションでして、乃木將軍の副官に中村少佐といふ参謀がゐて、その参謀の後日譚としてN將軍の言動が徹底してぬ擲揶揄笑の對象となり、極端に誇張された俗物化が行なはれてゐます。残念ながら芥川のやうな機智や諷刺の手法では乃木さんの人格を描くことは出来ないでせう。人間としての桁が違ふのです。芥川が描ける人間と描

けない人間がゐるわけです。「鼻」の禪智内供や「羅生門」の下人は描けても、乃木といふ人格を描くには、芥川は矢張り器量が少し小型過ぎたわけです。

この『將軍』といふ作品の時代設定は大正六、七年頃で、中村少佐は少将になってゐて、大学生である息子との問答が中心になります。息子は乃木夫妻が殉死の日に写真を撮ったことに、売名行為ではないかといふ批判を持ちます。中村少将がN閣下を弁護するのに対して息子は次のやうに言ひます。

〈無論俗人じゃなかつたでせう。至誠のひとつだった事も想像できます。唯その至誠が僕等には、どうもはっきりのみこめないのです。僕等の後の人間には、猶更通じるとは思はれません。〉

漱石が使つた「至誠」といふ言葉が、芥川では既に信じられなくなつてゐるのです。大正期といふ時代が、乃木さんに対する評価が最も低かつた時代ですが、志賀のやうな無視、芥川のやうな諷刺、武者小路のやうな敵意、さういふものでしか、乃木さんといふ人が分からなくなつた時代でした。たつた十年ほどの間のこの落差は凄いなと思はれます。

そして昭和の時代が来る。小林秀雄先生が「改造」の昭和十六年四月に「歴史と文学」を書いて、先ほどのウォッシュバアの『乃木』に触れられます。乃木殉死から丁度三十年、一世代経つてゐるわけです。ウォッシュバアはアメリカの新聞記者で、二十八、九歳で旅

順攻略戦に従軍し、乃木といふ人間をつぶさに観察し、深くその人格に感動します。彼にとつて乃木は「ファザー乃木」で、さういふひたむきな愛情が見事な人間像を刻み上げてゐます。対象に対する愛情がいい物を産み出す。不平とか悪意からいい物は生まれえないといふのは、単に作品だけではなく、人間関係に於いても同じことでせう。「乃木」の中にこんな表現があります。あの旅順攻略戦は六月に始まり十二月に終わりますから、半年続いたわけですが、その間乃木さんは戦死者のことをひと言もいはない。しかし次々に手元に送られてくる名簿を見てゐる將軍の顔は、ひと月毎にその皺が「傷痕」のやうに深くなつてゆくと書いてゐます。小林秀雄先生は芥川の『將軍』と比較して次のやうに書いてをられます。

《芥川龍之介の作品とまるで違つてゐる点は乃木將軍といふ異常な精神力を持った人間が演じねばならなかつた異常な悲劇といふものを洞察し、この洞察の上に立つて凡ての事柄を見てゐるといふ点です。僕は乃木將軍といふ人は、内村鑑三などと同じ性質の、明治が生んだ一番純粹な理想家の典型だと思つてゐますが、彼の伝記を読んだ人は、誰でも知つてゐる通り、少くとも植木口の戦以後の生涯は、死処を求めるといふ一念を離れた事はなかつた。》

少し長い引用になりましたが、小林先生は「さういふ將軍にとつて死を前にして写真を撮るくらゐのことは平気ですよ」といふやうに書いてをられました。誠に見事な近代批判とい

ふべきでせう。

を は り に

最後に私は一つ明治陛下と乃木さんの人間的に非常に美しい挿話を紹介して置きます。これは司馬遼太郎さんの『殉死』に書かれてゐます。明治四十二年のこと、乃木さんが参内された時、東溜間といふ控への間で、陛下がかなり酷い風邪を召してをられることを侍従の口から聞かれたのです。その時、乃木さんは顔色を変へて、「お熱はどうか、お食事はどうか」とたてつけに聞いてをられました。が、ゐたたまれなくなつた。陛下がお休みになつてをられるところまで長い廊下を通つて行かなければ行けないのが、もう待ち切れなくなつた。

乃木さんは御承知のやうに、普通の将官は膝までだけでも、乃木さんは特製で股の中くからみまである長い長靴を履いてをられた。その靴のまま、白い砂を敷きつめた内庭をそつと真つすぐに御寢所に直行された。ザクザクといふ音を風邪でやすんでいらつしやる陛下がお聞きになつて、「ああ、乃木が来たな」とおっしゃる。乃木さんは慌てふためいて、「陛下の御容態はどんなふうか」と聞くわけです。女官が「御心配いりません。お熱も下りかけてゐるし、お食事も進んでをられますからもう大丈夫でございます」と答へる。そして「実は陛

下は閣下がいらっしやることを足音で御存知でした」と言ったのです。さうすると乃木さんは、初めて自分が靴のまま内庭を横切つて来たことに気付かれたのです。そしてまた顔色を変へて、その長靴を脱いで裸足でそつと歸られた。そのことをまた陛下はお聞きになつて、「乃木は裸足で歸つたか」といつて、弾むやうに高らかにお笑ひになつた。大体そんな逸話だつたと記憶してゐます。さういふ君臣の触れ合ひの中で、乃木さんはごく自然に陛下の御跡を慕つて行つたのです。さういふ死に方といふのは、近代作家などが小理屈をこねて諷刺しようとしても、手に負へるものではありません。何よりも御夫妻の辞世二首が、すべてを語り尽してゐると思はれます。

昭和史の一端

(株)宝辺商店代表取締役
国民文化研究会副理事長

宝 辺 正 久



藤原宮跡より天香具山を望む

学生時代と大東亜戦争

少年期の思ひ出につながるもの
解決の曙光も見えない支那事変
「くれゆく秋の空をながめて」

友情の歌

ふるさとを憶ふ歌

学生時代と大東亜戦争

私は六十四歳の年を数へますが、忘れることのできないのは大東亜戦争を身を以て戦ったと言ふことです。私にとつては大東亜戦争は非常に感動的な事件なのです。沢山の友人がこの戦争によつて亡くなりましたし、故郷の家も空襲で焼けました。国が敗れ、国民の生活が壊滅したのですから悲痛の上もない事件ですが、その数年前私たちは丁度皆さん方の年頃で学生生活を送つてゐました。そして国の行く末にとつても私達自身の前途にとつても、日に日に深刻になる時局を見ながら思ひに沈んだこともありまゝ。そして大東亜戦争劈頭のハワイ海戦勃発を迎へるわけです。学徒動員による出陣はそれから二年後になります。

感動的と申しましたので、異なことをいふと思はれるかもしれませんが、あなた方が生を享けて二十年、そのあなた方は、本当に国民的な感動といふものを自分の生涯と結び付けて感じられたことがあるだらうか。私達にとつてあの戦争は四十年前のものであるが、更に遡れば林房雄の言ふやうに、幕末以来百年をかけた日本の自立を戦ふ戦争であつた。それが大きな痛手を残した敗戦となり、その後更に、四十年経過して現在に至つてゐる。この長い歴史の中の小さな一端を私が体験したのでありませうが、その一端の体験は私にとつて決定的

なものであったのです。

振り返って見ますと、昭和十六年十二月八日、霹靂のやうに宣戦の大詔が下ったのですが、実は私どもの小さい時から日本が迎へる大きな試練、障碍は徐々に、我々の周辺に迫つてゐたといふ実感があります。私どもが小中学校に通ふ頃は、日露戦争から三十数年が経つてゐたと思ひますが、あなた方が大東亜戦争を回顧されるのとおほよそ似かよつた時間の隔たります。時間の隔たりはあつたけれども小学校の行事には陸軍記念日、海軍記念日といふのがあつて、日露戦争の奉天会戦でロシヤ軍を敗走させ、講和のきっかけをつかむことになつた三月十日、日本海でバルチック艦隊を全滅させた五月二十七日、栄光に満ちた民族の思ひ出は教室の中で、遠足の庭で、語り継がれてゐたのです。疑ひのない思ひ出が私たちの少年期にはありました。それがどんなものであつたか、最近読んで非常に感動した文章がありますのでそれを御紹介します。

少年期の思ひ出につながるもの

村松嘉津先生とおっしゃる、御年齢は八十歳を越えられる御婦人でフランス文学を専攻された方ですが、この方の『明治と昭和』といふ最近出版された時評随想集の中の一章です。

「もの心ついてから母と姉から聞かされた所だが、明治三十七年が暮れ、明治も三十八年のお正月の淋しかったこと！国中が火の消えたやうだった。どこの家も門を閉ざし、雨戸さへ明けず、子供たちもひっそりと家に籠って笑ひ声さへたてなかつた。所がその元旦の夕刻になると、どこからか『号外！号外！』チャリンチャリンと腰の鈴を鳴らしながら『旅順陥落、萬歳々々』と後から後から叫んで駆けて行った。その声に門を開けた人々の顔は昼間とは打って変わった大ニコニコ。夕暮れの空に国旗が翻り、子供等も晴着を着せられて騒ぎ始めた。お正月の賑はひは戦勝を告げる号外屋の声からやっと湧き上った。国民はそれほど敗戦を憂慮してゐたのだった。」



海陸の精銳が続々と出征し、やがて三十過ぎの子備兵が出、更に後備兵も狩り出され、この上は国民軍が募られるばかりだと国民は誰も意識してゐたさうだ、と村松先生は顧られなから言つてをられます。

「筆者が後年知つた明治天皇の御製

子等はみな軍のにはにいではてて翁やひとり山田もるらむ

は、当時の国情を最も鮮やかに示し給うたものと思はれる。」

日本の勝利は、ロシアと国境を接してゐるトルコやフィンランドでも非常に感動した大勝利には違ひないけれども、天皇陛下の御心配、国民の憂慮、全てを集めて戦ふ日本の国情がこの御歌によつて偲ばれる思ひが致します。

日露の開戦時の国民的感動を物語る文章も読んでみます。これは二日目にお話された山田輝彦先生が旧制佐賀高校の恩師小田龍太教授の綴られたものを、以前国文研の機関誌「国民同胞」に発表して下さったものです。日露戦争が始まった時、小田龍太先生は新潟の田舎の雪深い所で伯父さんの家に下宿してをられた。

「時に伯父の宅、家人は寢静まり、余一人小さきランプの下、こたつに入りて勉強せり。」

蓋し三月末の学年試験に對する準備なりしならん。屋外に積雪三、四尺、終夜降りやまず。降雪の後は特に四辺静寂なり。夜半とおぼしき時、戸を叩く音す。「スハ」とランプ片手に玄関に出て、土間におりたち、戸を開くれば、雪だるまの如き蓑笠の顔見知りの役場の小使、ころがるが如く入り来る。吾一語「来タカ」彼一語「来マシタ」

伯父は早速結束して登庁、令状送達事務に従事す。余は床に入りたるも、ねむられず、やがて夜あけ、一天快晴、朝日に映ずる銀世界は北国ならではの美観なり。登校すれば校内わるるが如し。「ヤツタナ」「ヤツタゾ！」やがて屋内体操場に集合、昨夜半令状を受けたる軍籍の教官五人の壮行式なり。当時汽車もなき時代、生徒の有志は雪を踏んで此等入営の諸先生を教室の外まで見送れり。越後辺地の中学生すらかくの如し。全く日本全土武者振ひして立ち上がりたるなり。」

全国民が国の運命、その一挙手一投足を、胸をときめかし拳を握りしめながらじっと見守つてをる。戦は無事に終るか勝つか、固唾を呑んで全国民が見守つてをる。その武者振ひと沈痛の凝視は日露戦争を体験した当時の国民の偽りない姿であったと思ひます。

どこの国民でも民族でも、避けられない戦争は戦はなければならなかつた。その避けることのできない戦争を戦ふ国民の心情は、それは国民にとって実に感動的な事実です。出来ることなら避けたい悲劇を沢山伴ひながら、それは感動的であつたと思ふのです。これはいま

二度と繰り返すことはできないものですが、日露戦争を戦ひ、大東亜戦争を戦つた、あなた方の先輩に当る日本人の働きが、あなた方の時代になってわからなくなつたといふことはありませんか。私はそれを恐れて言つてゐるのです。

解決の曙光も見えない支那事変

私は昭和十四年に旧制山口高等学校に入りました。その年の初めての夏休みに郷里に帰つてをりますと、市内の各中学校から上級学校に行つた者達の学生集會が図書館で開かれるといふので参りますと、壇上に立つた大学生から、始めて、いま戦はれてゐる支那事変は帝國主義戦争である、といふことばを聞きました。あとで段々氣付かせられることですが支那事變を遂行する戦争の仕方と日露戦争の仕方とは、何か根本において違ひがあつた。それは丁度、この時のマルクス学生が、今次の戦争を軍閥、財閥等のブルジョワ権力に主導された戦争と規定し、それに反対すべきと宣伝したその戦争觀が支那事變の周辺にあつたことに示されるのですが、当時私はその大学生の演説を理解し反撥することはできなかつたけれども、日露戦争に対する國民的回想を、一人の日本人として持ち続けてゐる私の不快感を誘つたのは事実でした。

やがて私は誘はれて小田村さん始め、その他先輩の方々の日本学生協会を知り、学問と生き方の根本に関はることを教へられるのですが、迷ふこと多く、大切なことに気付かせられながらも怠惰を重ねるばかりでした。

「解決の曙光も見えない」といはれる支那事変は、宣戦の布告もないままに広大な戦線に拡大し、相手政権を相手にせずとし、帝国主義戦争ではないとの弁解を布告して泥沼に入つてゆくのですが、一方、国内を社会主義計画経済に刷新し、「新体制」を作ることが戦争遂行に必須であるとの戦争論は官界思想界を風靡してゐました。かくして、「支那事変は思想戦である」との認識に基づいて、間違つた戦争指導理論を思想的に破碎することは喫緊の情勢でありました。

支那事変はたうとう大東亜戦争になつてゆきますが、戦争遂行の基本的仕方に關はる考へ方は改まらず、平和克復の想定自体が反戦思想とされる硬直した思想はいよ／＼色濃くなつてまゐりました。

「くれゆく秋の空をながめて」

さうした時代に学生生活を送つた私たちが古典を読み、あるいは和歌に詠まれた言葉に感

動し、そのことによつて時代を生きる支へにしたといふことをお話したいと思ひます。

明治天皇が明治三十九年にお作りになられた御製、秋の夕と題されて

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

この御歌について、三井甲之先生は『明治天皇御製研究』といふ御著作の中でかう書いてをられます。この御著作はいま国文研から新書版として復刊されてゐますが、当時私たちは岩波文庫の『明治天皇御集』と共に、熱心に何度も読んだものです。その中に、

「この大御歌ををろがみよみまつれば、国のため身をすてし民をあはれませ給ふ大御心をあふぎまつりて涙をもよほさしめらるゝと、もに、大御歌のひゞきはとこしへにわれらの心にとゞめしめらるゝのである。秋のあはれとかなしさとをよみてかくばかりいのちのちからのこもつた歌はまことに稀有である。」

とありますが、さういふ言葉に導かれてこの御製を拝読し心に深く刻みつけられたわけです。

この「くれゆく秋の空をながめて」といふ御歌によく似た歌があります。源実朝の有名な次の歌です。

きさらぎの廿日あまりのほどにや有けむ、北むきのえんに立出て、夕暮の空を

ながめて、一人をるに、雁のなくを聞てよめる

ながめつ、おもふも悲し帰る雁ゆくらむかたの夕ぐれのそら

二月、春になると雁は渡り鳥だから北に帰ってゆく。この帰ってゆく雁が空に羽音を立てて飛び去ってゆくが、その夕暮の遠くに小さく消えてゆく彼方に目をやって、思ふも悲しと作者は歌ふ。正岡子規が人麿以来の歌人であらうかと賛嘆したこの源実朝の歌を併せ読みながらこの御製を味はひますと、秋の夕暮の空をながめて、国のために亡くなった人を思ふ、といふ御歌の深い御心がしみじみと感じられます。御歌の調べが我々読む者の心に迫つてくると、作者天皇の御心と私どもこの御歌を読む国民の心が、途中に何一つ遮るものなくつながらるといふ経験をもつことになります。この御歌の作者が天皇であり、御歌を読む私どもはその天皇をお慕ひする民であるといふことを自覚すればする程、私どもの心はこの御歌の作者天皇に真っすぐに結び付く。わが国の進路の障碍をどうしても打ち砕き、国民がいのちに代へて守らねばならないといふ危局に立った時、この御歌一首を戴くだけでほかに何がいらう。この天皇に真っすぐに結びつけられる力を戴いて何ぞ恐るゝものがあらう。

私たちがその時代に一緒に学び、戦った同信同志の方々で戦死したり病死したりされた人

達の遺歌遺文が『いのちささげて』正統二冊にまとめられてゐますが、その中の吉田房雄さんの歌に

明治天皇御集一卷これしあらば恐るゝものなしとしみぐくおもふ

といふのがあります。この歌は、国民的感動を生と戦ひの力源に仰いだ私達の学問の中心的体験を告白してゐると思ひます。

友情の歌

私たちがあの時代にどんな生き方をしてゐたか。『いのちささげて』の中から二、三を取り出してお話を続けます。

先程お歌を紹介した吉田房雄さんといふ方は、旧制新潟高校から東大法学部に進まれましたが昭和十六年秋、法学部教授の田中耕太郎氏の仏印出張を批判し阻止しようとしたかどで退学処分を受けられました。十七年出征、十九年三月ニューギニアで戦死。

吉田さんが退学処分を受けられたあと、出征する迄の間に「象牙の塔に闘ふ」といふ論文を書かれた。その一節、

「兎も角、僕は此の手馴れたペンを投じなければならぬ時が来た。勅命である、眼前には、やがて赴くべき戦線の情景が去来する。旧臘、一先輩から贈られた御歌の一首を心ゆくまで朗誦したい。

ハワイ海戦に仕へてかへらぬいくさ艦ふねしぬぶおもひを君にさゝげむ」

「ハワイ海戦に仕へてかへらぬいくさ艦」といふのは、きのふ西山さんが廣尾大尉のことを話された、あの特殊潜航艇のことです。五隻の潜航艇がハワイのアメリカ艦隊に対して決死の襲撃をした。その開戦劈頭のニュースに全国民は肅として戦死した乗組員に頭を下けたものです。皆二十歳を少し過ぎた少、中尉が艇長だったのです。この潜航艇を「しぬぶおもひ」といふのは、一身をなげうって日本の生命に帰っていった、日本を守るために自分の命を惜しまずに捧げた、その戦死者を偲ぶ思ひを、吉田君、君に僕は捧げるよ、といふその歌を吉田さんは心ゆくまで朗誦したといふのです。

その次に、寺尾博之さんの歌。

倒れたる友を嘆かずいつの日か吾もたどりゆく道と思へば

その次、百武礼之さんの歌。

ほ、よみて励ますごときうつしゑにまむかひをれば涙流るる

寺尾さんは旧制高知高校から東大農学部に入學、十八年十二月学徒動員で海軍に入隊。終戦後の八月二十日、福岡市郊外の油山で自決されました。百武さんは旧制佐賀高校から東大文学部に入學、十八年十二月学徒動員で久留米に入隊、二十年八月シンガポールで戦死された。このお二人の歌は、私も一緒でしたが十八年の秋、今生の思ひ出にと十人ばかりで霧島に旅行した時に作られてゐます。その一年前に、私たちの共通の友人であつた江頭俊一さんといふのが九州大学附属病院で結核で亡くなりますが、日本の無窮の生命を祈り、先輩に謝し、後事を我々に托すといふ厳肅壯烈な最期でした。その江頭さんを思ひながらの旅行であり、二人が歌つたのも江頭さんと共に思ひ定めた道を行かう、といふ友情の歌であつたのです。

ふるさとを憶ふ歌

その次に、松吉正資さんの歌。

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな

松吉さんは、旧制山口高校で私の一年後輩でしたが東大法学部に進学し、十八年十二月学徒出陣で海軍に入り、航空隊の特攻で出撃し二十年五月、沖繩で戦死しました。この松吉さんも寺尾、百武と一緒に霧島に遊んだ仲間の一人ですが、この歌はその霧島から帰って、彼のふる里、山口県の大島といふ、蜜柑山の美しい島で、出征までの一ヶ月かそこらを一人静かに過ごしたであらう、その彼の胸に去来したふるさとの人の情を心こめて歌ったものでありませう。彼が「人のなさけのあたたかきかな」といふそのふるさとを思ふ心は、祖国日本と言ふ以外には呼びやうのない、私どもの生きがひの的、我々の命の源流、それを実に具体的に「ふるさとの人」といふふうに彼は感じて歌ってゐるのです。

私は本当に迷ひ迷つてこの戦後を送ったやうな気も致しますが、振り返ってみますと、この亡くなった友達と一緒に御製を拝読しながら送った、あの僅か二年そこらの学生時代の中に、私のその後の生涯を支へてくれたものの全部があつたやうな気が致します。私が直接経験することの出来たこの六十年、父や祖父の思ひ出を含めればおよそ百二十年、その時代的諸相は変化したでせうが、その歴史を内面から支へるものが一貫してをってこそ共通の日本を相続してきたと言へるのではないでせうか。私どもの友はたくさん戦死しました。そして

彼らは、他人事としてではなく実に感動を以て日本を思つてをった。その事を皆の人々が偲ぶことが出来なくなつたらどうなるのでせうか。生き生きと我が日本を胸の中に抱いていけるやうな、さういふ勉強を一緒にしてゆきたいものだと思ふ次第です。



講

義

日本の外交の歴史と現況

筑波大学教授

村松

剛



藤原宮跡より飛鳥を望む

はじめに―聖徳太子による独立国家宣言

蒙古襲来

一 神教の厳しさ

層をなしてゐる日本文化

紀元節

神道の世界

征韓論の背景

明治維新の奇蹟

独立精神の回復

をはりに―歴史への謙虚さ

〈質疑応答より〉

はじめに―聖徳太子による独立国家宣言

外交、国際関係について話をするやうにとのことですが、国際関係を考へるためにはまづ自国を、日本といふ国についての認識を、深めておくことが大切でせう。

国と国とのつきあひが外交ですから、独立国であることが外交の前提です。そして日本は現存する世界の国々のなかで、最古の歴史をもつ独立国です。この事実を、日本人自身が多くが忘れてゐるのではないかと思ひます。

聖徳太子が推古天皇の十五年、西暦でいへば、六〇七年に有名な国書を隋の煬帝に送りました。「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや。」煬帝がこれを読んで機嫌を悪くしたと、『隋書倭國傳』には書かれてゐます。

聖徳太子といふ名前は仏教の方でうけた尊称で、俗名は厩戸皇子です。この国書は厩戸皇子の起草ではないとする説も二、三あるやうですが、私は前後の事情から見て厩戸皇子が書かれたとする従来の説でいいとおもつてゐます。

それまでアジアには、皇帝はひとりしかありませんでした。シナ大陸を支配した覇者がすなわち皇帝であり、周辺の国々はシナの皇帝への冊封国です。当時の日本人にはアジアがすな

はち世界でしたから、世界に皇帝はひとりしかるなかつたことになります。

五世紀の雄略天皇の時代に、大和朝廷の力が西は九州から東は関東にまで及んでゐたことが、昭和五十三年に埼玉県行田の稲荷山古墳から発掘された鉄剣の銘文解説によつて明らかになりました。その雄略天皇に比定される倭王武が、四七八年に宋の順帝に送つた上奏文があります。宋の圧力によつて高句麗を牽制し、百済を救はうとするのがこの上奏文の目的でした。だから文面も鄭重をきはめ、自分を「臣」と称してゐます。宋の帝国の「臣」ですから、形式的には冊封国です。

ところが六〇七年の厩戸皇子になりますと、「日出づる処の天子」です。両国の関係は、明かに対等です。翌年の国書では煬帝を怒らせすぎてはいけないと思はれたのか、「東の天皇、敬みて西の皇帝に白す」となつてゐますが、対等といふ点では變つてゐません。日本はこのときから、名実ともに独立国になるのです。アジア大陸にはそれらしい、日本とシナと二人の皇帝が存在することになりました。西ヨオロッパの六〇七年といへば西ローマ帝国の崩壊期でして、国家と呼べるやうな社会機構は存在しませんでした。ヨオロッパの暗黒時代でした、多少とも国らしい形をとつてゐたのはフランク族(フランス)ぐらゐでせうか。中東では東ローマ帝国とペルシャ帝国とが無益な戦争をくりかへし、国力を疲労させてゐました。

ついでに申上げておきますと、ヨオロッパで皇帝といへば、ローマ帝国の後継者といふ意



味です。カイゼル、ツァーリはカエサル（英語でいふシーザー）のドイツ語読み、ロシヤ語読みですし、エンペラーはローマのインペラートルから来てゐます。ナポレオンは皇帝になったとき、ローマ皇帝の衣裳を身につけて月桂冠をかぶりしました。アジアでは皇帝とは、完全独立国の君主をさします。

聖徳太子の時代の日本人にとって隋は、いまのアメリカとソ連とをあはせたほどの巨大な存在でしたから、独立宣言は、大変な勇気が必要としたでせう。下手な発言をすれば、ほろぼされる。

時代は下りますが奈良朝の遣唐使に、大伴古麻呂といふひとがゐます。大伴家持の叔父さんとも、従兄弟ともいはれてゐます。彼が唐で元旦の朝賀に参列しますと、中央に唐の皇帝玄宗が坐り、その左右の第一席に新羅とチベット。第二席がサラセンと日本でした。大伴古麻呂は怒りました。新羅は唐に朝貢してゐる国

ではないか。その新羅が上席で、独立国の日本とサラセンが下といふのは道理にそむく。結局向ふも妥協して、席順を改めてゐます。これは『続日本紀』に載つてゐる史実です。それだけの誇りが、当時の日本にはあつたのです。

蒙 古 襲 来

ジンギス汗のつくつた蒙古が、フビライ汗のときに日本に攻めて来ました。例の元寇です。あれが平安朝に起こつてゐたら、大変だつたでせう。平安朝では桓武天皇が常備軍制度を廃止してしまつたために、事実上軍隊がなかつたのです。ですから武装地主、つまり武士がそのかはりを演じるやうになつて来ます。さういふ非武装の平安朝に攻めこまれてゐたら大変だつたのですが、幸ひに鎌倉武士の時代に蒙古は来てくれませんでした。長い間かかつて九州から山陰地方まで、鎌倉幕府は防衛線を築いてゐるのです。神風が吹いたので助かつたといはれてをりますが、もし蒙古が博多の完全占領に成功して、そこに十分な面積をもつた陣地を構築してゐたならば、彼らは船には引き上げなかつたはずでせう。船に引き上げないところで嵐がきても、船が沈むだけで軍隊は残つたでせう。もしも蒙古が日本を支配してゐたならば、私たちはいまごろ蒙古語をしゃべつてゐるはずでせう。といふよりは人種が變つてしまつてゐ

て、別の人たちがこの国には住んでゐることになります。

その場合、どういふことが起こつたか。鎌倉以前の文化は断片的には残つたかもしれません。ただしそれは、博物館の中です。つまり、現在の住民の生活の中には生きてゐない、といふことです。ちやうど現在のエジプトやギリシャの人びとにとつて、古代エジプトやギリシャの文化は博物館に行けばあるにせよ、それだけのものであるといふのとよく似てゐます。

万葉集から古今をへて新古今にいたる歌の伝統も、源氏物語に代表される女流の物語も平家物語も、奈良・鎌倉の仏教芸術も、一切存在しない日本の文化を考へていただきたい。ひどく薄つぺらな文化が、できあがります。文化は一度根底から破壊されますと、五百年や六百年ではもとにもどらないのです。

トインビーといふ歴史家が、『歴史の研究』といふ本のなかで、ジンギス汗に支配された地域は、東は朝鮮半島、済州島から西はブタペストにいたるまで、近代化に成功した社会は一つもないといつてゐます。今のソ連、ロシアは完全に蒙古に支配されました。東欧圏も殆ど全部がさうでして、支配は東はヴェトナム、朝鮮半島にいたります。極東では、日本だけが残つたのです。日本が異民族に支配されずにすんだといふことが、どれほどありがたいことか、それは宗教や文化を異民族によって強制されなかつたことを意味します。ただしマツカ

一サー支配の七年間はべつです。その七年間を除いて、日本は独自の文化伝統を守り、文化の連続性を保持することができたのです。

漢字は、大陸からはいつて来ました。しかし日本人は漢字といふ文字に接しても、本来の言語は棄てませんでした。ヨオロッパをローマ帝国が支配したときに、先住のゴール人は自分たちの言語を棄てて、ラテン語をしやべるやうになりました。その土俗化されたラテン語が、いまのイタリア語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語等々です。文字も、ラテン化されます。

文字といふものにはじめて接したときの日本人の驚きは大変なものだつたはずですし、その驚きを現代の人間が想像してみることはもはや不可能に近いでせう。それでも日本人はヨオロッパの先住民族の大部分とはちがつて、自分たちの言語を棄てませんでした。逆に漢字を、日本風に飼ひ馴らしてしまひました。第一に漢字を簡略化して、音標文字をつくります。波を簡略化して「は」としたり、毛を「も」にしたりして、片仮名、平仮名をつくります。

かういふ作業、つまり輸入された文字を簡略化して発音記号にした例は世界にほかにもあるのですが、日本の場合はそれだけではなく、漢字を日本風に読むといふことをやつてのけたのです。紫をシナ風に「シ」と読まずに、むらさきと読む。日本に紫に相当するむらさきといふ概念がすでにありましたから、むらさきの表現として紫の字をつかつたのです。いはゆ

る訓読み、といふものです。英語をかりに例にとれば、Paperをペーパーとよまずに、Paperと書いて「カミ」と読むのと同じでせう。外国文字のかういふ飼ひ馴らしは、日本人だけでしたことです。ほかには、例がありません。

宗教についても、同じです。仏教がいつて来ても、日本人は古くからの宗教的心性を残しました。仏教も日本風に飼ひ馴らされてしまつた、といふことができます。

もし一神教が軍事力とともにいつて来たら、無論事態はちがつたものになつてゐたはず
です。

一 神教の厳しさ

一神教は、ひとりの神を崇める宗教です。ほかの宗教は、認めません。ほかの宗教をかりに認めたら二神教になつてしまひますし、全部を許したら八百万の神々です。一神教をつつたのはユダヤ人ですが、そのユダヤ教からキリスト教と、次に回教が派生します。幹は、同じユダヤ教です。回教をつくつたモハメッドは、自分の考へこそが最も正しいユダヤ教の解釈だと思ひました。彼は初めは、自分はユダヤ教徒だと考へてゐたのです。ですから最初は、エルサレムを拝みました。ところが肝腎のメディーナのユダヤ人が彼のユダヤ教解釈を

認めなかったものですから、それで神殿をメッカに移したのです。

とにかく両方ともユダヤ教から出てゐますので、共通の道德の基本はモーゼの十戒です。十戒冒頭の第一戒は、人を殺してはいけないでもなければものを盗んではいけないでもない。「われヤーヴェ、われは嫉みの神なれば」ほかの神を崇めてはいけない。もしさういふことをしたら「その罪三、四代に」いたるべしと書いてあります。

ヨオロッパ二千年の歴史を通じて、ユダヤ人が大勢殺されて来ました。大変な迫害を、彼らは受けて来た。なぜだらうと、日本人は思ひます。しかしこれはヨオロッパ人にしてみればあたりまへの話で、ユダヤ人はユダヤ教徒です。キリスト教徒ではないのです。今でこそキリスト教も寛容になりましたが、かつては血まみれの宗教戦争をどれだけ繰りかへして来たか。キリスト教徒でないものは、そもそも人間ではなかつたのです。人間ではないものを殺しても、罪にはなりません。野良犬を殺すのと同じです。異教徒ですから、むしろ殺した方がいい。

回教の聖典はコーランです。コーランには繰りかへし、異教徒は殺しなさいと書いてあります。殺さなくても、放っておいても地獄に行くと書いてある箇所もありますが、殺せといつてゐる部分の方が多いやうです。異教徒は殺しなさいといっても、殺さないこともあるでせう。その点は回教徒も利口ですから、コーランを基にした道德体系、回教法を読みますと、

異教徒は殺しなさい、だけど相手が強すぎたらやめてもいいといっているのです。一神教とは、それほど厳しいものです。

私はレバノンに、二年ほど前に行きました。農村に行きますと、農家の脇に納屋があり、牛などを入れておく納屋です。覗いて見ましたら、牛のかはりに戦車が入っているのです。忙しいときは農民は働いていますが、暇になるとその戦車を引っぱり出して隣の村を攻撃に行くのです。お互ひに、レバノン国旗なんか掲げません。それぞれ十字架や半月旗や、宗教の旗印を掲げて戦っているのです。中東の戦争は、簡単に終りはしません。レバノンには宗教、宗派が、大きく分けて九つあります。九派が卍巴の戦ひを、演じているのです。

日本は幸ひに、一神教を強制されることがありませんでした。日本の神社には、山や岩が御神体であるといった自然信仰が多い。かういふ自然信仰は一神教の下では存立できないのです。全部潰されることになります。

五月のメイ・デイ、あれは元来北欧の春祭りです。いまは赤旗祭りになってしまひましたが、本来は春祭りだったので。北欧は春の来るのが遅い。待ち遠しくてしやうがない。その喜びの表現でして、これも自然信仰の一つですが、それがつぶされたり、あるいはキリスト教のお祭りに変はって行くのです。南の方の春祭りはキリスト教の復活祭やユダヤ教の過越の祭りに変りました。北欧の冬至のお祭りは、クリスマスになります。クリスマス・トウ

リーは樅の木でせう。ああいふ木は、エルサレムにはありません。だいたい聖書には、キリストがいつ生まれたかは書かれてゐないのです。

日本人は大晦日には除夜の鐘をきいて、それから初詣に行く。除夜の鐘はお寺さんが鳴らし、初詣は神社です。をかしいではないかと考へる日本人は、たぶん一人もゐないでせう。その一週間ほど前にはクリスマス、といふことになります。

さういふことが、どうして可能か。日本には自然信仰、あるいは魂信仰とも呼べるやうなもの、昔から存在しました。さういふものを総称して、私たちは神道と呼んでをります。その上に、仏教がはいつて来ました。しかし軍事力でこれを強制したわけではありませんから、もとの神道と仏教と一緒に共存して、さらに神仏習合といふことを日本人は考へました。二つの宗教を一緒にするといふことは、世界でも例がないはずです。

比叡山の僧兵が京都に暴れこむとき、彼らは仏像をもって暴れこんだのではなくて、日吉神社のお神輿をかついで行つたのです。興福寺と春日神社とは、同じものです。百人一首をつくつた藤原定家、そのお父さんが藤原俊成です。藤原俊成は、熱心な仏教徒でした。あまり歌ばかりつくつてゐると仏の道に背くのではないかと心配になつて、仏さまに伺ひをたてようと思ひました。それでどこに籠つたかといふとお寺ではなく、神社に籠つてゐるのです。さうすると神さまが夢枕に立ちまして、「仏の道も同じものだから心配するな」。神さまがお

っしゃるのです。仏も神も、一緒になつてゐるのです。

仏教は元来、魂の存在を認めません。ところが日本の神道の方は、魂を大事にします。そこでどういふことが起こったかと申しますと、仏教の方が妥協してしまふのです。坊さんとはともかく、少くとも大衆レベルではさうなります。「仏つくつて魂いれず」といふ諺までできあがるのです。魂を認めない仏さまに魂をいれたら仏さまはお怒りになるだらうけれども、それは問題になりません。

層をなしてゐる日本文化

神道と呼ばれてゐるものが基礎になつて、その上に仏教が来る。仏教も日本風に変質します。日本人にひろくうけいれられてゐる浄土信仰は、本来の仏教からは遠いものでせう。魂が浄土に行く、といふのですから。儒教も変ります。キリスト教も日本にはほんたうに根をおろすためには、日本的になつて来る。いまお札になつてゐる新渡戸稲造さん、あの人はきはめて熱心なピューリタンです。この人が明治三十年に、『武士道』といふ本を英語で書きました。そのなかで彼は特に切腹の章を設けて、切腹について長く論じてゐます。切腹がいかに美しい行為かを、西洋人に説明してゐるのです。

切腹は自殺の一つの形式でして、自殺はキリスト教では罪です。キリスト教世界では、自殺未遂者はむかしは死刑になつたのです。自殺者は、お墓に葬ってもらへません。道に放り出しておく。財産は没収です。ですから自殺者が家族から出たら大変でして、医者にきてもらつて、故人は精神病だつたといふ診断書を書いてもらひます。それほど厳しいものでして、イギリスでこの法律が解かれるのは昭和三十六年です。ごく最近までさうだつたのです。

明治三十年といふと、まだ十九世紀です。十九世紀の、キリスト教が厳しかつた時代に、キリスト教徒の新渡戸さんが自殺を礼讃する本を書いたのです。かういふキリスト教徒は、少なくとも聖アウグステイヌスが自殺を厳禁していらゐなかつたでせう。

日清戦争のとき、清国北洋水師の提督丁汝昌が、日本の聯合艦隊司令長官伊東中将の降伏勧告を拒否して毒を仰いで自殺しました。敵ながらあつばれである。武士の鑑であると、日本人はほめたのです。

かういふ日本人の伝統的心情を、キリスト教徒のなかには拒否する人がゐます。お葬式に行つて仏教の様式に従つていけない、などといつたりしてゐます。それでは彼らの教へは、日本の文化のなかに根をおろすことができないうでせう。

日本では一番の基礎に神道と呼ばれるものがあり、その上に仏教や儒教が来る。キリスト教も、部分的にはあります。宗教・文化が層をなしてゐるのです。ですから日本人は、結婚

するときにはだいたい神主さんのお世話になつて、こどもが生まれれば七五三で神社へ行き、ことのついでにお寺へ行つてお墓参りをして、クリスマスにはいかなるクリスマスチャンよりお酒をたくさん飲んで、死ぬときは仏さまのお世話になる。これが日本人の一般的な宗教的行動様式であると中東あたりで説明しますと、向かふはポカッと口をあけて、お前たちは気がひかといふ顔をします。多層性、重層性が、日本の文化です。

紀 元 節

二月十一日は、建国記念の日です。昔のいひ方をすれば、紀元節です。二月十一日にどうして決まつたのかと申しますと、『日本書紀』に神武天皇は一月一日に即位された、と書かれています。昔の天皇の多くは、一月一日に即位されました。なぜかといふと、陰暦の一月一日はだいたい立春の日なのです。世界中のあらゆる農耕民族にとつて、立春は春の、つまり命の蘇りの最初の基点です。宇宙が、ここで誕生します。そして命のもえる夏が来て、実りと凋落の秋が来て、冬とともに死の時代に入る。そしてまた春の蘇り、といふふう循環して行くのです。一月一日は宇宙のはじまりですから、非常に大事にされました。明治ごろまでの日本では、一月一日の主婦の仕事は、若水と呼ばれる命の水を汲んで来て、それで料理

をすることにして、これは日本中で行なはれた行事でした。天皇の即位も宇宙の始まりですから、多くの場合が一月一日でした。

しかし明治五年十二月三日に、暦を陰暦から太陽暦に切りかへました。西洋との付き合ひが大事だといふことで切りかへたのですが、実はそれだけではなかつたのです。当時の明治政府には、お金がなかつた。役人に払ふ給料が足りなかつたのです。太陽暦にしますと、明治五年十二月三日が明治六年一月一日になりますから、十二月が消えてなくなるのです。十二月分の給料は払はないですむ。また陰暦ですと明治六年が閏年で、閏月があります。で十三ヶ月分、給料を払はなければなりません。太陽暦にすれば、十二ヶ月分ですみます。明治五年で一箇月儉約できて、明治六年にまた一箇月儉約できる。二ヶ月分、儉約できるのです。それでは一月一日の紀元節を、どうするか。陰暦の一月一日は、明治六年には一月二十九日でした。これがこの年には、建国の日になります。ところが明治七年には、二月十一日になつたのです。陰暦と太陽暦とでは、日が少しづつずれます。毎年ずれるのは具合が悪いといふので、明治七年の一月一日にあたる二月十一日を紀元節として固定したのです。

神道の世界

一月一日とともに宇宙がはじまる。いまは太陽暦になつて立春の日からはずれてしまひましたから昔ほどそのことを感じませんが、それでも日本人はいつでも一月一日を大事にしてゐます。西洋にはその風習はなく、別に休みもしないのです。

それから八月のお盆。地獄の釜のふたが開いて先祖の魂が出て来る。これも仏教とは、ぜんぜん関係がありません。もつと土俗的なものです。

去年の八月に日本航空の旅客機が御巢鷹山に落ちて五百二十人が亡くなりました。その遺体を五百十九体まで識別したさうです。これは大変なこととせう。あの修羅場で、よくできたと思ひます。要するに、日本人がそれを求めるからです。つまり日本人の気持のなかでは、死者の魂は遺体の周りをさまよつてゐるといふ感情があるからです。だから遺体の断片でもほしいと、遺族は思ひます。日本人としてはあたりまへの感情ですが、一神教世界では一向にあたりまへではありません。

真珠湾には、アメリカの戦艦アリゾナが沈んでゐます。いまだに艦のなかには、千何百人の水兵の遺体があるのです。それを故郷に、もどさうとはしません。ドイツとフランスとの

国境には、十字架が見わたすかぎり並んでゐます。名前のわかつてゐる人も多いのですが、故郷に持つて帰りません。シンガポールには連合軍の立派な墓地がありますし、ビルマにもあります。死んだ場所に、葬つてゐるのです。

一 神教の信仰では、最期の審判のあと人間はみんな肉体をもつて天国に行く。だから死んでもいづれ、天国で会へるのです。お墓はそれまでの休憩所、といふ考へ方です。同じキリスト教でも回教でも個人的にはむろん差がありますが、しかし全体としてはさう考へます。たとへばサウジ・アラビアで王様が亡くなりますと、砂に遺体を埋めて石を一つおくのです。風が吹いて、石が砂で埋まる。それで終りです。サウジの王様の墓はどこにあるのかだれも知りません。

日本人は遺体の近所に魂がさまよつてゐると思ふから、御巢鷹山でも何とかして遺体の一部でも持つて帰りたいと遺族は思つたのですし、戦後四十年たつても南の島に遺骨収集団が出かけて行くのです。これを私たちは人間にとってあたりまへな感情だと思つてゐますが、さうではなくて、日本人だけに格別つよい特殊な感情です。信仰、といつていいでせう。

私たちはさういふ意味で、自分では意識しないままに神道と呼ばれる世界、神道的空間のなかに生きてゐるのです。

アンドレ・マルロオはかういつてゐます。日本人はアメリカの真似をしたとか、ヨオロッ

パの真似をしたとかいはれてゐる。特にアメリカの模倣が強いといふ。しかしもしさうなら、今ごろ東京はニューヨークになつてゐなければならぬ。ところが東京とニューヨークとは、似てゐるところはどこにもない。日本の町はアメリカの町に少しも似てゐない。日本に独特な何ものかが生きてゐる。それは一言で言へば神道である。

その伝統的な神道と呼ばれてゐるものを代表してをられるのが、日本の天皇です。世界に王室は、たくさんあります。しかしそのなかで政(まつりごと)といふこと、政治は祭儀であるといふ伝統を伝えてゐるのは、日本だけです。

別ないひ方をしますと、世界のあらゆる国々がむかしはお祭りを司る祭司王、プリースト・キングによつて支配されてゐました。ところが治乱興亡常ないものですから、祭司王はこの国でも消えてしまつたのです。日本にだけ、古代の祭司王の伝統が今日まで伝はつてゐます。世界で、日本だけです。天皇陛下の最大の行事は、大嘗祭です。

今年もまた、靖国神社の問題が騒がれてゐます。靖国神社の本来の名前は、招魂社です。招魂社の前には、招魂場ともいはれてゐました。

幕末に長州藩は、多くの犠牲者を出しました。さういふひとたちを祭るために、長州では次々に招魂場をたてたのです。その数が、最後には二十いくつになりました。大村益次郎が藩兵を廃して国民軍をつくることを企てたとき、その方針の一環として国民的な招魂場を、

東京に建てることを考へました。九段の坂上が幕府歩兵の屯所兼練習場で、その土地に招魂社をつくつたのです。魂を招くことは本来仏教にはできませんので、当然神社の形をとりました。

日本が過去において行なつた戦争が全部正しかつたといひ張る気は、私には毛頭ありません。ただ戦争のために亡くなつた人びと、祖国のために亡くなつた人たちの霊に国が報いるのは当然ですし、神社だから首相が公的にお参りしてはいけなひとなると、それは日本文化の根本を否定することになります。魂についての私たちの感覚そのものを、これは否定することです。さつきから申してまゐりました日本の文化の連続性への挑戦です。

征韓論の背景

徳川幕府はご承知のやうに、鎖国政策をとりました。鎖国の基本は、カトリックの侵略に対する防衛にありました。幕末にペリーが日本に来て、そのあと『日本遠征記』といふ本を書いてゐます。その序文のなかで、「カトリックはスペイン・ポルトガルと結んで日本を支配しようとした。つまり植民地にしようとした。これに対して日本がカトリックを放り出す政策をとつたのはあたりまで、それは日本の方が正しい」といつてゐます。

明治維新のころの日本にとつて幸ひだったのは、西洋諸国に日本を植民地化する気持がなかつたといふことでした。アメリカは西海岸まで、まだ鉄道を通してゐなかつたのです。サン・フランシスコに鉄道が通るのが明治二年で、ペリーが来たのはその十六年前ですからアジアまで進出して来られる状態ではありませんでした。パナマ運河もありませんから、ペリーは大西洋を渡つてアフリカを迂回して、インドの沖を抜けて日本に来るのです。イギリスやフランスは、できることなら日本が欲しかつたでせう。しかしインドやインドシナでエネルギーを使ひつくして、日本に陸上兵力をもつて来るほどの余力はなかつたのです。ロシアだけが、露骨な軍事的野心を示しました。シベリアといふ広大な地域の開発にはアジアの温かい港が欲しいし、食糧の補給基地も欲しい。だからロシアは明治維新の一世紀前ぐらゐから、アジアで蠢動してゐるのです。征韓論、日清戦争、日露戦争、これは簡単にいへば、ロシアの進出に対する日本の反撃でした。

有名な「征韓論争」のさい、西郷隆盛は場合によつてはロシアと戦ふ覚悟が必要だといつてゐます。朝鮮はむかしは明の、次には清の冊封国でした。清を宗主国とする半独立国だったのです。「征韓論」の背景には、その問題もありました。元祿年間に日本が朝鮮と交渉したときに、日本側の実質上の指導者は將軍ですね、朝鮮の方は王様です。將軍と王様とが、対等に並ぶわけにゆかないのです。とくに朝鮮では、將軍は官位が侍従なみでした。將軍といふ

署名では、手紙を先方が受取りません。そこで日本側が考へついた名前が、大君でした。大君は朝鮮では、皇太子の次の王子です。大君で手紙を出したら、朝鮮は非常に喜んだ。日本の実質上の元首が、私は皇太子にも及ばない身分のものでございますとへりくだつて来たと思つたのです。幕府の方も朝鮮から大君といふ宛名で手紙が来ると喜びまして、將軍をおほきみとたたへてくれたと、老中が祝辞を述べてゐます。かういふ詐欺に類することを思ひついたのは、林大学頭でした。幕府の外交文書は、明治維新にいたるまで大君です。タイクンといふ日本語は、ないのですけれど。

幕府が減じて維新政府が朝鮮に手紙を出したとき、こんどはこちらの元首は天皇です。日本は聖徳太子のときからシナにたいしても天子ですが、朝鮮の方にとつて皇帝は清の皇帝しかるらないのです。日本の皇帝を認めますと、つまり「皇」の存在を認めてしまふと、清を裏切ることになる。そこで手紙を「受けとれない」「受けとれ」。これが争ひの、直接のきつかけです。

もうひとつの問題は、ロシアの動きでした。朝鮮に出兵すべきであるとして最初にいひだすのは、吉田松陰です。松陰が江戸に出たときに北海道、樺太、千島を踏査して来た松浦武四郎といふ人物に会ひます。松浦は当時飯田橋のそばの家で、『竹島記』といふ本を書いてゐました。樺太、千島にロシアが進出して来てゐる。このロシアが日本海を抜けて朝鮮領の鬱陵島

を支配したら、日本はどうなるか。当時の日本は東北の米を、日本海を通じて大阪まで運んでゐました。もしも対馬海峡をロシアにおさへられると、西日本に米が入らなくなり、当時竹島と呼ばれてゐたこの鬱陵島には、ひとが誰も住んでゐませんでした。空島政策を、朝鮮はとつてゐたのです。

この竹島は、いまの竹島とはちがひます。いまの竹島は、そのころは松島と呼ばれてゐたのです。シーボルトが地名をまちがへて地図に書いてから、そのまま松と竹とがいれかはり、ました。この鬱陵島の重要性を松浦から知らされた松陰は、萩に帰つてこんどはまた別の、興膳昌蔵から同じことを聞かされます。

日本海航路の安全には、下関といふ港をもつ長州人は敏感です。松陰は江戸にゐた大村益次郎と木戸孝允とに手紙を書いて、竹島防備について幕府に建言書を出せといひます。現にロシアはその後、万延元年に、竹島ではなく対馬を占領しようとして軍艦を入れ、芋崎に基地をつくるのです。その当時日本には軍事力がありませんでしたから、イギリスに頼んでロシアを追つ払つてもらふのです。

竹島どころか朝鮮自体が、ほつておけばロシアのものになつてしまふ。朝鮮には殆ど軍事力がなかつたのです。「征韓論」のときにはロシアは樺太に軍隊を入れて、日本人を圧迫してゐました。ですから日本の朝鮮への出兵は、ロシアを念頭におきながら論じられたのです。

西郷さんの乾分の桐野利秋は乱暴な男ですから、岩倉具視が心配して、ロシアと戦争になるんぢやないかときくと、「私に十個大隊、八千人をくれ、さうすればモスクワを占領してみせる」。モスクワまで、歩いて行くつもりだつたやうです。とにかく征韓論も、政略的に申しますとロシアの存在が背景にあつたのです。

次の日清戦争は、中共の教科書では日本が一方的に侵略行為を行なつたやうに書いてゐます。とんでもないことです。

朝鮮の宗主権は歴史的に清にありましたから、朝鮮の保守派は清にたよつて日本を追払はうとします。そこにロシアが来たら、日本はどうするのか。これが背景にあつて、朝鮮から清の宗主権を外させるための戦ひが日清戦争です。その結果、朝鮮は初めて清の支配下から逃れて、大韓帝国を名乗る。朝鮮の国王は史上はじめて皇帝になる。朝鮮は喜んで、ソウルの町に独立の記念門をつくるのです。日清戦争はまさに、朝鮮解放の戦さだつたのです。さうすると果たせるかな、今度はロシアが朝鮮に入つて来る。日露戦争が起こり、日本がロシアを破る。吉田松陰いらいの宿願が果され、ペリーいらいの欧米の植民地にされるといふ危機感から、日本は解放されたのです。

明治維新の奇蹟

明治維新は京都の公家が江戸に勝つたといふやうな単純なものではありません。幕府を倒したことは事実ですが、それだけではなく維新政府は平安朝から続いて来た摂関政治を廃止してしまつたのです。万事神武創業の昔に戻すといふ基本方針を立てて、神武創業の昔には摂関政治はありませんから、それまでの藤原北家の系統の五摂家、近衛・鷹司・一条・二条・九条の支配を潰したのです。

さらに、公家の影響力から逃れるために東京に都を移します。公家のなかで政治家として生き残つたのは、明治四年ごろになると三条実美と岩倉具視の二人だけです。あと徳大寺といふ人がいますが、このひとも政府からは外されて宮内省に移つてゐます。

公家だけではなく、討幕の軍事力を提供した諸藩を解体します。最後には藩を支へてきた武士もなくなつてしまふ。つまり幕府を潰し、その倒幕の中心になつた公家を潰し、その倒幕に兵力を提供してくれた藩を潰し、明治維新の原動力になつた武家も潰してしまひました。味方も潰して、国民国家をつくつたのです。これは大変な革命です。それだけのことを、比較的わづかな犠牲をもつて成しとげました。内乱をふせいだ中心軸は、何であつたのか。明

治天皇です。それ以外に、権威は何もないのです。すべてを潰して行く過程でたつた一つ頼りになつたのは、古代以来の権威である皇室だつたのです。

明治維新といふ、奇蹟に類する大事業は、皇室があつたからこそ実現されたのです。皇室といふ日本文化の基本につながつてゐるその存在が、権威として生き続けて来ました。権力はたえず交代しますが、皇室は権力とはべつの権威です。天皇といふ権威にすがつた革新官僚の一群が明治維新政府だつたといつて、過言ではないでせう。

独立精神の回復

この何年間か、日本は巨人でありながら小人のやうに行動してゐるといふことを何回も欧米の印刷物で読まされ、聞かされてもゐます。日本は国際的責任をとらうとしない、といふことです。国際社会における責任感、独立国家としての責任感をもつてゐない。

クラウゼヴィッツが、「戦争とはべつの形態による政治である」といつたのは有名です。これはいひかへれば、政治とは別の形態による戦争である、といふことです。たとへば貿易戦争といふ言葉をアメリカの国会がいひ出しましたが、経済もまた血を流さない一つの戦争であるといふことでせう。

日本は戦争に負け、もうこれからは軍事的進出はいたしませんと約束しました。そこまではいいとして、ではそのかはりに何が起こったか。政治、経済全体が、国際政治の中では別の形態の戦争であるといふ厳しい認識を、日本人はどこかに置き忘れてしまったやうに見えます。

毎年八月の今ごろになりますと、「一億不戦の誓ひ」とか、「過ちは繰り返しません」とか、きまりきつたことばが必ず新聞に出て来ます。あんな不愉快なことばは、ありません。

戦争など日本人はする気をもつてゐませんし、そもそも戦争できるやうな状態にないことは、世界中が知つてゐます。戦争一つをとつても、イラン・イラク戦争を戦つてゐるイラクは戦車五千輛、戦車運搬車二千六百輛をもつてゐるのです。戦車といふものは、前線に自分で走つて行くものではありません。運搬車に乗せて、運ぶのです。これが日本の陸上自衛隊には、一台もないといひます。どうするのかとききますと、「丸通に頼むほかない」。それで「一億不戦の誓ひ」。外国の目から見れば、うさが集まつて、二度と猛獣狩りをいたしませんといつてゐるのと同じでせう。滑稽以外のなにもものでもない。

「過ちは繰り返しません」。これも変なはなしです。歴史を振りかへつていただきたい。あの戦争がどうして起こったか。直接には当時のアメリカの國務長官ハルが寄越した覚書、いはゆるハル・ノートが開戦の原因です。日本はシナ大陸全部から、満州を含めて撤兵せよ。

降伏せよ、といふのにひとしい要求です。その前にはアメリカの日本に対する石油の禁輸がある。しかしまたその前には、日本軍のインド・シナへの出兵がありました。その前にはと、辿つて行くと結局歴史の奥まで遡らなければなりません。戦争といふものはただ一つの原因によつて起こるものではないのです。といふことは、あの戦争の是非を論じることが歴史を裁くことであり、それは人間にはできないことです。歴史の審判は、神様にしかできません。だからキリスト教は、最後の審判といふ理念をもち出しました。仏教でも、人間の罪を決めるのは閻魔様でせう。

それなのにあへて歴史を裁いてみせたのが極東軍事裁判、いはゆる東京裁判です。日本人は戦さに負けて自信を失つたものですから東京裁判にひきずられて、過去のすべてが悪かつたやうな自虐症状にとらはれました。いまもつてそこから、なかなか脱却できないでゐるのです。誇りをもたない人間に未来がないやうに、自国の歴史を敵国の歴史のやうに考へる国に、健全な魂は育たないでせう。日本人自身が独立国としての自主性をもたなければ、国際社会を生きるのに必要な責任感も発生して来ないのです。

かつて国連の監視部隊に自衛隊員を出さうといふ意見が、一部から出たことがあります。丸腰の監視部隊ですから、憲法にも違反しないと思はれます。結局沙汰やみになりましたが、そのときある新聞がかう書きました。「日本の青年の血を海外で流させるとは何事であるか。

許し難い」。これには驚きました。日本の青年の血は流してはいけない。外国の青年の血ならいい、といふことです。カナダやスウェーデンの青年が一所懸命働いて、ときには血を流してゐる。世界の平和のために、監視部隊の一員として働いてゐるのです。さういふ人たちの血は流していい。しかし日本の青年の血は、流してはいけない。

これを書いた新聞記者は、平和主義者のつもりだったのでせう。しかし実際には外国人の血なら流していいといふことですから、途方もないエゴイズムです。鎖国的エゴイズムです。国際的責任をもたうとしないといふことは、一つの面から見れば鎖国主義の心情です。外の政治には出たくない。現実を見たくもない。それが、自主的な精神を失つてゐる証拠です。

靖国神社の参拝を、今年には首相はやめるとかいつてゐますね。去年は大騒ぎして諮問委員会までつくつて公式参拝をしたのに、中共から何かいはれたら、途端にひっこめました。教科書問題も、さうです。よその国の検閲によつて、自分の国の歴史を書きなほす。情ないはなしです。イギリスとフランスでは、ナポレオンへの評価がちがひます。フランスではナポレオンは英雄であつてもイギリスでは悪者です。ナポレオンの仇名は、イギリスではポニー、仔馬です。教科書にも当然さういふ感情は反映してゐますが、お互ひに文句はいひません。そんなことにいちいち文句をいつてゐたら、年中教科書戦争をやつてゐなければならぬのでせう。教科書には政府として口を出さないので、国際的常識です。

中共の国定教科書によりますと、日本がポツダム宣言を受容れたのは原子爆弾のせみではなく、毛沢東が八月九日に総攻撃を指令したからだ、さうです。そんな総攻撃命令を私は聞いたことがありません。誰も、聞いたことがないでせう。

南京には人口が日本の攻撃時に二十万しかゐなかつたのに、日本軍が入つて三十万人を殺したともいつてゐます。二十万人の人口で、どうやつて三十万人を殺せるのか。文句をいひたいのはこつちですけれど、日本はそれはいいはないでゐます。逆に日本の教科書については、よその国の干渉を受けることを政府はしてゐるのです。どこに、国の主体性があるのか。

日本はアジアで最も長く独立を守つて来た国であり、マッカーサーの七年間を除いては他国の侵略を受けなかつた国です。アジアでたつた一つ、シナ大陸の皇帝に抗して独立を宣しました。最初にそれについて長くおはなしたのは、独自の文化といふものが独立の精神、気概にいかにか深くかかはつてゐるかを理解してほしかつたからです。独立なしに、外交もまたありません。

ところで敗戦後四十一年、日本は確かに経済大国になりました。しかし独立性を私たちが持たないかぎり、国際外交についてどんな情報を得たところで、まことに空しいことになります。ですから私はここでは、国際情勢のはなしはあへてしませんでした。先立つものは、敗戦によつて失つた独立の精神の回復です。国際化とは、日本人であることを私たちがやめ

て、国際人とかいふ得体の知れないものになることではないのです。日本人が日本人であることをやめても、イギリス人のまがひものになる、フランス人のまがひものになるだけでせう。こんなまがひものを、誰が尊敬しますか。日本にしかないものをもつて、国際社会に貢献する。固有の財産を、持参金として持ちよるところに、国際社会は成立するのです。

かつて森有礼が明治五年ごろ、日本語を英語にしたいと考へたことがあります。ときどきさういふ馬鹿なことを考へつく人が出るのです。昭和二十一年十一月の『読売新聞』の社説が、やつぱりさういふことを書きました。森有礼については、彼を諷めたのはアメリカ人です。「日本は日本語の何千年の伝統を持つてゐるではないか。」だから日本語において、一級の文化をもつ国で



す。国語を英語にしたら、どうなるか。イギリスは英語文化国で一級の国です。英領植民地では、英語が喋られてゐます。これは二級の英語文化圏、といはねばならないでせう。日本は今から英語を採用することによつて三流、四流の英語文化圏になるに過ぎない。日本が本当に国際社会で生きて行くためには、日本語をもつて、日本語に基づく一級の文化を保持して生きる以外に道はない。あたりまへのことを、森有礼は忠告されたのです。これは現在でも、私たちが考へなければならぬことです。

をはりに——歴史への謙虚さ

歴史をふりかへつて、聖徳太子の外交はみごとでした。こちらが島国で隋には手が出しにくかつたといふ事情があつたにせよ、厩戸皇子は日本の独立を煬帝にみとめさせたのです。天智天皇は唐とのあひだの日唐戦争に軍事的には敗北を喫しながらも、国内の整備、再建には成功しました。天智朝とそのあとの天武朝から、万葉、記紀の文化の花が咲きはじめることは、知られてゐるとほりです。

鎌倉武士は遊牧民国家による侵略をふせぎ、秀吉、家康はイエズス会を尖兵とするカトリック国家の侵略をみごとに排除しました。本格的な鎖国は三代將軍徳川家光の時代からで、

いまから考へますとそこまでする必要はなかつたと思ひます。家光の智恵袋だつた松平信綱は、所詮は田舎侍でした。鎖国のつけは高いものにつきました。一面で鎖国のあひだに、日本の文化を結晶させたことも否定はできません。

鎖国のつけを支払ふために幕末、大勢のひとが命を落しました。幸ひにすでにおはなししたいくつかの条件に支へられて、明治維新は成功し、日露戦争の戦勝後まもなく、不平等条約もすべて撤廃されます。明治の末には、日本は白人以外の国では事実上たつたひとつの——エチオピア、シヤム等々はべつとして——独立国となるのです。

独立国とは、当時の概念では軍事的強国といふ意味です。ところがさういふ地位を得たときから、日本の外交はどうも少々をかしくなります。アメリカは日露戦争までは日本をロシアの侵出にたいする防波堤と考へてゐましたが、ロシアを破つて強化した日本は、アメリカにとつては防波堤ではなく、潜在敵国でした。黄禍論が起こり、日本は次第に孤立化して行きます。

歴史を裁くことは人間にはできないと、さきほど申し上げました。しかし時間、歲月の流れは、人間から感情的要因を次第にとり去り、ものごとを多少とも客観的に判断させるやうになります。明治末年から大正にかけての歴史については、私たちもかなりの程度醒めた眼で、ふりかへつてみる事ができるはずで、日本は世界中を——白人諸国のほぼ全体を——敵

にまはすやうな戦争に突入しましたが、それは果して避け得た事態だつたでせうか。

もしも不幸を避け得たとすれば、それはいつの時点において可能だつたのか。それを考へてみるのが、いまは大切でせう。日本はかつてのだけれもが想像できなかつたほどに、経済的に肥大化してしまひました。明治末年以降の歴史を私どもは研究し、歴史に謙虚に学ぶべきです。学ぶための謙虚さを、歴史は求めてゐます。学ぶことによつてのみ得られる叡知が独立の気概とともに、国際世界を生きる条件でせう。

〈質疑応答より〉

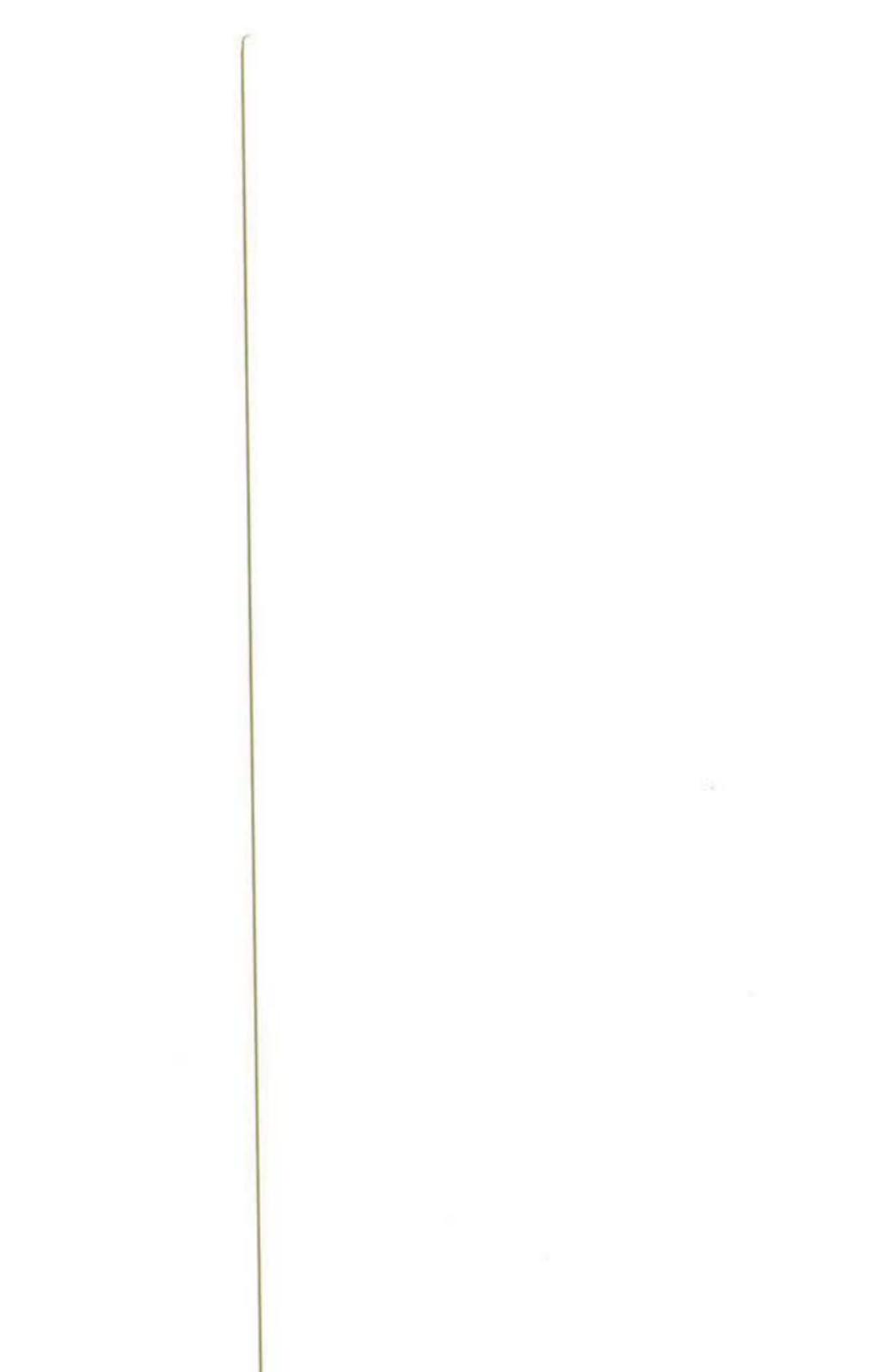
(問) いま日本は国全体のまとまりがかなり、希薄になつてゐるやうですが、この日本といふ国家が国際社会に出てゆくときは、それをもつと凝縮してゆくために何らかのきつかけなり、端緒なりが必要だと思ひます。私たちはそれを何に求めていつたらいいでせうか。

(答) 国体といふ言葉がありますね。十六世紀ごろに宣教師が日本に来て植民地獲得の尖兵の役を演じた。幕末にもそれが再現されるのではないかと、人びとは考へたのです。日本が向かふの人びとに洗脳されないためには、日本人のアイデンティティを明確にしなければいけない。そのアイデンティティを、国体といふ言葉で呼んだのです。

では国体とは何か。「忠臣蔵」をご覧になればよくわかります。あれは京都から来る勅使を饗応する過程で起こった事件でせう。ちよつとでも手落ちがあつたら大変だといふのでああいふ事件に発展したのです。あれで見ても日本の歴史の中心にあるものが何だつたかが、よくわかります。日本の伝統的権威。それは皇室です。

敗戦後、米軍が神道指令を出して、神道を一つの宗教にしてしまいました。そのために靖国神社の問題とか、宮中のお祀りの問題とか、むづかしい問題が出てきてゐますね。

コンステイティューションといふ言葉は日本では憲法と訳されてゐますが、元来、植物には植物それぞれの姿があるやうに、国にもその国特有の政治的な姿がある。その姿がコンステイティューションです。イギリスには成文憲法はないけれど、暗黙のうちに決められたコンステイティューションがある。このコンステイティューションを日本語に訳しますと、国体と言つた方がいいのかもしれない。戦後の憲法その他の法体系は米軍が作つたものですから、日本のコンステイティューションと合つてゐないのです。この日本の本来持つてゐるコンステイティューション、つまり国の姿といふものを、もう一度日本人が確認して、それに沿つて法体系を作りなほす。さうしない限り、日本が本来のアイデンティティを回復することとはあり得ないだらうと思ひます。



ことばとこころ

東京工業大学教授

江藤

淳



藤原宮跡

古今集「仮名序」

意と事と言と

「古事記」編纂の意義

真淵と宣長との出会ひ

日本語の持続性

英語の場合

占領軍による国語の破壊

恐るべき「検閲」の実態

古今集「仮名序」

今日のお話は「ことばとこころ」といふ題でありまして、ある意図から漢字ではなく平仮名で題をつけました。お手元には三つの資料をお配りしておきました。(一)『古今和歌集』の序文、(二)本居宣長の晩年の学問論である『うひ山ぶみ』、(三)同じく宣長畢生の著作である『古事記伝』の一之巻の三つですが、まづその中で紀貫之が書いた『古今和歌集』の序文をご覧下さい。日本は古い国でありますが、『古今和歌集』の撰者の一人であり序文の筆者でもある貫之はその長い歴史の中ではば文芸評論家の「はしり」なのです。この歌集は二十一ある勅撰和歌集の最初のもので、醍醐天皇の勅命によって延喜五年(九〇五)に撰上されました。実は貫之の書いた序文は仮名によるものであって、いまひとつ真名序(漢文の序)がついてゐる。これは天皇のご命令で編纂された歌集だからです。といふのは当時の公文書はみな漢文です。アンソロジーのテキストそのものは国語ですが、公の性格をもつ歌集であるといふことを示すために漢文の序がついてゐるわけです。

さてこの仮名序こそが日本における最初の文芸批評であって、その第一行目から今日の演題である「ことばとこころ」に深くかかはる基本的な概念が説かれてゐる。



やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、おとこ女のなかをもやはらげ、たけきもの、ふのこゝろも、なぐさむるは哥うたなり。

この「やまとうた」とは日本の和歌です。短歌だけでなく長歌も旋頭歌も「やまとうた」ですが、このやうな日本の詩歌は、「ひとのこゝろをたねとして」、すなはち人間の心といふものから湧き出てくる、そして

「よろづのこのの葉とぞなれりける」……つまり洗練された表現によって人の心が千差万別のことばの姿となつて現れたものだといつてゐるのです。日本人の心を日本語といふことばによつて美しく現したものが歌であり、その歌こそは実は日本語、即ち国語の精髓であるといふ気持がここには籠められてゐる。しかもこれは単に人間中心な詩歌論ではない。

花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをき
けば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよま
ざりける。

花に鳴く鶯もあれは歌をうたつてゐるのです。水に住む蛙がケケコといつてゐるのも歌なのです。つまり、森羅万象、自然の中に生きてゐるものは、人間もそれ以外の命あるものも全てがみな歌を詠むもののだといふ、自然に対する感応の仕方に注意していただきたい。



西洋のユダヤ教・キリスト教的な人間観・自然観によれば、絶対神が自分に似せて人間を造り、それがアダムであり、そのアダムの肋骨からイブを造ったことになってゐる。神に似せて造られたものが人間ですから、人間は特権的存在なんですね。人間と人間以外の動植物は断絶してゐる。だからうぐひすやかはづのこゑも人間より劣つた動物が何だかわけのわからないノイズを立ててゐるといふことになる。従つて、十九世紀になつてチャールズ・ダーウィンといふ非常に敬虔なキリスト教徒が、生物の進化の過程を実証的に証明したとき、この人は深刻に悩んだのです。ダーウィンが説いた生きものは単細胞の生物から人間のやうな高等動物に至るまで一つの系統樹でつながつてゐるといふ自然界の連続性についての証明は、たとへば科学上の真理ではあつても、神に似てゐる人間とそれ以外とを截然と分けるキリスト教の教理と矛盾する。ダーウィンの『種の起源』は科学史のみならず世界の思想史においても画期的なものでしたが、これが公刊されるまでに実に数十年を要したのです。信仰は信仰、科学は科学だといふところに氣持を整理して、やつと死ぬ思ひで公にしたのが一八五九年（安政六年）のことでした。

しかし、日本人にはかういふことはない。千年前の日本最初の文芸評論の中で、すでに鶯が歌を詠む、蛙が歌を詠むといふやうに森羅万象から、むしろ積極的に歌声を聞き取るという文藝観が述べられてゐる。われわれはさういふ耳を持つてゐる。氣付いてゐないかも知れ

ないが、皆さんも持つてゐるのです。その生きとし生けるものの発する歌声のうちで人間の発する言語といふものは、それこそことばが心であり心がことばになって現れたもので、本当に吸ふ息、吐く息と同じやうに人間が生きていくためになくてはならないものなのです。ものを考へる、ものを感じる、ものを発表する、他とコミュニケーションを持つ、或は自身に語りかける。かうした全てが、その心とことばの往復運動であり、それによって人間の言語活動といふものが成り立つてゐるのです。その言語活動を最も洗練して、よろづのことの葉に現したものがそ歌であると紀貫之はいつてゐるのですね。

さらにわれわれはその心とことばの交流を人間のみの特権だとは思はずに、人間と同じやうに蛙にも鶯にも心があり、心が存在してゐるといふ動物観、生物観、或は自然観を持つてゐる。これは非常に際立つたことであり、われわれがよく自覚しておかなければならないことだと思ふのです。

意と事と言と

次に三つ目の資料である『古事記伝』一之卷(明和八年・一七七二成立)の一節を見ていただきたい。

抑意と事と言とは、みな相称へる物にして、上ツ代は、意も事も言も上ツ代、後ノ代は、意も事も言も後ノ代、漢国は、意も事も言も漢国なるを、書紀は、後ノ代の意をもて、上ツ代の事を記し、漢国の言を以テ、皇国の意を記されたる故に、あひかなはざることも多かるを、此記は、いさ、かもさかしらを加へずて、古へより云へたるまゝに記されれば、その意も事も相称て、皆上ツ代の実なり、是れもはら古への語言を主としたるが故ぞかし、すべて意も事も、言を以て伝ふるものなれば、書はその記せる言辭ぞ主には有ける。又書紀は、漢文章を思はれたるゆゑに、皇国の古言の文は、失たるが多きを、此記は、古言のまゝなるが故に、上ツ代の言の文も、いと美麗しきものをや、……………

これは本居宣長のことばでありました。「此記」とは『古事記』（和銅五年・七一二成立）のこと、「書紀」とは『日本書紀』（養老四年・七二〇成立）のことです。宣長は意と事と言といふ三つの概念を駆使しながら『古事記』と『日本書紀』の比較論をやつてゐる。「すべて意も事も、言を以て伝ふるものなれば、書はその記せる言辭ぞ主には有ける」といふ箇所が目であり、心と事績（歴史的な事実）とことばは相互に照応するものであるといつてゐる。「上ツ代は、意も事も言も上ツ代」とは、古代人の心といふものを一番よく伝へてゐるもの

は古代のことばである、古代の日本語であるといふことです。その古代の日本人の心の現れとして、いろいろに伝へられてゐる神話的な事実、或は伝説、例へば天の岩戸の天照大御神がその中に隠れてしまはれたこと、或は景行天皇の皇子であられた倭建命が東征されたこと、それらの事績を語り伝へてきた古代の日本人のことばがそのままに記されてゐるのが『古事記』であるといふのです。つまり宣長は紀貫之が『古今和歌集』の序文で心とことばといふ基本概念を提示してから八百年以上を経ての後に、意と事と言といふ基本概念を再びこの『古事記』の研究において提示してゐる。しかも、その事といふものは実はことばに吸収されてしまふともいつてゐる。なぜなら事績といふものはことばによつてしか伝はらないからです。史実、事実といふものは一見ことばから独立したもののやうですが、実は事績はことばと独立しては存在してゐないともいひ得るのです。といふのは人間は史実を意識する際に、ことばの媒介を経なければ認識することはできないからです。すなはち心とことばこそが人間にとって最も基本的なものなのですが、そのことを宣長がもう一度確認してゐるのですね。しかも上代の心を現してゐるのは上代のことばであり、漢国・外国の心を現してゐるのは漢国のことば、つまり漢文であると指摘してゐる。

さうすると『古事記』と『日本書紀』とではどこが違ふか。『古事記』は漢字を使って書かれてゐるが漢字は仮名として用ひられてをり国語を基調としてゐる。漢文的なところもある

し漢字の意味からあてたところもあるが、基本的には古代日本語をそのまま正確にトランスクリライブするための、写すための音標記号として漢字を使ひこなしてゐる。しかし『日本書紀』の方は全部漢文体で書かれてゐる。『日本書紀』にはたしかに古代の事績が叙述されてはゐるが、漢文であるが故に、漢文独特のスタイルやレトリックに影響されてしまつてゐる。すなはち漢文といふ外国語によって叙述されてゐるために事実の内容が變つてしまつてゐるのです。ところが『古事記』の方は、古代の日本語そのものを写さうといふ努力がなされてゐるために、古代人の心がそのままに現れてゐる。従つて、『日本書紀』は国の公式の歴史であり、『古事記』はそれに準ずるといふ扱ひがなされてきたけれども実は逆に、『古事記』こそ尊重すべきであつて、『日本書紀』の重要性は『古事記』よりもむしろ下にあるといふのが宣長の主張なんです。これは非常に重要な発見であり、この見識の重要性は強調しても強調しすぎることはない。

日本語は元來は文字を持たない言語であつた。全ての歴史は口伝へで伝承されてゐた。宮中にも語り部かたべがゐたでせうし、大伴とか佐伯といった大氏族にも語り部がゐたでせう。オーラル・トラディションです。口伝へによって歴史の伝承がなされてゐた。ところがそこに漢字といふものが入つてきたのです。そこで何が起つたかといふと、口伝へに伝承されてきた神話や歴史を文字化しようとする猛然たる流行が始まつた。文字化するといつても要する

に漢文にするんです。つまり日本の歴史を、いはば英語やドイツ語で書くやうなものです。今でこそ私たちは漢字と仮名の両方を使いこなして国語を書いてゐますから漢字は日本語の文化遺産になりきつてゐますが、文字のない世界に漢字が入ってきて、それまで口承されてきた事実を漢文で書いていけば、漢文のグラマーと漢文のレトリックに合ったやうに微妙に歴史が作り替へられてしまひます。大変な文化的危機です。口伝への内容を性質の違った言語で表記したために、単なる翻訳ではなく、事実のデイストーション、ことばのデイストーション、つまり心のデイストーションが起つてしまつた。さういふ歪みが非常に一般化してきました。

綿密な手続きを経て口から口へと伝へられてきた日本語による歴史がいつの間にか外国語の歴史になってしまふ。基本的に微妙な歴史の消滅現象といふものが起りさうになってきたのです。

「古事記」編纂の意義

固有の口承伝承を漢文化しようとする現象が流行してゐたのは六〇七世紀ですが、六四五〇年といへば大化の改新です。なぜ大化の改新といふことが起つたか。唐と新羅の連合軍が朝

鮮半島を制圧して日本に押し渡ってくる気配を示した。またやらうと思へばできる實力を持つてゐた。日本は六世紀半ばにはそれまで半島南端に保有してゐた任那といふコロニーを失ふのです。要するに今にも侵略されるのではないかと考へた。これに対処するには緩慢な古代の氏族社会のままでは無理なので防衛措置を講じなければならぬ。筑前の大宰府のところろに水城の跡があるでせう。当時の要塞です。そこへ東国の勇猛な壮丁を送つて防衛に当らせようとした。その先遣隊の兵士が防人です。

しかし防衛措置だけではとても駄目だから国家体制そのものを改革しようといふことになり、明治維新の時にやったのとよく似た改革を大化の改新の頃に断行しました。強大になつて日本に脅威を与へるほどになつた唐の制度の中には非常に優れたものがあるに違ひないと考へて、積極的・自発的に唐の文物制度を導入して国家体制を整備しようとしたのです。氏族社会から律令体制への脱皮をラディカルに徹底的にやらうとした。それが中大兄皇子、後の天智天皇が中心となつて推進された大化の改新の大改革だつた。

この大改革は一口でいへば中国化です。日本人の積極的な意思による中国化です。この過程で、日本の歴史は消滅を強ひられる結果になりかねなかつた。つまり、制度そのものが中国化するんですから、遠つ御祖の古へからずっと伝へられてきてゐる伝承を口伝へで後世に残していくやうなまだるっこしいことはやめろ、全部、漢文で書け。少なくとも公式の歴史

と認められるものはどんどん漢文化して文字記録として残すやうにする方が、ずっと近代的で進んでゐることなのだといふ考へ方が普及していった。天皇御自身がそれを推進されようとした。しかし、これは自ら墓穴を掘るに等しい。皇室の記録がどんどん漢文化され、漢字化された記録の断片になってしまつて、天照大御神から連綿と伝へられてきた伝承が微妙に変つていつてしまふ。変形と消滅がどんどん進んでいく。さういふ文化的危機と唐・新羅からの軍事的な脅威とに曝されてゐたのが六・七世紀の日本でした。

その重大な時代に日本人はどう対処したかといふと、『古事記』を編むことでその危機を打ち払つたのです。『古事記』は誰かがごく恣意的に編集しようとしてまとめられたものではない。天智天皇の弟君であられる天武天皇の詔みことりによつて編纂が始められたのです。ご兄弟とも非常に英明な方であつて、天智天皇は敢へて唐制を導入することで唐・新羅の圧迫から国の存続を図るといふ荒治療をなさつた。その決断において優れた天子様であらせられた。しかし、その結果、滔々として日本の中国化が行はれるやうになる。そしてそれが行き過ぎるやうになつた時に、壬申の乱といふ内乱がおこる。その後帝位を践まれた天武天皇は「これではいけない、日本人の心が失はれてしまふ。制度がどんなに整つても、それを内から支へる日本人の心そのものが見失はれるならば、そんな改革は何の意味もない。それは改革ではなく屈伏にすぎない」といふことにお氣付きになつた。そして、この重大な危機を救ふために

は正しい歴史を伝えるほかないと決断されたのです。

『古事記』の成立は七十二年で女帝であられた元明天皇の御代ですが、この編纂が始ったのは天武天皇の時です。太安万侶、今でいへば宮内庁の文書課長位の中堅官吏に「お前が編纂主任になって正しい歴史を残せ」とお命じになった。普通の場合の修史事業とは非常に違ふのです。史料を涉獵し史料批判をして、その中で批判に耐へ得る史料を基礎に記録していくのが普通の歴史記述の過程です。文字記録から歴史の記述が行はれる。ところが『古事記』の場合は文字記録から編纂することを厳しくお誡めになった。当時氾濫しつつあった文字記録といへばそれは漢文化した記録でした。即ち、外国語化された記録です。これは厳しく斥けなければいけない。それらの文字記録をかって口から口へと伝へられてゐたやうな姿にいま一度還元しなければならぬ。漢文体に文字化されたもの、外国語化されたものを、もう一度肉声に戻せ、国語に戻せといふわけです。かつて伝承されてゐたやうな口伝への状態に還元して、それを現代的にいへばテープレコーダーに吹き込めといふことです。テープはなから人に覚えさせるのです。『古事記』序文にあるやうに稗田阿礼がそれを記憶する。文字・漢文化したものを声に戻元する。その音声に戻元して覚えさせたものだけが信頼できる一等史料であるといふのです。

そして稗田阿礼が記憶したものを改めて語り直していく。その語りの内容を今度は漢字を

代は、意も事も言も上^ツ代、後ノ代は意も事も言も後ノ代、漢国は、意も事も言も漢国なるを、書紀は、後ノ代の意をもて、上^ツ代の事を記し、漢国の言を以^テ、皇国の意を記されたる故に、あひかなはざること多かるを——あひかなはざることが多いといふのは、不正確である、古くから本来の日本人の心に伝へられてきた事績とは遠く隔たつてしまふといふことです——「此記は、いさ、かもさかしらを加へずて——さかしらとは外國的な或は後世の恣意的な解釈といふ意味です——「古へより云^ヒ伝へたるまゝ、に記されたれば——もう一度、肉声に戻して、それを根本史料として作り直したのだから当然ですな——「その意も事も言も相^{アヒカ}称^{カヒ}て、皆上^ツ代の実なり、是^レもはら古への語^{コトバ}言を主としたるが故ぞかし」。だから『古事記』は尊いといへるわけです。

真淵と宣長との出会い

『古事記』のことばを正確に解説すれば、自づから上代の人の心がそこに現れてくる。その上代の人の心は、徳川中期、西暦十八世紀に生きた宣長の心とどのくらゐ隔たつてゐるのか、ゐないのかといふことも『古事記』の研究で明らかにされるはずです。どういふ場合にどんな表記法が選ばれ、どういふ場合にはどの漢字が使はれてゐるか。それを系統的に科学

的にといいていくらゐに実証的にコンコーダンスを作つてやらうではないかといふのが宣長の『古事記』研究でした。全四十四巻から成る『古事記伝』ですが、その基礎作業のために実に八年間、宣長は一言も他の論文を書かずに『古事記』がどんなシステムによつて表記されてゐるかを解析し続けた。このやうな動機を宣長に与へたのは何であつたかといひますと、それは彼がある人の声を聞いたといふ体験でした。

宝暦十三年(一七六三)の五月二十五日の晩ですが、伊勢国の松坂で小児科医を開業する傍らで古典研究に関する二、三の論文を書いて多少は世間にも知られるやうになつてゐた十三歳の宣長は、六十七歳になる賀茂真淵といふ人と会つた。真淵は徳川御三卿の一つである田安家に仕え、田安家の文書を編纂したり校注を施したりしながら古典の研究に精励し『万葉考』といふ見事な『万葉集』研究をこの時まで完成してゐた。この晩は田安家から長期休暇をもらつて年来の宿願であつた、伊勢神宮参拝を果たした帰路でした。往路も松坂を通つたのですが宣長は知らなかつた。江戸への帰り道、また松坂に寄ると聞いて今度こそはと前もつて申し入れて宿舎を訪ねたのです。宣長は次のやうに挨拶をした。「実は自分も細々と古典研究をやつてゐる田舎の若者でございます。いま私は先生の警咳けいがいに接することが出来ましたが、この志をどういふやうに伸ばしたらいいかお教へいただきたい」。初対面で年齢も開いてゐる。一人は江戸にあって御三卿に仕へるちゃんとした学者、他方は田舎の小児科の開

業医。

しかし、人間の出会いといふものはわからないもので、真淵は宣長に会った瞬間に「これはただ者ではない」と思ったのでせう。率直に「自分は『万葉集』を多年、研究してきた。それに関して他にもいろいろと業績を残すことは出来たけれども、『万葉集』を深く極めれば極めるほどに『古事記』こそどうしても研究対象として考究しなければならぬとの念ひが強くなってきた」といった。「長年『万葉集』を研究してきて、どうしても『古事記』をやらなければならぬと思ふのだが、齢すでに六十七である。これから始めて『古事記』の研究を完成するには、もう時間が足りない。道半ばにして研究を止めなければならぬのは大変に辛い。自分にはそんなに余命はない。ところで君はまだ春秋に富んでゐる。君こそ『古事記』の研究をやったらいではないか」。さうしたら宣長は「さうですか、ではやりませう」と答へたのです。これもずるぶん非凡な話です。普通の場合、初対面の偉い先生から大きな研究課題を貰ふと「いや、とても僕には出来ません」といふでせう。しかし、宣長が妙に素直に「それではやりませう」といったといふのは、何かこの出会いがやはりただ事ではないことを示してゐます。真淵が江戸に帰ったあと門弟の礼をとつて正式に入門しますが、二度と会ふことはなかつた。

それから六、七年後の明和六年に真淵は亡くなりますが、それまでの間、二人の間の学問

上の遣り取りは全て手紙です。しかも、それは率直極りない手紙であつて遠慮会釈ない。ちよつとでも疑問に思つたところは無礼なぐらゐに師に詰め寄つていく。真淵はそれに対して「お前の若気の至りだ。そんなに気負ひ切つた心では本当の学問は極められない」と窘めたりしてゐる。しかし、実に平等率直、自由奔放な学問上の議論の応酬を全て手紙でやつた。その結果が稔つていったのが『古事記伝』なんですね。

さうするとこの辺に日本人にとつての学問といふものの要諦が隠されてゐるやうに思はれる。非常に大切な学問のあり方ですね。手紙による議論の応酬が可能のためには、たつた一度だけ宣長は真淵に会ふ必要があつた。直に真淵の声を聞く必要があつた。声こそがことばの真髓ですから、師の手紙を読んでゐると、いつの間にか文字が消えてその行間から真淵の聲が聞こえてくる。「なるほど、先生はかういふつもりでいはれたのか」と。真淵の方には宣長の鋭い質問の聲が響いてくる。「こいつ、こんなことをいつてゐる。いいところに気付いてゐるがちよつと生意気だから窘めてやらう」となる。

文字と文字が江戸と松坂の間を往復するのですが、その文字は声になり血となり肉となる。だから宣長のところに行く教へは実のあるものになるし、真淵に向けられる質問は肯綮に当るものになる。それもただの知的遊戯ではない。宣長といふ後進の研究者が全身全霊をかけて師にぶつかつていく人間的な心の現れが質問のことばとなる。文字が実は声といふことば

の本質を乗せて江戸に行き松坂に返るといふことが繰り返された。

現代はこれだけコミュニケーションの手段の発達した時代ですから、例へば、私が東京に居て有線テレビでお話をして皆さんがここで聞きになっても構はないかもしれない。しかし、それでは心が伝はらない。直接に肉声を聞かないとだめなのです。なぜ学生は学校に行くのか。卒業に必要な単位をとるために行くのか。就職の際に大学卒の方が都合がいいと考へるから通ふのか。いろんな理由づけがあるでせうが、実は全部付け足りであって、あれは教師の声を聞きに行くんですね。教師の方も演習をやって学生の声を聞く。お互ひの声を聞き合ふ。どうもさうではないかと思ふのです。授業は「代返」をしてもらって、コピーしたノートで試験だけ受けて「優」を取っても、どこか実になつてゐないといふ感じが残るのは、我田引水のやうですが教師の声を聞いてゐないからだと思ふ。だから、松坂の一夜の邂逅は大変に重要な出会ひであつたと思はれるのです。

日本語の持続性

このやうにして宣長は『古事記』の研究に着手し、多年の研鑽の結果、『古事記伝』四十四卷を完成しました。その際に、漢字を仮名として用ひて表記された上代の文献の中で、漢字

を純然たるフォネティック・サインといふか、音標記号としてだけ使つてゐる場合が三つあることに気付いたのです。

その一つは何かといふと祝詞のりとです。人が神に対して申し上げることが祝詞です。一語一句も違へてはいけません。心が伝はらない。一字一句でも誤れば神の前に素直に頭を垂れてゐる人の心が正しく伝はらない。神がご受納にならない。従つて、祝詞は一語一句、正確に伝へなければならぬ。

二つ目は宣命です、宣命といふのは漢文ではなく国語を用ひて天皇が臣下に下しおかれる勅語のことです。時と場合によつては国語によつて詔が下されることがある。そのことばが一字一句、間違つても帝のお心が臣下に伝はらない。国家意思が正確に表示できないことになりません。

第三は何かといふと歌の場合です。詩歌は人が人に対して心を開き真心を伝えることばです。人が人に、男が女に、女が男に、親が子に、子が親にといふやうに真心を伝えるのが歌です。一字一句もおろそかにできない。要するに厳密なトランスクリプションがなされなければならぬのです。

それで何がわかつたか。このやうにして正確に解読された古代人の心は『古事記』の成立から千年余り後に生きてゐる宣長にとつて掌を指すが如くによくわかる心であるといふこと

がわかった。つまり日本語の持続性です。古代人のことばが漢字を音標文字とすることによって『古事記』に表記された時、そこに古代人の心が固定されたのですが、その心をほぐして目の当りにして今一度見直してみたところ、その心は実は千年も後の時代に生きてゐる宣長そのままの心だといつていくらゐるに近しいものであるといふことがわかったのです。つまり日本語といふことばは、もう千年以上も前に完全に完成されてゐても少しも付け加へるものも削るものもない。そこに基本的な心・事・ことばといふやうな概念は全部きちんと押へられてゐる。何ら日本人の思想と感情を語るに過不足のないものとして確立されてゐるといふことがよくわかった。このことは千年といふ大変な時間の中に日本人の心といふものが脈々として持続して一度も断絶してゐないといふことが確認されたといふことにほかならない。

『古事記』は実に六世紀から七世紀にかけての日本文化の一大危機を克服すべく編纂された歴史書であつた。日本は歴史を失はんとしてゐたのです。日本は政治的・軍事的及び文化的に唐・新羅に圧伏されようとしてゐた。しかし、さうはならなかつた。のみならず、古代人の心は千年余の歳月を経ても脈々と一度の断絶もなく宣長の前に現れた。その喜び、その感激がこの幸せな国学者宣長の晩年を満たしてゐるのです。そこからお手元の資料の二番目である『うひ山ぶみ』といふ学問論が生れてきた。晩年の宣長が学問を山に譬へて、初めて山に登る人のためにといふやうな意味で初学者に向つて「日本の古典を読むとはどういふこ

となのか」を嚙んで含めるやうに説いたものですから、ぜひ各自で自主的に読んでいただきたいと思ひます。

英語の場合

ところで日本語にみられるやうなことばの持続性といふものは、あらゆる言語にあてはまることでせうか。インドのサンスクリットの世界では何千年も前の口承伝説が今日でも同じやうに伝へられてゐるといひますから、ここには持続性があるといへませう。しかし、日本語とよく比べられる例へば英語ですね。われわれが一番、多くの時間を割いて学習してきた外国語といへば英語ですが、この英語にはさういふ意味での持続性があるかといへば、それはあるとは申せません。

ちやうど『古事記』が編纂された頃に現行のテキストが定着したと考へられる『ベオウルフ』といふ武勲詩がある。オールド・イングリッシュで書かれたもので、この古代英語は現在の英語よりもスカンジナビア語に近い言語です。アングル・サクソンズといふ元来はスカンジナビアにゐた北方民族がのちにブリテン島に渡って来てその言語を伝へたのです。今日の英語国民の、例へば平均的な大学生や高校生が『ベオウルフ』のテキストを見ても、何が

書いてあるか全くわからない。実は英国における英文学研究はこの古代英語の解説からスタートした。これが始つたのは実に十九世紀の半ば過ぎになってからで、非常に新しいことなのです。それまではギリシア語やラテン語を学ぶことが学問で、古代英語などは蛮族の言語であつて文明人の研究すべきものではないとされてゐた。しかも初めのうちはオックスフォードでもケンブリッジでも古代英語研究をやらなかつた。ロンドン大学で初めて英文科の講座を持ったウイリアム・ペイントン・ケアといふ学者はスカンジナビア語が専門だったから古代英語研究に着手できたのです。

ではミドル・イングリッシュといはれる中世英語はどうでせうか。一四〇五世紀にチョーサーといふ大詩人が出現しましたが、平均的な英国の学生がその作品をすぐ読めるかといふと、やはり読めない。なぜかといふと、古代英語は一度切断されてゐるからです。一〇六六年、北フランスのノルマンディーの大名であつたウイリアムがイギリスに押し渡つて征服王朝をつくつた。ノーマン・コンクエストですね。爾後数百年の間に、ノーマン・フレンチといふフランス語の一方言がイギリスの公用語になつた。宮廷・貴族らの上流階級はノーマン・フレンチを使ふ、庶民はオールド・イングリッシュを用ひるといふやうに国の中で階層によつて全く違ふ言語が話されるといふ状態を英国人は体験せざるを得なくなつたのです。この二つがある程度融合したのが中世英語ですから、チョーサーの詩を読むためにも専門的勉強

が不可欠となるのです。

現代英語の直接的な基礎が出来るのは十五世紀末期です。一四八五年にウイリアム・キャクストンといふ人が初めて活版印刷を始めた。そして聖書と当時愛好されてゐたアーサー王伝説の散文版「ル・モルト・ダアーサー」とを印刷したのですが、今から五〇一年前の聖書とアーサー王物語りになると、その構文・文法・語彙が大体において現代英語と直結してゐることがたしかめられる。従つて英語の持続性といふものは高々五百年に限定されてゐるところが日本語はどうか。現在はすでに宣長の時代から二百年を経過してゐますから、『古事記』の成立時から起算しても千二百数十年になるのですが、それだけの長い持続性を日本語は維持してゐる。しかも『古事記』に伝へられてゐるいろいろな神話や伝説が語り伝へられたその初めを考へていくと、これは二千年以上、皇紀二千六百年は昭和十五年でしたから、二千六百年はおろか、三千年以上も経つてゐるかもしれない。日本語の持続力の長さには実に驚くべきものがあるのです。

だから諸君のうちの誰であつても、例へば『万葉集』に納められてゐる歌をご覧になつた時には、万葉仮名からそのまま音だけを平仮名にうつしとるといふ手続きは必要でせうが、その心が直に伝はつてくるのです。そんなに古典に通じてゐなくとも恋の歌なのか叙景の歌なのかの弁別は容易にできる。といふことは、諸君もまた『万葉集』の歌を詠んだ防人なり

王侯貴族なりの、或は人麻呂や赤人のやうな大歌人の心に直接推参することができるといふことです。その感動をそのまま自分のものとして今、現に感ずることができるといふのは、『万葉集』の編纂から少なくとも千二百年の物理的な時間の隔りを一瞬にして乗り超えて、万葉の歌人の心と諸君の心が、ちやうど真淵と宣長といふ師弟相互の心が共鳴したやうに、共感し合ふことに他ならないのです。諸君はさういふことを体験することができ、現にしてゐるのです。

これは畏るべきことなんでしょう。「畏るべき」とは困つたといふ意味ではなく大変に有難いことなんです。

占領軍による国語の破壊

私は自分の大学のゼミで学部一年の諸君に、占領中の文書を読ませてゐます。敗戦によって占領されたとはいへ、外交権が剝奪されるなどといふことはポツダム宣言のどこにも書いてゐなかつた。日本の外交権はまさに超法規的に剝奪されたのですが、外交権を奪はれて海外に赴任できない外交官たちは来るべき講和に備へて苦心惨憺、情報蒐集にあたってゐた。その血の滲むやうな苦勞を当時のことばで書き残してゐるのです。昭和二十年の十月、外務

省が特別班を作つて、予想される講和条約の際にどのやうな扱ひを受けるか、それに対して帝国はどう対処すべきかと考へてきたのですが、ここにはその詳細が記されてゐる。その当時の資料を見ないと占領下に苦勞した人の気持ちはわからないのです。全部、正漢字・歴史仮名遣ひの文語体の公用文で書かれてゐる。

四月から夏休みまでは私が講義をして、秋から二月ぐらゐまでの間は学生が分担して読んだところを發表していく。さうすると今まで、学生諸君が高校で教つてきた「もう二度と戦争はいたしません、平和が何より結構です」といふやうな後のことばで書かれた歴史記述が全て仮初めかりそめのものであることに自づと気づいてくるのです。そこで理工系の学生たちは「なるほど歴史とはかういふものをしつかりふまへて書かなければならないものなのか、だがこれまで習つてきた歴史にはさういふ記述は一つもなかった。理工系の学問では数学といふ基礎学があり物理学が重要な武器となつてゐて、文科系のやうなインキキはできないから科学技術は進歩するんだ。歴史の連中は、こんな基本的手続きもきちんとはらないからだめなのだ」と文科系の学問をする人間を馬鹿にし出す。馬鹿にされても仕方がないかも知れません。そこで私が「われわれの授業は数学も物理学も使はないけれども、同じ手続を踏んで歴史を学んでゐるのだ」といふと学生は納得します。理工系の学問で実験をやつて、データにとつて、それを解析するのと同じの手続きが歴史についても必要だといふことがわかるなら、

かういふ資料をきちんと正確に読まなければならぬといふことの重要性が納得できるだらう。そこから諸君の一人一人の頭の中に浮んだ歴史の形をこれから発表するやうにしなさいといふと学生たちは恐らくいままで想像だにしなかつたことを発見して、次の発表の時間にはそれを話してくれるのです。

日本語の持続性から見ても僅か四十一年前の外交資料を、どんなに分量が多くても忽ちにして解読できるのは当り前です。ところが六・七世紀の日本文化の中国化といふ文化的危機にも匹敵するものが四十一年前に襲つてきた。昭和二十年八月、日本が大東亜戦争に負けたその直後に危機はアメリカからやってきた。文字記号そのものの改変といふ言語に関する掣肘ちゆうじゆうが外から強制されたのです。昭和二十一年十一月十五日の「当用漢字表」と「現代かなづかい」に関する内閣告示がそれですが、その背後に占領軍の指令があつた。この漢字は使つてはいけないとか仮名遣ひはこの通りにせよとかといふ措置がとられた。

漢字や仮名遣ひの改変といふことはポツダム宣言で日本が受け入れることになつた自由と民主主義の原則とは何の関係もない。漢字の数を減らすことがどうして民主的でせうか。日本人は漢字を自家薬籠中のものとして千年以上も使ひこなしてきてゐる。また歴史仮名遣ひをやめることも民主的でもなければ自由でもない。それどころか、一国の言語表現に外国権力が掣肘を加へて変形するといふのはそれこそ基本的人権の抑圧です。私は鶯の権利も蛙の

権利も大切だと思ふから、人権といふことばを振り廻すのはあまり好きではない。人間だけが特別に偉いといった感覚にはどうも馴染めないからですが、しかし、もしさういふひ方をするならば、この、ことばに対する掣肘は人権に対するこの上ない酷い仕打ちです。鶯に向つて「ホーホケキョと鳴くな、カアカアと鳴け」といふやうなものだからです。

しかも、漢字はこれだけしか使つてはならない。仮名遣ひはかうしなさいと学校教育で強制するようになった。文部大臣の諮問機関である国語審議会といふものが占領の終つたあとも、ずっと小田原評定を繰り返して学校教育は依然として占領下の路線で行はれてゐる。その後社会的には歴史的仮名遣ひを尊重するとか、規制的措施であつた当用漢字表は昭和五十三年に常用漢字表に變つて準拠的な目安とするやうになる等々の一種の妥協が図られました。が、教室の中は依然として占領中の掣肘が続いてゐるのです。

なぜ民主化とも自由とも全く関係のないこのやうなことばに対する制約を施したかといふと、それは日本人の都合によつて行はれたのではなく、全て占領軍の日本統治をしやすくするためのものでしたのです。アメリカ側の都合でやった。ノーマン・コンクェストの際にノーマン・フレンチといふフランス語の東北弁をイギリスに持ち込んで自分たちのことばとしたやうに、アメリカ自身がフィリピンで半ば成功したやうに、日本を英語の国にすれば一番統治しやすいと考へたからです。しかし、異民族が他の民族のことばを奪ふことは、これは

実は心を奪ふことにほかなりません。言語を奪ふことは心と志を奪ふことですから、それに対しては徹底的に抵抗するのがこれまでの歴史の通例でした。インドを統治してみたイギリス人がインドの諸族からどれだけの抵抗に遭遇したかはアメリカ人だって知らなかったわけではない。

日本のやうに千年二千年の文化を誇る国に来て英語を強制したら、日本人は原爆をあと何個落しても抵抗を続けるに違ひない。その恐怖があったから英語を押しつけることはできなかった。ローマ字化の議論もありました。ローマ字にすると国語の音は残るけれども漢字も仮名もなくなる。敗戦の直後はローマ字の教科書も配られた。これは偶然かどうか定かでないが、文部省はアメリカ人の嫌ふ訓令式といふローマ字を使ったのです。シはS I、チはT I、ツはTUといった具合です。T Iなんて音は日本語には本来ない。「ち」をT Iと書くことはタ行はタ・テイ・トウ・テ・トとなる。こんな日本語はないから誰も使はない。いつの間にかお蔵になって、ローマ字化もやはり無理だとなった。

このやうなわけで、せめてできたのが「当用漢字表」と「現代かなづかい」の強制だった。漢字が少なければアメリカ人が日本人を統治するために習はなければならぬ漢字が少なくてすむ。すなはちアメリカ人にとっての便宜のための強制だったのです。

恐るべき「検閲」の実態

アメリカ軍が開戦の直前に日本語要員を確保しようとした時、二世を集めてみたら多少とも使ひものになるのは一割しかみなかった。二世の日本語というのは非常に消滅が早かった。差別と闘って来た多くの二世たちは、百二十パーセント、アメリカ人にならうと努力してきたからです。そこで慌ててドナルド・キーンとかサイデン・ステイツカーといった現在は日本文学の研究家になってゐるやうな白人で語学力のある人々を集めて特訓し、太平洋戦線に配属したのです。そして日本軍の玉砕したあとに残された作戦命令や作戦地図の解説にあたらせた。日本軍が何を企んでゐるかを一所懸命に読まうとする。南方総軍司令部からのものは邦文タイ



プで打つてあるから難しくともまだ読める。ところが、現地の部隊長が戦陣の中で急いで書いた達筆の草書体の命令書などはとても読めない。漢字がある、字画が多い、崩してある、難しい。彼らの持つてゐる漢和辞典がボロボロになるまで引いても、日本軍の腹の中が読まきれない。

このやうにことばの問題は彼らにとって、日本統治といふことを考へると大変な障害だったのです。だから日本語の文字記号を改変した。そして、それを強制した。それがそのまま今日まで続いてゐる。大変な文化的危機です。

天武天皇の時代、即ち大化の改新の時は明治維新の際と同じで自ら選びとつて唐制を導入した。強制されたからではない。要塞を作つて軍事的脅威に備へたが実際の侵攻はなかつた。しかし、第二次大戦の時は彼らは実際に侵攻してきて占領政策を強制した。文字記号に対する改変を行った。それと同時に心に対する掣肘を加へた。それは何か。検閲です。内務省警保局が行つた戦前の検閲は、新聞紙法とか出版法とかの法令に拠つたもので、××的××主義といった伏字が使はれてゐます。ちよつとした玄人なら前後の文脈で大体推測できる。従つて、伏字といふのは不愉快なものではあるが、戦前の検閲は建て前でやつてゐるやうなところがあつた。しかし、占領軍の行つた検閲はその証跡を一切残してはいけなかつた。活字を組み換へるか別の字句で埋めるかしなければならなかつた。伏字はタブーだったので。

検閲といへば戦前の官憲の専売特許で、占領軍が入ってきて言論の自由が回復しましたなどと臆面もなく書いた歴史記述がたくさんあります。しかし、実際には、新聞から雑誌・書籍・映画・演劇・放送・紙芝居に至るまで証拠を残すことなく実に克明な検閲が行はれてゐた。柳田国男のやうな偉い民俗学者の作品から毎日の新聞に至るまでそれがやられたのです。このことについて記述した歴史教科書がありませんか。なぜ、この事実を書かうとしないのか。私には不思議で仕方がない。

どこに自由があるといへるでせうか。これは恐るべき心への抑圧です。どんなふう抑へたか。一つだけ実例をご紹介します。川路柳虹といふ明治の末年から詩作して来られた大詩人の作品です。この詩は南風書房といふ出版社が『現代日本詩集』といふアンソロジーの中に採録しようとしたものです。

かへる霊 (原文)

汽車はいつものやうに
小さな村の駅に人を吐き出し、
そつけなく煤と煙をのこして
山の向うへ走り去った。

かへる (検閲後)

汽車はいつものやうに
小さな村の駅に人を吐き出し、
そつけなく煤と煙をのこして
山の向うへ走り去った。

降り立つた五、六人のひとびとは
白い布ぬので包んだ木の箱を先頭に、
みんな低く頭を垂れて
無言で野路のみちへと歩き出す。

かつての日の光栄は、
かつての日の尊敬すべき英雄は、
いま骨となつて故里へ還つたが、
祝福する人もなく、罪人ざいにんのやうに
わづかな家族に護られて野路をゆく。

青い田と田のあひだに
大空をうつつす小川
永遠の足どりのやうに
水の面おもてに消えまた現れる緩い雲。

降り立つた五、六人のひとびとは
白い布で包んだ木の箱を先頭に、
みんな低く頭を垂れて
無言で野路へと歩き出す。

青い田と田のあひだに
大空をうつつす小川
永遠の足どりのやうに
水の面に消えまた現れる緩い雲。

この自然のふところでは
すべてが、あまりに一やうで
歎びと悲しみも、さては昨日きのふも今日けふも、
時の羽搏きすら聴えぬ間に生きてゐる。

無言の人々に護られた英霊は、
燃える太陽の光りのなかで、
白い蛾のやうな幻まぼろしとなつて
眩くらしくかがやき動いてゐる。

かへるその霊の宿はどこか、
贖あがなはれる罪とは何か？

安らかに眠れよ、ただ安らかに
おまへを生み育てた村の家に、
戦ひのない、この自然と人の静かさのなか中に。

この自然のふところでは
すべてがあまりに一やうで
歎びと悲しみも、さては昨日きのふも今日けふも
時の羽搏きすら聴えぬ間に生きてゐる。

お前を生み育てた村の家に、
戦ひのない、この自然と人の静かさのなか中に。

検閲前の原文と比べて検閲後の無惨な姿が一目瞭然でせう。かつて歓呼の声に送られて村を出ていった若者が英霊となり、つまりお骨となって白木の箱に入って帰ってきた。その間に戦ひは敗れ、今は迎へる者とてゐない。夏の明るい野路を近親の者だけに守られてひつそりと英霊が帰って行く。それに対して呼びかけてゐる鎮魂歌。その明るい自然のどこかに蛾のやうに存在している霊。目には見えないが詩人の心眼にありありと見える霊に呼びかけたのがこの詩です。そこには明るい自然と、その不在といふ形で現存してゐる霊、それに対する呼びかけが見事に一つの詩の世界を織り成してゐますね。

ところが検閲官はどのやうに斧鉞を加へたか、どんな切取り作業をしたのか。どんなふう
に作者の心を切り裂いたか。「かへる霊」の「霊」がまづいけないといふ。この詩の校正刷を
アメリカで見つけてコピーしてきましたが、「霊」の字のところに青鉛筆が引かれてデリート
と書かれてゐる。いま一度、読み比べて見て欲しい。霊の姿、不在といふ形で現存してゐる
霊が一切否定されてゐる。ただの不完全な自然描写に改変されて詩でもなんでもないものにな
つてゐる。詩とは「人の心をたねとして、よろづのこの葉とぞなれりける」ものでせう。
ことばがズタズタに切り裂かれるならば人の心もズタズタになる。占領下の日本ではかうい
ふことがなされたんです。

今日はある意味では、靖国神社の参拝ひとつ総理大臣がままならない時代、霊といふものの存在を否定しようとするものが幾らでもあって、それが日本の文化の自づからなる発現を妨げてゐる現状があるとするならば、現在の危機は大化の改新前後の状況とをさをさ引けをとらないほどに深刻なものです。国語表現のいのちである文字記号に加へられた改変と日本人の心を拘束し続けてゐる目には見えない力による検閲が、今日もなほ続いてゐることは非常に不思議なことであり由々しいことだと思ひます。

予定の時間がまゐりました。今日のお話で何か不十分なところがありましたら、宣伝のやうで恐縮ですが『日米戦争は終わっていない』（ネスコ・ブックス）といふ、これは編集者のつけたタイトルですが、語り下しに手を入れた拙著が出ましたので、それで補っていただければ幸です。言語空間に対する外からの不思議な変形といふものが、どんな作用を私どもの心に及ぼし、かつ及ぼし続けてゐるかを私なりに解明しようと思つたものです。一言、紹介させていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

■ 天皇と政治

『聖徳太子憲法十七条』を読みながら
日本及び日本人について所懐を述べる

国民文化研究会理事長

小田村 寅二郎



佐田丘の日並皇子御陵を望む

お手許にお渡ししてあるレジユメのはじめに、

「この合宿に参加された記念に、太子の『十七条憲法』だけでも正確に読み、かつ理解していただきたい、と念じて」

と書きましたが、今回このやうな題で皆さんにお話することになった由来がありますので、一言しておきます。今年もこの合宿で「録音テープ」を採ってくださってゐるのは、西川伍朔さん、といふ方で、もう二十何年間もこの作業をしていただいてゐます。数へ年七十三歳で私と同じ年令の方です。その西川さんが、この春、私のところを訪ねて来られた時に、「国文研の合宿には、全国から色々な人たちが来るのですから、五日間の合宿中に、何か一つみんなにしっかり判つてもらつたものを持ち帰つてもらふなり、記憶にしっかり残るやうな勉強を身につけてあげたらどうでせうか。たとへば、十七条憲法の全文が読めるやうにしてあげるなどはいいことではないでせうか」と言はれたのです。私は西川さんの二十数年にわたる合宿参加の経験から出た、まことに貴重な御提言、とこれを受けとめたのでした。それで、今日の私の講義となつたのです。

では、聖徳太子の十七条憲法の全文が載つてゐる「レジユメ」をお手にしてください。限

られた時間です。この十七条全部を皆さんにわかっていただくことができかどうかと心配しますが、とにかく取組んでいきたいと思います。

聖徳太子の十七条憲法の訓み方は、色々ありますし、「総振り仮名」をつけたものもないわけではありませんが、同学の方々の御意見なども伺っているいろいろな検討しました結果、皆さんにお渡しした総振り仮名のレジュメを作りました。

なほ、「聖徳太子の十七条憲法」には「憲法」といふ文字がありますが、今日言ふ所の「大日本帝国憲法」とか「日本国憲法」とかいふ「憲法」とは多少意味が違ひます。この「十七条憲法」といふのは、日本の国を統べ治められる天皇のもとにゐる役人たちに対して、役人たる者が心掛けるべき最も大切な心構へを示されたものであって、必ずしも当時の国民全体に対して示されたといふものではなかつたと思はれます。聖徳太子は摂政といふお立場で時の推古天皇に代つて政治をみそなはせられてをられるお立場ではありますが、太子もまた、天皇のもとでこの憲法を役人たちに率先して垂範なさる御心組みであられたことは、申すまでもありません。このことは、どうか皆さんもしっかり心に留めてから条文の理解にはいつていただきたい所です。上からの押しつけ憲法などと片づけてはなりません。

さて、この「十七条憲法」は国民の上に立つ人々、当時の役人たちへ示したものと考へますと、現代の日本では役人でなくとも会社で部下を持つたり、学校で生徒を教へる先生で

あったり、とにかく多くの人々が人と交り、人の上に立つことも多いのですから、現代の日本においてもこの十七条憲法をよく味ふといふことは、大変に意味深いことですし、さういふ面も念頭に入れて、身近かなものとして取組む価値があると存じます。

この憲法はその名の通り十七ヶ条から成り立っておりますが、はじめの第一条、第二条、第三条は、全体的に見て総括的な心得と申しますか、最も基本的な人生観・社会観を示されたものと申すべきものですので、この三ヶ条についての御説明はあと廻しにいたします。そして第四条、即ち身近かなことで判り易い事項について示された所から私のお話を始めます。

そこで、一、二、三条を私が一通り読みますから、ご一緒に目をとめて聞いておいて下さい。詳しくはあとで御説明します。



一、に曰く、和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆黨あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣りに違ふ。然れども上和ぎ、下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。

二、に曰く、篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる。人尤悪しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さむ。

三、に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて、四時順行し、萬氣通ふことを得。地、天を覆はむと欲するときは、則ち壞ることを致さむのみ。是を以て君言ふときは臣承る。上行へば下靡く。故に詔を承りては必ず謹め。謹ますんば自ら敗れむ。

これが一条から三条です。次に第四条以下は、味はひながら読みませう。

四、に曰く、群卿百寮、禮を以て本と爲よ。それ民を治むるの本は要す禮にあり。上

禮れいならざれば下齊しもととのはず、下禮しもれいな無ければ必ず罪つみあり。是こゝを以て、群臣ぐんしん禮あるときは位次いじ亂みだれず、百姓ひやくせい禮あるときは國家自こくかのづから治をさまる。

「群卿百寮」とありますこの「群卿」とは、多くの卿すなはち役人の中でも上位にある人々の意です。「百寮」とは、百官（もものつかさ）とも申られし、いはば中・低位の役人の意です。従つて「群卿百寮」とは、お役人全部に対して呼びかけられた言葉です。

「禮を以て本と爲よ」。「禮」とは、中国から来た儒教の言葉です。目上の人と目下の人との間にお互ひに慈愛と敬仰が注ぎ合つてゐれば、上の者と下の者との關係が立派に整ひます。禮とは、さういふ關係を教へることですので、禮を以てすべての行動の基本にしてほしいと示されてゐる、要するに人たるの道を守つてほしいといふことです。

「それ」とは、まづ、の意。次の「民を治むるの本は要す禮にあり」は、政治といふものの基本は、禮すなはち人の道に合致してゐなければいけないといふことです。

「上禮ならざれば下齊はず」とは、人の上に立つ人が率先して人の道にかなふ行ひをするのでなければ、下の人が上の人を信賴してついて来てくれるわけではないか、といふことでせう。上が範を示してこそ下の人はそれを見習つていくわけですから、かうしてはじめて下の人にも禮がととのつていくやうになると言はれるのです。

「下禮無ければ必ず罪あり」。下とは目下の人、さらには役人の支配下にゐる国民をも指します。一般の人々にも禮が大切にされないやうな社会では、きっと犯罪が続発してしまふであらう。

「是を以て」、であるから、「群臣禮あるときは」とは、お役人たちが禮に合ふ行ひをしてゐるときは、の意。「位次亂れず」。世の中の秩序は乱れはしないし、「百姓禮あるときは國家自ら治まる」の「百姓」とは、お百姓ひやくしやうさんではなくて国民全体を指します。国民に禮がある時は自然にそのまま立派に治まって秩序ある國家になるといふのです。

以上が第四条の内容です。皆さんも身近かないろいろな経験と付き合せて考へてみるに値する内容ではないでせうか。

聖徳太子がこれを作られたのが推古天皇の十二年、西暦では六〇四年ですから、今から一三八二年前になります。正に大昔です。一三八〇年前の一人の日本人の祖先が書かれた言葉なのに、今の私たちに呼びかけてくださってゐるやうに生き生きとして受けとれる気がします。この合宿の第一日の夜に長澤一成さんが小林秀雄先生の言葉を引用して「過去の間からよびかけられる声を聞き、これに現在の自分がこたへねばならぬと感じたところに、江戸時代の伊藤仁斎とか荻生徂徠の学問の新しい基盤が成立した」といふ言葉を引用してをられました。皆さんも今日は一三八〇年前の聖徳太子といふ方からよびかけられてゐるのだ、と

いふ気持で十七条憲法の各条を味はってください。そして太子の呼びかけに現代の自分が応へなければならぬ、といふ眞剣さが生れてくれば、そこに古典を学ぶ基本姿勢も身につけてくることにならうか、と思ひます。

太子は、上に立つ人が率先して人の道に合ふ行ひをすべし、と一番先に言つてをられるのです。そこに政治の基本があるとされます。今の時代の政治は、その点どうなつてゐるでせうか。それとはかなり程遠い状況の中でうごいてゐるのではないでせうか。太子の示された所まではいけなくとも、それに近づかせようとする努力は必要です。その努力が現代政治においてなされてゐるかどうかが問題なのです。政治家が、禮を以て実践行動することがなければ、国は治りつこないと、一三三〇年前に太子が政治の基本を示していらつしやるんです。そして政治の基本なるものは、将来もまた永遠にさうなのではないでせうか。

五、に曰く、餐を絶ち、欲を棄て、明かに訴訟を辨せよ。其れ百姓の訴、一日千事あり。一日すら尚爾り、況や歳を累ねてをや。頃訟を治むる者、利を得るを常となし、賄を見て讞を聴く。便ち財有るものの訟は石を水に投ずるが如く、乏しき者の訴は水を石に投ずるに似たり。是を以て、貧しき民は則ち由る所を知らず。臣の道も亦焉に於て闕く。

冒頭の「餐を絶ち」の「餐」とは、他人様から御馳走されることをむさぼり望むことをいひます。今の世の中でもお役人が業者の供応にあずかるとか、料理屋、カフェー、バーなどによばれるといふ記事がよく見られます。太子の時代でもそれがあつたのでせうね。それを指してゐるのです。

で、はじめのこの一句は、ご馳走になりたい、ただで飲み食ひしたい、といふ欲望を、役人たちは各自の心から取り去りなさい、といつてをられるのです。次の「欲を棄て」の「欲」とは、盆暮れの贈りものをもらつたり賄賂のお金をもらつたり、ゴルフにさそつてもらつたり、今もよく見られる、あれを指してゐるのです。要するに役人なる人は、なんらかの政治上の権限を与へられてゐます。すると、ともすればその権限が自分個人のものだと錯覚し勝ちになり、天皇から託されてゐる権限であるにもかかはらず、自分のポストにある特権を自分のものだど錯覚しがちなんです。それが役人なるもののおちいりやすいところなんでせう。それを聖徳太子は見落されなかつたばかりか、正直な言ひ方でズバリ判り易く指摘されたのです。この指摘の仕方が実にすばらしいと思ひます。今の中曽根総理大臣だと、いや歴代の総理も同じでしたが、役人は品行方正でなければならぬ、などといふ訓辞のしかたしかりません。奥歯に物のはさまつた言ひ方、といふか、当り障りのない言ひ方で事をすませてし

まふ。ところが、聖徳太子はさうではなくて、「君たちはご馳走になりたがるだらう、あれはやめなさい。お歳暮やお中元をもらひたがるだらう、あれもやめなさい」と、具体的にはつきりと指摘するのです。はつきり指摘するといふことは、露骨ではあるけれども、そのものずばりを指摘しますから聞いた人には意味がよくわかるでせう。抽象的な話ではびんとこなくとも、このやうに「餐を絶ち、欲を棄て」と言はれてしまへば、凶星を指されたも同然です。すから、そのことはやめざるを得なくなりませう。僅か四文字にこもる力と申しますか、贅言ぜいげんの必要もなく意味が通じます。現代の政治家たち、深く味はふべきくだりと思ふのです。その四文字の次に「明かに訴訟を辨ぜよ」とありますから、以上の役人へのきびしい忠告は、ここでは裁判に関係する役人に対しての忠告であることが判ります。公明正大に裁判に当たれ、といふ意味です。

「其れ百姓の訴、一日千事あり」、いったい国民から寄せられる訴へごとは、一日に千件もあるだらう。「一日すら尚爾り、況や歳を累ねてをや」、一日でも千件ぐらいあるのだから、ましてや年々歳々の長期間の視野で見れば、どれだけの訴へごとなが役人のところを持ち込まれるかわからないではないか。だからどうしても裁判がたまってしまふ。そこでどういふことになるかといふと、「頃訟を治むる者、利を得るを常となし」、このごろの様子を見ると役人たちは、自分のふところをこやすことをいつも考へるやうになり、「賄を見て讞を聴く」。

「賄」とは、訴へる人が持つてくるいはゆる「袖の下」といふものです。私の訴へは急いで裁いてください、といふ目的で、役人の所に賄賂をもつていく。役人の方はその賄賂の額によつて順序を変へてしまふ、といふのです。「讞を聴く」とは、裁判の順序に手加減をする意味ですが、それは同時に裁判の判決の内容にも手心が加へられる可能性も生むことでせう。そして太子が指摘なさるには、「便ち財有るものの訟は石を水に投ずるが如く」お金を持つてゐる人が訟ごとを出してくる時は、水の中に石を投げ入れればパチンといふ音がすぐ耳にはいるやうに、すぐに反応が得られるのに「乏しき者の訴は水を石に投ずるに似たり」。お金を持つてゐない人の訴は、焼けた石に水をかけても、しゅつといつて水がとび散つてしまふやうに、何の目的も達しないことになつてしまふ。

「是を以て、貧しき民は則ち由る所を知らず」。かうしてお金のない貧乏な人たちは、何をたよりにして生きていけばいいかわからなくなつてしまふ、お役人がさういふことでは困るではないか、とおっしゃるのです。

「臣の道も亦焉に於て闕く」。さういふことでは、役人たるべき人の道は、もう全く欠落したことと同じになつてしまふではないか、これが第五条の内容です。要するに業者や国民からご馳走になる、あるいは供応にあづかる、袖の下をもらふ、かうしたことが役人として一番だめ。それは一三八〇年前からはつきりしてゐて、今でも役人が陥りやすい所であるの

に變りはないやうです。

六、に曰く、惡を懲し善を勸むるは、古の良典なり。是を以て、人の善を匿す無く、惡を見ては必ず匡せ。其れ諂ひ詐る者は、則ち國家を覆すの利器たり、人民を絶つる鋒劔たり。亦佞媚なる者は、上に對ひては則ち好んで下の過を説き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗す。其れ此の如き人は、皆君に忠無く民に仁無し。是れ大亂の本なり。

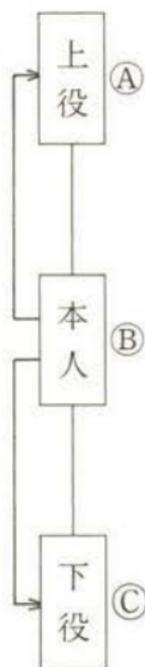
第六条の「惡を懲し善を勸むるは」とは、悪いことをしてゐるのを見たらこらしめなければいけない。立派な行爲を見たら、ほめたたへなさい、といふこと。

そのことは、「古の良典なり」。昔から立派な書物に書かれてゐることである、このことは昔から人間社会で皆が認めてきたことである。

「是を以て」それ故に「人の善を匿く無く、惡を見ては必ず匡せ」。立派な行爲を行つてゐるのを見たら、そのことを皆に知らせるやうにし、悪いことをしてゐるのを見たら、見て見ぬふりをして通りすぎてはだめで、必ずその場ですぐ注意し合ふやうにしようではないか。それは勇氣のいることだが、さうしてこそ世の中はよくなつていくのだ、と太子は確信を以

て示されたのです。そしてつづけて言はれるのは、「其れ諂ひ詐る者は」、口が軽くておべんちやらを言ったり、平気でうそを言ふやうな者は、「則ち國家を覆すの利器たり、人民を絶つるの鋒劔たり」、國家を滅ぼすほどのするどい武器みたいなものであるし、役人に対する国民の信頼を絶ち切ってしまう鋭い劔の役目をしてしまふ。おべんちやらを言ったり平気でうそをつく役人がゐるやうでは、國家の平安は保し難い、ときびしく太子は忠告してをられるのです。

「亦佞媚なる者は、上に對ひては則ち好んで下の過を説き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗す」。また、媚びへつらふものは、どういふことをふだんするかといふと、かういふことをする人なのです。すなはち、上役から叱られると、上役に対しては、自分は上役のお考へはよく承知してゐるのですが、私の下役がダメなものですから、お叱りをうける仕末になりました、と言って、自分は悪くはないが私の部下がいけない、といふ言ひ訳をして、責任を部下に転嫁してしまふ。また部下から突き上げられるやうな時には、その部下たちに、私は君たちの望む所はよく判つてゐてそのやうにしてあげたいのだから、なにせ私の上役は力量がなく頑固な人なので、その命令を君たちに伝達せざるを得ないから、やむを得ないのだ。私は悪くないが私の上役がダメなのだ、といふ言ひ訳をする。要するに図解してみますと次のやうになるのです。



右の図解のやうに、部長の(A)から叱られた課長の(B)は、(A)に対して課員の(C)がダメなので、といひ、課員の(C)から「課長しつかりしてくださいよ」と突き上げられると、僕は一生懸命にやってみるが、何分にも部長の(A)がわからずやだから、と逃げるたぐひのことです。聖徳太子の物のおしやり方は、何と具体的であり、体験的であり、そのものずばりの御指摘ではありませんか。私は本当にすばらしい、と思ふのです。ここに御指摘のことは、千三百年を経た今日の社会でも、さきの第五条の「まご養を絶ち欲を棄て」と同様に、私たちの周辺によく見られる好ましからざる姿ではないでせうか。世の中は変わっても人間は少しも変わっていないのではないでせうか。

「其れ此の如き人は、皆君に忠無く民に仁無し。是れ大亂の本なり。」一体、かういふ人たちは、一人残らず君主に対して忠義を尽くすことがなく、一方、国民に対して温かくいた

はることもできない人たちである。かういふ役人たちの国は、大乱が起きる本を作つてゐるやうなものだ。と、まことにきびしい御指摘をしてをられます。

七、に曰く、人各任有り、掌ること、宜しく濫れざるべし。其れ賢哲官に任ずるときは、頌音則ち起り、奸者官を有つときは禍亂則ち繁し。世に生れながら知るもの少し。剋く念うて聖と作る。事に大小無く、人を得て必ず治まる。時に急緩なく、賢に遇へば自ら寛なり。此に因つて國家永久にして社稷危きこと勿し。故に古の聖王は、官の為に人を求め、人の為に官を求めず。

「人各任有り」お役人はそれぞれに任務を持っている。「掌ること宜しく濫れざるべし。」その任務に取り組む以上は、自分に与へられた任務をいかげんにはいけない。

「其れ賢哲官に任ずるときは頌音則ち起り」、賢明な人格者がその任務についてゐる時は、あのお役人さんはいい人だといふ喜びの声が国民の中から上つてくるし「奸者官を有つときは禍亂則ち繁し」。よこしまなもの、心の曲つた人間が役務についてゐる時は、禍ひと乱れがはげしく起きてくる。

そこでよく考へてみると、「世に生れながら知るもの少し。剋く念うて聖となる」。世間に

は生れながらに聰明だという人はめつたにゐるものではない。その人たちの中から聖人のやうな立派な人が出るのは剋く念ふ努力をするからであるとおっしゃるのです。

ここで「剋く念ふ」といふ言葉について少し説明しておきませう。「おもふ」といふ言葉は「思ふ」とか「想ふ」とか書きますが、それらに對してここで使はれてゐる「念ふ」の字の意味する所は何か。「念ふ」の「念」は念仏の念と同じ字で、いつてみれば「心からしみじみと味はひながらおもふ」といふ感じがします。あとで説明する第二条の冒頭には「篤く三宝を敬へ、三宝とは仏法僧なり」とありますやうに、聖徳太子は深く仏教、それも大乘仏教に歸依された方でした。

大乘仏教における「仏」は衆生の最後の一人までが救はれない限りは、自分自身が救はれることは望まない、といふ大變に大きな慈悲心をお持ちの方とされてゐます。

「念佛」とは「仏の大慈悲の限りなき心を念ふ」ことを意味しますから、そこでいふ「念ふ」とは、自分で色々に思ふとか、想ひをめぐらす、といふ場合の「おもふ」とはちがつて「我を忘れ、我執から離れて、一途に、自分が生かされてゐる因縁を偲び憶念する」といふ如き「おもひ方」をさしてゐると思はれます。太子がここで使はれた意味は、大變に深いお心によることが偲ばれ、「人と生れてここに在るわが身」に寄せられる父母・祖先からの恩、天地大自然の恵みなどに包まれた自己を、その如く把握するに到った者こそ「聖と作る」と

言はれたのではないでせうか。「世に生れながら知るもの少し」であるが、「剋く念うて聖と作る」とのお言葉は心して拝読すべき一節と思ふのです。そしてつづけて、「事に大小無く、人を得て必ず治まる」と言はれたのは、それだからこそ、政治・行政・外交・教育にかかることは、物事の大小にかかはらず、そのポストにふさはしい人がゐてはじめて必ず成功するのであって、適任でない者がその衝に当れば、万事よい結果は得られるものではないといふことなのです。そして「時に急緩なく賢に遇へば自ら寛なり」とは、世の動きが急迫してゐる時と平安な時との区別なく、賢明な人をそのポストに用ゐることができると、世の中全体が常にゆったりして、安心した社会が維持できるといはれるのです。これも急所をついたご指摘ではないでせうか。

そして、このやうな配慮と適正な人事がなされた場合には、といふことで、「此に因つて國家永久にして社稷危きこと勿し」と示されます。「社稷」とは社会と同じ意味ですから、このやうであれば、國家は永遠に榮えていくし、社会が崩壊するやうなことはない」と確信ある御所信を述べられたのです。そしてこの条の締めくくりとして、「故に古の聖王は、官の為人を求め、人の為に官を求めず」と明快に結句を示されました。昔から立派な君主たちは、一つ一つの役にふさはしい人を求めて任命し、決して誰々にどこかの役を振りあててその人を待遇しよう、などといふことは、決してなさらなかつたのです」と太子は断言なさつてゐ

ます。

この「官の為に人を求め、人の為に官を求めず」といふこのお言葉は、何といふすばらしい政治姿勢でせうか。私は深い感銘を禁じ得ないのです。

日本は、明治の憲法発布以来、立憲政党政治を行つて来ましたが、残念ながら、この太子のお示しは、決して十分に歴代首相によって実行されたとは言へませんでした。政治の実権を持つ者が容易に実行出来ない事柄のやうです。しかし、太子の言はれるこのお示しは、絶対に正しいと信じます。それが実行出来ないのはまことに残念至極です。現代の政治を見ますと、さらにこの点では邪道に踏み込んでしまつてゐるやうです。さきの中曾根さんの組閣を見ても、派閥人事とか派閥勢力均衡の大臣数の割当などといふことが、何の恥らひもなくマスコミが報道し、それに合せて大臣の任命がなされてゐるではありませんか、聖徳太子が一三八〇年前にこれだけはつきり政治といふものはかくなければいけないといつて教へてくださつてゐるのに、中曾根さんその他、歴代の首相がやつて来た大臣任命は、正に太子とは正反対の「人の為に官を求め、官の為に人を求めず」ではなかつたでせうか。これでは、政治の大本が誤つてしまふわけで、わが国の立憲政党政治が大きく脱皮しなければならぬ肝腎のポイントは、ここにある、といへるかも知れませんが、人が先に決まつて、ポストがあつて決まる、などとは国民を愚弄するにも程がある、といふべきではないでせうか。

このへんのところも忘れないでお考へになつてみてください。

八、に曰く、群卿百寮、早く朝して晏く退け。公事は監きこと靡し。終日にも盡し難し。是を以て、遅く朝すれば急に速ばず、早く退けば必ず事盡さず。

これは判り易い文ですから、そのまま解釈します。お役人たちよ、上から下まですべてのお役人たちよ、あなたがたは、朝の出勤は早くして、夕方の退出はおそくしなさい。なぜかといへば公の仕事といふのは、いい加減な気持ちで取り組んではいけません。一日中かかってやり終へることが出来ないほど沢山あるのです。さうであればこそ、遅く出勤すれば、急ぎの用事の処理に合はないし、早く退出してしまへば、その日の仕事を完了することが出来ないのではなうか。――。

今の日本の官吏たちを見ますと、一概には言へませんが、上の方の人たちは車の送り迎へを受けてゐるのに、十時頃に出勤したり、夕方になると何やかやの会合のため、といつて早く退出することなど、さらに見られることではないでせうか。第八条についても、一三八〇年前と今とは少しも變つてゐないのかも知れません。

九、に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信有るべし。其れ善悪成敗要ず信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは、萬事悉く敗る。

この第九条の冒頭にある「信」といふ字の意味は、少し説明をする必要があります。この十七条憲法は役人たちへの御教示でもありますから、仏教学的、哲学的な意味を特に持たせて「信」の意味を考へる必要はないと思ひます。しかし太子は大乗仏教への深い信仰をお持ちの方ですから、そのお気持はこの「信」の一字の中にも生かされてゐると見るべきでせう。さういたしますと「仏への帰依の心」すなはち「我執を離れて相對する者と付き合ふ姿勢」が「信」の一面と見てよからうと思ひますし、それを日本語の普通の言葉の中で捜し求めますと、ごく平易な言葉ですが、「真ごころ」とか「まこと」といふ言葉が浮んで来ます。そのいづれも「我執を離れた心」を指しますから、ここでの「信」は「まごころ」と解してよいと存じます。それで、「信は是れ義の本なり、事毎に信あるべし。其れ善悪成敗要ず信に在り」とは、「真心を以て生きていくといふこと」は、まぎれもなく「義」——人の道の根本である。どんな仕事に対処しても真心を以て当らなければならぬ。人の行ひには善とか悪とか、成功とか失敗とかはあるが、その由来をたづねると、事に対処する時に「信」——まごころ——があつて対処してゐるかどうかによつて、善が生じたり成功が到来したりするのである。

何よりも大切なのは、真心である。"それ故に「群臣共に信あらば、何事か成らざらむ。群臣信無きときは、萬事悉く敗る」。役人がみんな真心をもつて仕事をするといふことであれば、どんなこともできないことがあらうか。しかし、反対に役人が真心を持たずに仕事をする時には、すべてのことは全部失敗に帰してしまふ。役人に真心がどんなに必要か、測り知れない所であるとおっしゃるのです。

十、に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心各執有り。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらざらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎を能く定むべき。相共に賢愚なること、鑽の端無きが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧へ。

第十条の内容は十七ヶ条の中でも特に意味深い内容をもちますし、長さも一番長い文になつてゐます。冒頭には「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ」とあります。私たちが何かの事で憤慨したりする時の「怒り方」には色々あります。顔を真赤にしたり、目くじらを立てたり、胸の中がむしゃくしゃしてくる、などさまざまです。その「怒り方」の中から

太子は、二つを選んで、具体的な「怒り方」を先ず示されたのがこの冒頭の句です。さきの第五条での賄賂や饗応について忠告されたのと同様にここでも人々の体験事実そのままを指摘されます。太子の真骨頂がうかがはれます。先づはじめの「忿」は、心の中から発する怒り、むかつとして怒る、といふたぐひ。「瞋」は、目くぢらを立てて顔いっぱい怒りをあらはすあの怒り方です。で初句の意味は「忿」を絶ち切り「瞋」を棄てて、他人が自分の考へと違ふからといって怒るやうなことはするなといはれるのです。なぜかといふと、といふお心ぐみに立って、その次の句が示されます。「人皆心有り。心各執有り」。人間といふものは皆一人びとりが「心」を持ってゐて、その「心」なるものは、自分が大切だ、といふ自分への「執」——執着——を持ってゐると指摘なさいます。自己への執着といふものは、人間として切り捨てられないもの、と強く率直にお認めなさる所から、物事を見ようとされるのです。ここが極めて重要な所で、「かくあるべし」といふ高遠な理想境を先立ててその点に立って忠告するといふのとは、大変な違ひがあります。太子はこのやうな「自己に執着する人間の事実」の上に立たれ、そして次の句を示されるのです。すなはち「彼是とすときは則ち我は非とす、我是とすときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ」と。この一節は繰返し読まれれば文意はお判りになる平易な文です。しかしその内容は太子の人生観、人生哲学の真髓がうかがはれる気がいたします。

「我^{われ}是^ぜとするとき」の「是とする」は「自分はこれが正しいと思ふ」であり、「非とする」は「自分はそれは間違つてゐると思ふ」の意味です。要するに「我」と「相手」の間では、意見が衝突することがよくある、といふ人間相互間の「事実」を確認し、その上で、では、そのことをよく考へてみれば」といふ視点に立ち直つて、「我が必らずしも「聖」―万事について正しい判断が出来る―ではないし、相手が必らずしも「愚」―万事について間違つた判断をする―ではなからう、と顧みられ、そして」とどのつまりは「の御思ひとして最終結論を求められて「共に是れ凡夫のみ」といふ悲痛極りない御発言に至るのです。この「共に是れ凡夫のみ」「のみ」といふお言葉、すなはち「よくよく考へると我も彼も共に欠点だらけの人間以外の何ものでもないのだ」との御忠告ですが、「共に」といひ「是れ」といひ「のみ」といふ三つは、いずれも強烈な御忠告の表示であることをうかがはせます。そして次の句は「是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鏢の端無きが如し」。彼と自分との間でどちらが正しいかを決めようとしても、そんなことは結局できないことではないか。なぜならば彼も我も時によつては賢くもあり、時によつては愚かでもある。そのさまは、あたかも「耳輪」は丸い輪であつて、どこが端^{はし}なのか全くわからないのと同じやうなものである。―そしてこの条の最後の句になりますが、それは「是を以て、彼の人瞞ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧へ」。そのやうなわけであるから相

手がめくぢらを立てて怒ってきても、もしかするとこちらに何か落度があつたのではないかと、そのことを先に考へよ。また、自分は絶対^{ぜったい}に正しいと思ふやうな場合でも、大勢の人の意見に従つて一緒^{いっしょ}に行動しなさいといふことです。

以上が第十条ですが、皆さんこれを味はひ得てどうお感じになりましたか。人間といふものは、一三八〇年前と今と全く變つてゐないこともお判りになると思ひますし、もしかすると、一三八〇年前の人のの方が、はるかに人間及び人間社会を正確に見てゐるし、そして、物の言ひ方も率直なことがお判りでせう。今日の社会では、見て見ぬふりをして、ごまかしてゐる社会に成り下がってしまったてゐるのかもしれない。これらの面に関する限りは、昔より今の方が進歩してゐるのではなくて、退化してゐるのかもしれない。

十一、に曰く、明かに功過を察し、賞罰必ず當てよ。日頃賞は功に在らず。罰は罪にあらず、事を執れる群卿、宜しく賞罰を明かにすべし。

第十一条は賞罰に關与する役人たちへの心得です。

「明かに功過を察し、賞罰必ず當てよ」。功績をあげた者を賞め、過失を犯した者を罰する場合には、よく觀察調査すること、そして賞に値する者に賞を、罰に値する者に罰を与へる

時には必ず正当でなければならぬ。

「日頃賞は功に在らず、罰は罪にあらざり」。最近の賞罰を見てみると、功績のあつたものが必ずしもご褒美をもらつてゐるのではなく、悪いことをしてもゐないのに罰せられりしてゐる。「事を執れる群卿、宜しく賞罰を明かにすべし」。国の政務を司る上役の役人たちよ。間違ひのない賞であり罰であるやうに必らず実行せよ。

十二、に曰く、國司國造、百姓に斂ること勿れ。國に二君なく、民に兩主無し。率土の兆民王を以て主と爲す。任ずる所の官司は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せむ。

第十二条は、中央、地方の長官たちが、国民から上納させる金品についての、きびしい指示です。私腹を肥やしてはならない。逆に言へば、当時でも私腹を肥す役人が目に余つたので、かうした指示が出されたのかも知れません。「國司國造、百姓に斂ること勿れ」。「國司」――朝廷から諸国に赴任させた地方官、「國造」――世襲の地方官――全国各地にゐる地方長官たちよ、国民から自分勝手に税金を取り立てることは嚴禁する。なぜかといへば「國に二君なく、民に兩主無し。率土の兆民王を以て主と爲す」。日本の國には二人の君主がゐるわけで

はないし、国民にとって二人の主人があるわけではない。「率土」―国土のはて―全国に住んでゐる「兆民」―全国民―は、ただお一人の天皇を国の主人としてゐるのですよ。

さうであればこそ、「任ずる所の官司は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せむ」。任命された地方の役人たちはすべて間ちがひなく天皇の臣下である。だから、国民から取り立てる税金（金品）となるものは、「公」―中央政府―が入金し、後に各地方に分配する。それは公の秩序のもとでなされるものであつて、各地の地方長官、地方官たちが、それと並行して、各地ごとに、国とは別の税金（金品）を取り立てるなどといふことは、もつてのほかである。決して並行徴収してはならないとのいましめです。

十三、に曰く、諸の官に任ずる者、同じく職掌を知れ。或は病し、或は使して、事に關くこと有らむ。然れども之を知るを得む日は、和すること曾て識れるが如くせよ。其れ與り聞くに非ざるを以て公務を妨ぐることを勿れ。

「諸の官に任ずる者、同じく職掌を知れ」。色々の役職についてゐる者は、職場全体の作業について自分の作業と同様によく精通してゐなければいけない。「或は病し、或は使して、事に關くこと有らむ」。時には病気で欠勤する者も出るだらうし、時には出張して担当の仕事に

従事できない者も出ることであらう。

「然れども之を知るを得む日は、和すること會て識れるが如くせよ」。さうした時に、どのポストの仕事は今日は人がゐない、と氣づいた時には、その人の仕事を代つて和やかな姿勢で取組むに當つて、前々からその仕事がよく判つてゐることくに処理しなさい。さうした心組みを平素から持つてゐてこそ役人たる者といへるのだ。

「其れ與り聞くに非ざるを以て公務を妨ぐること勿れ。」さういふ使命に立つてゐてこそ役人なのだから、万一にも、その仕事は私の管轄外だから私には関係がない、などと言つて、大切な公務に支障来たすやうなことがあつてはならない、と示されるのです。戦後の日本では「役人は公僕」とよく言はれてきましたが、役所などに出むいてみると、ある窓口には役人がゐない、隣りの役人にたづねと、僕にはわからぬ、とつっけんどんに追ひ払はれる、などといふことによく出くはしますが、公僕などの言葉すらなかつた大昔に、太子はすでにその辺りのことを役人たちの重要な心がけとして示してをられたのです。

十四、に曰く、群臣百寮、嫉妬有ること無かれ。我既に人を嫉めば、人亦我を嫉む。
嫉妬の患其の極を知らず。所以に智己に勝るときは則ち悦ばず、才己に優るときは則ち嫉妬む。是を以て、五百歳の後、乃今賢に遇はしむとも、千載以て一聖を待つこ

と難し。其れ賢聖を得ずんば、何を以てか國を治めむ。

第十四條は、役人たちはともするとお互ひに「嫉妬しあふ」傾向があるのをきびしくいさめてをられる所です。「群臣百寮、嫉妬有ること無かれ」。「百寮」は「もものつかさ」大ぜいの役人たちよ、お互ひに嫉妬し合ふことはやめなさい。「我既に人を嫉めば、人亦我を嫉む。嫉妬の患其の極を知らず」。自分が前々からある人を嫉んだりしてゐれば、その人もまたこちらを嫉むやうになるものだ。両者の嫉み合ひは、次第にエスカレートしてどこまで行くか、はかり知れなくなる。嫉妬とはさういふものなのだ。

「所以に智己に勝るときは則ち悦ばず、才己に優るときは則ち嫉妬む」。では、知識が自分より沢山ある人を見るとすぐに嫌な氣持になり、才能が自分よりすぐれてゐる人を見ると、すぐにうらやましくなる。

「是を以て」そこで考へなければならぬことは「五百歳の後、乃今賢に遇はしむとも、千載以て一聖を待つこと難し。其れ賢聖を得ずんば、何を以てか國を治めむ」。五百年かかってやっと一人の賢人に出会ふことが出来るといはれてきたが、聖人に出会へるのは千年に一人といはれる。そのやうに賢人や聖人は容易に見つからないものであるが、しかし、國を立派に治めるためには聖賢はどうしても必要である。従つて役人同士で賢い人や優れた人を嫉

むやうな氣風があるのはもつてのほかである。

一五、に曰く、私に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり。凡そ人私有れば必ず恨有り。憾有れば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾起れば則ち制に違ひ法を害す。故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情なるか。

私たち社会生活を送つてゐる者にとって、「私と公」の関係は常に重大な関心事ですが、「私」と「公」といふ相背反する事柄を自分の心の中で両立させることは時に大変むづかしいこととなります。この第十五条はその事に言及してをられるもので、十七条の中でも特に重要な意味を持つ一つと思ひます。先づ冒頭の一句は、「私に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり」とあります。「私に背きて」とは、「私心」はさきの第十条で「人皆心有り、心各執有り」と仰せられたやうに、太子は人は誰でも「私心」を持つてをり、それに執着してゐるもの、との基本的な把へ方をしてをられます。従つて「公私」を両立させるのは大変むづかしいといふ理解に立つてをられますから「私を滅して」といふ表現はお使ひにならず、「私に背きて」すなはち「私といふものから離れるやうにして」と言はれるのです。次に「公に向ふは」とは、「私心から離れるやうにして」公のことに尽くすやうにする」と示され、その

姿勢こそが「是れ臣の道なり」。「臣たる者の進むべき道である」と言はれるのです。さきの大東亜戦争下日本では「滅死奉公」。「私を完全否定して、私なるものはことごとく公に捧げる」といふスローガンが政府筋から国民に提示され、ステッカーまで作られて家々の門柱に貼られたほどでした。しかし太子のいはれた「背私向公」と当時使はれた「滅私奉公」とでは、似て非なる心理把握が見られたのです。国民の総力を本当に發揮させようのは、どちらであるかを考へておくことが大切だと思ひます。太子は決して「私心」を否定してはいらつしやらない。そのお気持が「私に背きて」といふお言葉に現はれてゐるのです。「私心」を肯定するのと否定するのでは、生きる力を振ひ立たせる点でも潜在的な力を生み出させる点でも雲泥の差がありはしないでせうか。次は「凡そ人私有れば必ず恨有り。憾有れば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾起れば則ち制に違ひ法を害す」。およそ私心があると必ず他の人たちにうらみがましい氣持をおこしてしまふ。他人をうらむ氣が起きると、その人たちと一緒に行動が出来なくなる。一緒に行動出来ないとなれば、その人は私心のために公事に尽し得なくなる。要するに、うらみがましい私心を先立てては、役人として真先に守らねばならない色々の制度にも合はなくなるし、きめられた法則をも踏みにじることになってしまう。

「故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情なるか」。それ故に、この憲法の第一条

で、役人たちは上の者と下の者が心を和ませて仕事に従事するやうに、と示したが、その趣旨はこの第十五条の意を含めて同じことをいはんとしたものであるといふことです。

十六、に曰く、民を使ふに時を以てするは、古の良典なり。故に、冬の月は間あり、以て民を使ふべし。春より秋に至るまでは農桑の節なり、民を使ふべからず。其れ農せずんば何をか食はむ。桑せずんば何をか服む。

この時代の国民の税金に当るものは、農作物を納める年貢や、公の仕事に数日間働きに出る、ことなどでした。その働かせる時期についての御指示が、この第十六条です。

「民を使ふに時を以てするは古の良典なり」。民を召し出して働かせるには、時機を選んでしなさい、とは昔から伝へられた立派な教へである。「故に、冬の月は間あり、以て民を使ふべし。春より秋に至るまでは農桑の節なり、民を使ふべからず。」それゆゑに、冬の月は農作業がなくて皆が時間の余裕を持つてゐる時機なので、この時に民を使ふべきである。春から秋にかけては農作業や養蚕作業の真最中であるから民を召し出してはいけない。「其れ農せずんば何をか食はむ。桑せずんば何をか服む」。一体国民は農作をしなければ食べる道も立たないではないか。養蚕して糸をつむがなければ着る着物も作れないではないか。

一七、に曰く、夫れ事は獨り斷ずべからず。必ず衆と與に論ふべし。少事は是れ輕し。
必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ふに違んでは、若しくは失あらむことを疑ふ。
故に衆と相辨ずれば、辞則ち理を得む。

「夫れ事は獨り斷ずべからず。必ず衆と與に論ふべし。少事は是れ輕し。必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ふに違んでは、若しくは失あらむことを疑ふ」。そもそも物事は独断で行つてはいけない。必ず大ぜいの人たちと一緒に討議すべきである。しかし小さな事は大したことではないから必ずしも大ぜいの人と一々討議するには及ばない。ただし重大な事柄を討議する場合には、万一にも誤つた結論を出してはいけない、と心がけて取り組まねばいけない。「故に衆と相辨ずれば、辞則ち理を得む」。それゆゑに、大ぜいの人たちとよく話し合つていけば、そこに出来る結論は、道理にかなつたものが得られるであらう。

以上で「聖徳太子の十七条憲法」の第四条から第十七条までを講義したことにして、最初に申し上げたやうに、この憲法の中核をなすと見られる第一条、第二条、第三条についてお話をいたします。

この三ヶ条のうち、第三条は日本の国柄、天皇を中心とする社会についてのお示しであり、その前の第二条は仏教に対する太子の深いお考へが示され、はじめの第一条は、総合的にみて全十七条を包括しての御所信の表明と受けとれます。それで今日は、この三ヶ条について、第三条、第二条、第一条といふ順序でご説明しますのでお含み下さい。

第三条、「詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて四時順行し、萬氣通ふことを得。地、天を覆はむと欲するときは、則ち壊るることを致さむのみ」。天皇に直属する役人を「臣」といひます。その「臣」たちが「天皇」に対する基本姿勢を明確に示したのがこの第三条なのです。すなはち、みことより「天皇から「詔」——御言葉——が出された時には、「臣」は必ずつつしんでこれに従はなければならぬ。（このことは「承詔必謹」と名づけて以後の日本の歴史を貫く言葉となつたものです）「天皇」と「臣」との関係は、「天皇」は「天」であり「臣」はそれに対して「地」である。宇宙の姿を見れば、すぐ判るやうに、「天」が「地」を上から覆うてをり、「地」が「天」を上に乗せてゐるからこそ、春夏秋冬の年ごとの季節も順序よく移り変つていき、生きとし生けるものの生気もみちあふれてゐるのである。この宇宙・大自然の天地の関係はきはめて根本的なことであり、かりに「地」なる「臣」が、「天」なる「天皇」の上に出ようとすることが万一にも起れば、世の中は破壊

されてしまふが、自然の理にさからつたこのやうな野望は崩壊するだけである。

「是を以て君言ふときは臣承る。上行へば下靡く。故に詔を承りては必ず謹め。謹まらずんば自ら敗れむ」。「天皇」と「臣」の関係は以上のやうであるから、天皇が仰せられる時は臣はつつしんで天皇のお言葉をかみしめて受けるのだ。天皇が何かをなされば臣はそれに従つて事をなす。それ故に、先にも示したやうに詔をうけたまはつた時には必ずつつしんで従ふことが大切である。「承詔必謹」の文字が二回記されてゐることに注意）もし詔をうけてつつしんでお受けせずに反抗するやうなことがあれば、その臣は自滅してしまふことにならう。以上でお判りのやうに、第三条は国の政治の基本について、臣すなはち役人たるものの根本的心得が示されたものです。

その前の第二条は、仏教に対する太子の深い篤信を述べられたものです。「篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり」。真心を以て三つの宝を敬ひなさい。ではその三つの宝とは何かといへば仏と法と僧の三つである。これこそが、生きとし生けるものことごとくが帰着する所であり、この世における最高の教への道である、と示されます。仏・法・僧の「仏」は仰ぎ拝む対象、すなはち「帰依の対象」を指し、「法」は「仏が説かれた内容、經典」を指し、「僧」は「仏を仰ぎ、仏の教へを学ぶ人たちが、一緒に修業する生活」

を指します。また「四生しじょう」とは胎生たいじょう（親の身体から生れるもの）、卵生らんじょう（卵から生れるもの）、湿生しつじょう（虫のやうに湿気の中から生れるもの）、化生けじょう（前世とは違ったものに生れ変つてくるといふもの）の四つを指し、この四つによつて「生きとし生けるもの」の意味となります。そこまではお判りになつたでせう。つづけて太子は「何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる。人尤悪しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ」。どんな時代の人でも、どんな国の人でも、この仏教の教へといふものを貴ばないものがあらうか。人間といふものは極端に悪い者はめつたにない。大部分の人は能く教へさへすればその教へに従ふものである、と言はれるのです。

「其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さむ」。さうであれば、そもそも仏・法・僧といふ三宝から成り立つてゐるこの仏教に帰依しなければどうして間違つた道にふみ込んだ人たちを正しく立ち直らせることができようか。他には道がないと信ずる。―太子の篤信のお心が、ピンと伝はつてくるお言葉です。

なほ、仏・法・僧についてですが、皆さんがお持ちになつてゐる黒上正一郎先生の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ書物の一一三ページ五行目から、黒上先生が詳しく書いてをられます。すなはち、「仏」は「単に個人的偉聖ではなく、萬徳の源泉たる永久生命の體現人格として、永く衆生を照護する帰依の對象となるものである」と。「法」については

「その所説の法も亦単なる典籍ではなく、衆生生活の内的軌範を開示する教法として弘宣かうせんさるるのである。」と述べられ、「僧」については、「ここにこの法を実現する同信生活、またその教育者としての僧も、共に眞實の大道に基くところの教化活動を相續し得るもの」と説いてをられます。決して難しい説明ではありませんので、あとでよく味はつて読んでいただきたい所です。

さて最後になりましたが、第一条についてお話しします。冒頭の一句は有名な一句で「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す」です。簡単に字句だけを解釈しますと、「和」を以て貴いこととし、さからふことが無いやうにすることを、お互ひの目的とする。といふお言葉です。しかしこの一句を味はっていきますと、人生や社会生活を営む上で「和」をスローガンに立て



ていけ、といふのとはかなり趣きが違ふことに気づきます。また、「和」は平和のこと、従つて反戦思想を意味するなどといふ独断で取り組むのも勿論間違ひです。太子が、人間といふものをじつと見つめられて、人間は相争ふ傾向があるもの、との深い御認識に立たれてのお言葉ですから、その出発点から物を言はうとされてゐることを心して味はひたいと思ひます。さう考へますと「和を以て貴しと爲し」は、人はお互ひに和し合ふことが難しいからこそ、特に「和」(和んだ心)をもつて「貴し」(大切なこと)と考へるやうに努力しよう、といふお心組みが受けとめられてきます。次は人は相手にさからひがちのものであればこそ、「忤ふ」(さからふ)ことがないやうに目標を立てておく必要がある。と仰せられるのです。太子は、第十条に明示されたやうに、人間は「共に是れ凡夫のみ」との視点に立たれた方ですから、醜い人間の現実についても、そのままにとらへられ、その現実を背負つてゐる人間お互ひがどうすれば少しでも良くなるか、その方向づけとその方向に進むプロセスとに注目されて、そのプロセスの中味を書き示された、と思はれます。人間味に溢れる御教示ではないでせうか。

前の句に続けて述べられたお言葉は、「人皆黨あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣りに違ふ」。考へてみれば人は誰でも「党」すなはち好きな者同士でグループを作る傾向があるし、立派な人格を持つてゐるといふ人は稀れにしかゐない。それ故に、時

には主君や父親の言ふことに、素直に従ふことをしなくなるし、そのあげくには、たちまち隣りの人と仲たがひをしてしまふやうなことになる。「然れども上和ぎ、下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事が成らざらむ」。さうだけれども、上に立つ人が権力をかさに着たとげとげしい心ではなくして和らいだ心で下の人々に相對し、また下の人はいふらみがましい氣持や嫌惡の心ではなくして睦まじい明るい心で上の人々に相對する、といふ氣風を整へておけば、上の人と下の人と一緒に物事を討議し合つても、必ずお互ひに十分に意志を疏通し合ふことが出来るに違ひなからう。さうなれば、物事はごく自然のうちにしてすべて道理にかなふやうにならう。このやうであれば、どんな至難な事柄でも成し遂げられないといふことはない。——なほ太子が「上和かみやばらぎ、下睦しもむつびて」とのやうに「上和ぎ」といふ、「和」する努力は上の人から先に行へ、と示された所も非常に大事なところと思ひます。第四條にも「上禮ならざれば、下齊はず」とありましたね。これも同じく、上の人が先に禮にかなつた行為をしはじめることを指摘してをられます。

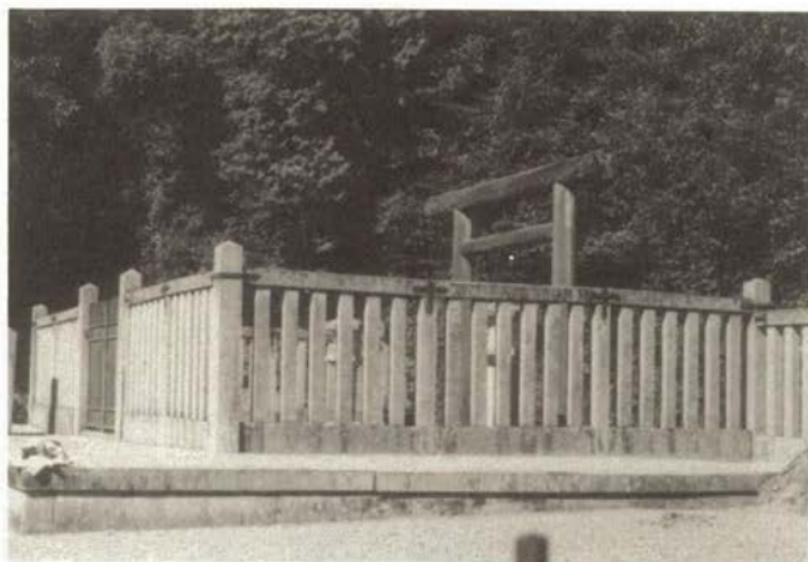
以上で、「聖徳太子十七條憲法」をすべてお読みになれ、かつ内容も一応ご理解されたと思ひます。合宿に参加した良いお土産になつたとすれば、嬉しい限りです。最後に一言つけ加へますと、十七條憲法の全体を通じて上の地位にある人への忠告がきびしく述べられてある

ことに関連して、日本の一番上にをられる天皇といふ方はどういふ方々であられたか、について申し添へます。大昔からずうっと一貫してゐる天皇の国民に対するお心、それを大御心おほみこころと讃へて来てをりますが、天皇さまは「私心わたくしこころを無くして」世の平らぎと国民の安らぎとを、ご祖先のみたまに、毎朝拝んでくださつてゐる方なのです。ご歴代の天皇の御製を読みますと、さうした日々の御体験が沢山の和歌にはつきりと拝見できます。和歌は「うそ」すなはち心にないことを詠めば和歌のリズムは生れてきませんから、和歌としてもすばらしい御製が拝見できるといふことは、まごころを以て朝な夕な国の平安と民の幸福とを祈りつづけて来られたことの客観的証明にもなります。有難い皇室を上^あにいただいてきた国民の幸さちにも合せて心を寄せていただきたいと念じます。

今上天皇の御歌について

亜細亜大学名誉教授
亜細亜学園理事

夜久正雄



日並皇子御陵

御製の数について

御製歌碑について

生物についてお詠みになった御歌

地名を詠み込まれた御歌

御家族についての御歌

御製の数について

天皇様の御歌は、正式には御製ぎよせいと言ひますが、話の中ですから場合によつて「みうた」とか「おうた」とか言はせていただきます。さて、現在までにどのくらゐ発表されてゐるかご存じですか？今年の元日の新聞に前年の御歌が発表されましたが、その御歌を加へると六百首を越えるのです。

私は六百首になつたときに、これはすごいと思ひました。どうしてかと申しますと、明治天皇様の御在世中に発表された御製は、五百首位と言はれてをります。それは日露戦争を中心にして御発表になつたものです。この戦争で日本は非常な苦戦になり、とても勝つ見込みが立たないといふところまで追い詰められたときに、時の侍従で御歌所おんたどころの長官、高崎正風といふ豪傑がゐりました。有名な話ですが、この人が、かういふ戦争の状態では、天皇様のお心を国民に直接伝へてもらはなければ、国民が士氣沮喪してしまつて、この戦ひはどうなるか分らない、さう思つて、無断で、天皇のお作りになつた御歌を数首選んで、満州の前線で戦つてゐる軍にその歌を知らせたのです。天皇がいかにこの戦ひを心配していらつしやるかといふこと、また兵士の苦戦をどのやうにお慰びになつていらつしやるかといふことを直接前

線に伝へたのです。後、高崎正風は、黙って御製を発表したことで、明治天皇様からお咎めがあったらどうするか、と聞かれたときに、彼曰く、自分は明治維新の時にどうせ死んだ体なのだ、明治維新の薩摩の志士ですから、今日までずっと長生きさせてもらってゐるのだから、切腹しておわび申上げる、と答へたさうです。しかし結局、何のお咎めもなかったさうです。

明治天皇様は御生前五百首の御歌が公表されてゐるさうですが、戦後我々に判つた明治天皇様のお作りになつた御歌は九万三千三百幾首です。この歌の数は、未曾有の数です。恐らくこれから先これだけの数の歌を作るお方はもう出られないだらうと思ひます。これだけたくさんの御歌をお作りになつた明治天皇様でも、御生前発表は五百首といふのですから、それに比べて、六百首の御歌を陛下が公になさつたといふことは、それこそ倍率で言へば大変な数になつてしまひます。しかし、今上陛下が九万三千幾首といふお歌をお作りになることはなくとも、相当の数の御歌をお作りになつていらつしやることは想像できます。ですから、天皇様は折にふれては歌をお作りになつていらつしやるかと、考へていいのではないでせうか。元日御発表の歌だけではないでせう。その何倍か何十倍かのお歌をお作りになつていらつしやるかと考へていいのです。

今日、小田村先生のお話しの中にもありましたし、それから昨日の慰霊祭の時に小田村四

郎先生が拝誦された御歌の中にもありましたか、

我が庭の宮居に祭る神々に世の平らぎを祈る朝々

といふ御歌があります。宮中にお祭りしてある神殿の神々に、「我が庭の宮居に祭る神々に」、「世の平らぎ」世の中が平かであるやうに「祈る朝々」といふのですから、今上陛下は毎朝神にお祈りを捧げてをられるのです。

明治天皇の御歌の中にも

かみかぜの伊勢の宮居を拝みての後こそきかめ朝まつりごと

といふ御歌があります。これは伊勢神宮を拝んだ後に初めて政治のことを聞くといふことで、天皇様といふ方は、明治天皇も大正天皇もさうでいらっしやいませが、お仕事には、認証行為や外国の方との応接など



のことを含めて国事行為があるわけです。ですから、朝、神様にお参りしてから、御座所にお出かけになって、そこでいろいろお仕事をなさる。国の政治に関する大事なお仕事をなさるわけですが、その仕事の前に必ず神様にお参りされるのです。そのほかにいはゆる宮中のお祭りの行事が沢山あるやうですが、それもなさっていらっしやいます。

ですから今上陛下は、「すのかみ皇神のいつくしき国」の天皇としての皇祖の神をお祭りするお仕事と、歌を作ることとを並べて日々その道をお修めになってゐるといふことが出来ます。これが日本の天皇様の伝統と申し上げていいことですし、また日本の文化の一番基本的な伝統だと思ふのです。

毎年新年の一月中旬位になりますと、宮中で歌会始が行はれます。これは天皇様が主催なさる歌の会なのです。そこに、国民の、「詠進」と言ひますが、国民が歌を詠んでそれを提出し、その歌の中からいい歌を選んで天皇陛下の御前でその歌を朗詠するのです。また、そこで、天皇陛下、皇后陛下、皇太子殿下、皇太子妃殿下、皇族の方々の御歌をも発表なさいます。この行事は、日本の国柄にとって非常に重要な行事になってゐます。つまり「皇神のいつくしき国」の「祭祀」と並ぶ「ことたま言霊の幸はふ国」（しきしまの道）の行事と申し上げたいと思ひます。天皇様が歌をお作りになるといふことは、「神ながらの道」と並ぶ「しきしまの道」の伝統なのであります。

御製歌碑について

今、日本の国には各地に今上陛下の御歌を石に刻んだ歌碑が立ってゐます。風光のいい所や、また思はぬ所に御製歌碑が立ってゐることがあります。

昨日雲仙に行かれた方の中には、野岳といふ所に行つて、吉田茂さんの書かれた御製の、高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

といふ、昭和二十四年、占領中にお作りになつた御歌の歌碑をご覧になつた人もゐるでせう。このやうな歌碑が日本全国に、百三十もあります。（補記・昭和六十二年一月現在では百四十余基）

『万葉集』の歌碑も随分あると思ふのですが、それは多勢の作者のものでありますから、今上陛下お一人の歌碑で百三十といふことは、これはもう不思議なほど沢山の数です。これは、今上陛下の皇太子・摂政の時代からのものですが、主として昭和の六十年、御在位六十年間のもので、国民の陛下に寄せる思ひが結晶して出来上がったのです。政府の命令や奨励で出来たものではありません。国民の中から自然に興つて来たことです。

国民の陛下に寄せる思ひについて申しますと、お話することが沢山でてくるのですが、戦争中に、戦争目的を達成するために、ほとんどの国民は全員命をかけた、男達は最後の一人になるまで戦ひ抜くとの決心を皆持ったのです。しかし、戦ひ利あらずして陛下の御聖断によって矛を収めよといふお言葉でしたから、終戦の詔書に全員従って戦ひをやめました。

今日、小田村さんが、十七条憲法第三条の「詔を承りては必ず謹め」といふお言葉に簡単な注釈をなさいましたけれども、開戦の詔書が出るまで、開戦すべきでない、あるいは開戦するのがいいんだと、国民は非常に激しく議論を行ってゐました。しかし、開戦の詔書が出たとき、全国民は、「詔を承っては必ず謹め」といふことを実行したのです。

そこで戦ひに入りました。その戦ひを止めるときも、終戦の詔書にしたがって止めました。陛下のお言葉によって戦ひを止め、それぞれ生き残ったといふ感じを我々は皆持つてをります。

戦争が終つたとき、私は東京にゐましたからよく知ってゐますが、終戦の詔書を拝してたくさんの人々が皇居の前に出かけて行つた。食物もろくになく、もう本当に疲れ切つて、よれよれの服装を着たまま、みんな皇居前の広場の地面に座つて涙を流しながら、それぞれ陛下に自分達の心持ちを申し上げたのです。その事実から戦後が始まつてゐると私は思ひます。この国民の心が百三十もの御製歌碑の建設に結晶してゐると言へないでせうか。

生物についてお詠みになった御歌

つぎに平和な時代になってからの、天皇様のお人柄がよく表はれてゐると思はれる御歌について、お話し致します。

生物についてお詠みになつた「折にふれて」といふ御歌があります。「あけぼの集」といふ天皇様と皇居様のお二人の御歌を集めた歌集にある、昭和四十五年の御歌です。

筑紫の旅志布志しほしの沖にみいでつるカゴメウミヒドラを忘れかねつも

「筑紫の旅」といふのは九州の旅です。「志布志」は、大隅半島の、昔は漁港だったさうですが、その志布志湾の沖に「みいでつる」発見した「カゴメウミヒドラを忘れかねつも」カゴメウミヒドラを忘れることが出来ない、といふ歌です。ですから、カゴメウミヒドラといふのは何か非常に美しいものではないだろうかと思つたり、何か物凄くおいしい魚かなにかだらうかと思つたり、いろいろ想像してみました。私は生物の知識は全くだめですから、それで字引を引いてみますと、『広辞苑』に、「ヒドラ (Hydra) ヒドロ虫類裸子目の腔腸動物。池沼中の樹枝石などに付着して生活。体長約一センチメートル。―通常円筒状で著しい伸縮

性があり、一端の足盤で他物に付着し他端の口の周囲の六本の触手を長く伸ばして水中の微生物を捕食する。広く地球上に棲息。」この説明を読んだとき、私は本当に驚きました。体長一センチのこんなものが、忘れかねつものといふのは、一体どういふことだらうと思ひました。次は、「興居島にて」といふ御歌。興居島といふのは松山の少し先の離れ小島です。

静かなる潮の干潟の砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし

静かな潮の干潟になってゐる所の砂を掘って、やっと求め得たなあ、といふんですね。何を探し当てたかといふと、「おほみどりゆむし」といふのです。「おほみどりゆむし」といふのは『広辞苑』にはなく、「ゆむし」とだけ出てをり、五センチ位のタイ釣りの餌にする虫のことなのです。さういふものをやっと求めることが出来たんだと、お詠みになっていらっしやるのです。

天皇様は国の政治に関与されてゐると同時に、生物学を専門に御研究になつてをられるので、「カゴメウミヒドラ」や「おほみどりゆむし」など、一つ一つの小さな生物に対しても、実に深い愛情をもつてお詠みになつてをられることが分ります。生物学者だからそのやうな小さな生物に対して関心をお持ちになつてゐるといふよりは、むしろ生きとし生けるものに対する非常に深い具体的な愛情が天皇様の生物学の根本になつてゐる、と私は考へます。さ

うでなければかういふ歌は出来ません。

地名を詠み込まれた御歌

今度は地名を詠み込まれた御歌です。これも天皇様の御歌の特徴ですが、地名を詠み込まれた歌が非常に沢山あります。例へば「鹿兒島にて」といふ御歌。

みわたせばしづかなる朝をちかたに白き煙のたつ桜島

これは「鹿兒島にて」といふ御歌ですから、鹿兒島のどこかの宿舎で、朝、鹿兒島湾をずっと見渡された。「見渡せば静かなる朝」とありますから辺りは非常に静かなのです。全体が実に静かで、さうして「をちかたに」ずっと遠くの方に、白い煙の立ってゐる桜島、といふのです。我々が普通桜島を歌に詠むと、桜島は煙をどんどん吹き上げてゐるとか、非常に雄大だとか、大体桜島に焦点を絞る歌を作るものです。ところがこの歌は「みわたせばしづかなる朝」まず見渡すかぎりの全体をずっと展望されて、そしてはるかに、白い煙が立ってゐる桜島といふのです。かういふ歌は実に大きな歌なのです。見てゐる世界全体がその歌の中にあって、桜島は遙か彼方にあるのです。視野が実に広い感じがします。また噴煙を上げ

てゐる桜島といふものが実によく陛下の心に収められてゐる御歌です。そして桜島ではなくてはこの御歌は出来上がらない、どこかほかの活火山の島を持ってきても絶対に成り立たないやうな、実に具体的な、しかも心の大きい御歌であると思ひます。

次に「昭和五十八年国民体育大会にて」、といふ御歌があります。

薄青く赤城そびえて前橋のひろばに人びとよろこびつどふ

このあとの方の「前橋の広場に人々よろこびつどふ」といふご表現も、そこに喜んで集まつて行く人々の姿も心も全部表はされてゐるやうなご表現ですが、その一番最初の「薄青く赤城そびえて」といふ、これはもう何とも言へない、すばらしい表現です。前橋辺りに行つて赤城山を見ると、御歌のとほりに「薄青くそびえ」てゐるのです。自然そのものが非常に短い言葉の中に、ありのままにそっくり表現されてゐます。

これらの御歌を読むと、陛下が生物の一つ一つ、風物―島や山や―その一つ一つに、具体的に心を尽くしてそれと心を通はせていらっしやるお姿が浮かんできます。

御家族についての御歌

なほ陛下の御家族についての御歌を、講演資料の中に何首かあげましたが、陛下は戦争が終ったときに、本当に身を捨てての御努力をなさり、日本の国を亡国からお救ひになった方ですから、その頃の御歌を見ると、実に悲壯な、国のためにはすべてを捨ててかかるといふお心持ちが表はれてをります。しかし国のために尽すといふお心は、御家族を思はれるお心と少しも変わらないのです。我々は、普通天下国家のために大いに尽すといふ時は、家族のことはいい加減にしておいて、専ら天下国家のためにやってみればいいやうに思ふのですけれども、それは心の持ち方としては、とんでもない間違いです。国のために命を捨てて行動なさることが出来るお方だからこそ、陛下はこれだけ深いお心でご家族のことをお思ひになることが出来るのだと思ひます。私たちは身を捨てて国家を思ふといふことはなかなかできさうもないけれども、しかし自分の家族のことを本当に思ふことは出来るはずなのです。ですから、かういふ御歌は我々の心の持ち方にとって大きなしをりになるだらうと思ひます。

まづ、「母宮より信濃路の野なる草をたまはりければ、一首のうち」として、これは昭和二十年の歌です。母宮は貞明皇后様で、天皇様が敗戦の中で非常な御苦心をなさっていらっし

やることを、母宮として深く御心配になつていらつしやつたのです。貞明皇后様は戦争が激しくなるまでずっと東京にゐらしたやうですが、最後に信濃路に疎開なされた。そこで陛下が生物学者で生物を愛し、草木を非常に大切にされることを知つていらつしやるものですから、信濃路の野なる草を陛下にお送りになられた。そのことを詠まれたうちの一首が、

夕ぐれのさびしき庭に草をうゑてうれしとぞおもふ母のめぐみを

といふ御歌です。

昭和二十七年に、やうやく平和条約発効になつたときに、もう貞明皇后様がお亡くなりになつてゐますので、

冬すぎて菊桜さく春になれど母の姿をえ見ぬかなしき（『あけぼの集』——「姿の見えぬ」）

冬がすぎて、あの菊の花のやうに美しい桜が——菊桜といふのは桜の一種でせうが——咲いて、「冬すぎて菊桜咲く春になれど」、春になつて——やうやく日本は平和条約が発効して、独立の日を迎へたけれども、「母の姿をえ見ぬかなしき」母にこの独立の日をなんとか見せてあげたかつた、その母の姿を見ることができない、といふ 母宮殿下に対する非常に深いお心のこもつた御歌と思ひます。

次は、「弟秩父宮の四十日祭に鵠沼を訪ひて」。秩父宮様は天皇陛下のすぐの弟宮で陛下とあまり年が違ひません。従って戦争中また前後に陛下とともに非常に御苦勞をなさったと承ってをりますが、その四十日祭（昭和二十八年）に

鉢の梅その香もきよくにほへどもわが弟のすがたは見えず

そして、十四年後の昭和四十二年に、秩父市の秩父宮記念館にいらっしやって、

おとうとをしのぶゆかりのやかたにて秋ふかき日に柔道を見る

「やかた」といふのは記念館のことです。秩父宮様は、スポーツが非常にお好きで、いろいろなスポーツを奨励なさった方ですから、それで「秋ふかき日に柔道を見る」。亡くなられた弟宮を思はれる非常に深いお心が込められてゐます。

次に、「佐賀の宿にて」の御歌。

朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎとびすぎにけり

「かささぎ」といふのは、佐賀に沢山ゐるのですが、朝晴れの楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎが飛び過ぎて行った。私はこの「朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささ

ぎとびすぎにけり」といふ御歌を拝誦しますと、二羽のかささぎといふのは、天皇陛下と皇后様とが何か一緒に歩いてをられるやうな、さういふやうな感じが裏にある御歌のやうな感じがするのです。

朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎとびすぎにけり

天皇様が皇后様を思ひになるお気持が直接あらはれた御歌は、これは今まで御製をずっと拝見しましたけれども、出てみません。御発表にならないのではないかと思ひます。しかし、そのやうなお気持ちがこの「二羽のかささぎとびすぎにけり」といふ御歌の中にあるやうに思はれるのです。すばらしいお歌だと思ひます。

皇后様の方には、天皇様をお思ひになつていらつしやる御歌が沢山あります。例へば、天皇様に次のやうな御歌があります。

夕餉^けをへ辞書を引きつつ子らとともにしらべものすればたのしくもあるか

夕食を終へて、辞書を引きながら天皇様がお子様方とご一緒に、いろいろと、これは何だといふやうな調べものをする、それは楽しいものであるといふ御歌です。ところがそれと同じ年(昭和五十一年)に皇后陛下は次の一首を発表されてゐるのです。皇后陛下の御歌は、

めずらしき草をたをりてみつくるにかざれば辞書にてをしへたまへり

珍しい草を手折ってきて、さうして天皇陛下のお机に飾ると、天皇様はその草の名を辞書を引いて、教へてくださった。

夕餉^げをへ辞書をひきつつ子らとともにしらべものすればたのしくもあるか
めずらしき草をたをりてみつくるにかざれば辞書にてをしへたまへり

といふ二首の御歌を拝見しますと、天皇、皇后を中心にして、天皇の御家庭の非常な深い愛情がこの二首の歌に表はれてゐることがわかります。

日本人にとっては家庭の団欒^{だんらん}は、心から求める理想の世界であるし、本当に心を満足させる世界なのです。さういふ家庭的な団欒の精神、いはば「上和らぎ下睦びて事を論ずるに諧^{かな}ふ」といふ、聖徳太子のおっしゃる精神が、いま我々の行つてゐるこの合宿全体に実現されれば、それは本当に楽しいことですし、それからまた、国民全体の生活の中にお互ひに思ふことを述べて、そして心を通はせ合ふ世界が実現されるのが、国の理想そのものではないでせうか。現実にはなかなか出来ないけれども、しかし、さういふことに対して我々は一歩一歩努力してゆくべきであらうと思ひます。

資料の後の方には、お子様をお思ひになる御歌、それから祖父に当られる明治天皇様をお思ひになる御歌を掲げました。それから、いちばん最後の

とほつおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

といふ御歌は、「とほつおや」といふ、遠い祖先をお思ひになる御歌です。御家庭の御家族から初めて、祖父の明治天皇様、さらに遠く祖先の殊に、神武天皇はじめ建国時代の天皇様に対する非常に深いお心のこもった御歌を拝誦することができます。

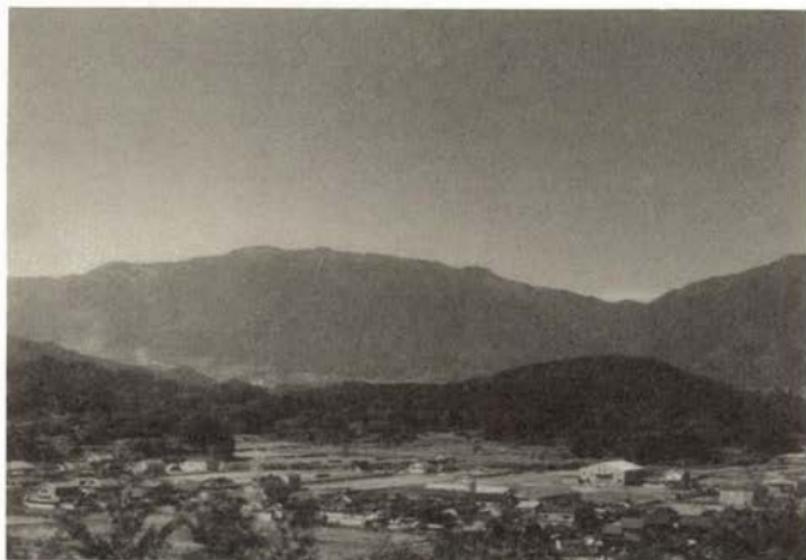
かういふ数々の御歌は、我々が身近かからさういふ御歌の御心に習はうとすれば習ふことが出来るはずですし、さう思つて努力することが出来る御歌です。我々にも出来る歌と云つてもよいでせうか。(実際はむづかしいのですが。)今日は、終戦前後の非常に悲痛な御歌についてお話しする代りに、どちらかといふと、日常の生活の中で、しかも非凡な御歌を拝誦させていただいて、皆さんの参考にしていただかうと思つてお話しした次第です。われわれも陛下にならつて「しきしまの道」の修業に努めねばなりません。

■ 短歌入門

短歌創作の手引き

山口県立高森高等学校教諭

宝 辺 矢 太 郎



大田皇女御陵より金剛・葛城連山を望む

歌を作る決心

感動は必ず歌になる

「ことわり」からの脱却

経験の意味

作歌上の留意点

連作短歌のすすめ

歌を作る決心

この合宿教室では短歌を作ることになってゐます。皆様全員が参加して戴く、合宿恒例の伝統的行事です。初めての方は不安でせうが、この合宿で心を練る修練を積んでゐれば必ず出来るのです。ですから今日は一つ短歌といふものを創つてやらうと決心して欲しいのです。私の御話の要点はそれに尽きます。

皆様は大変な御努力をなさつてこの二日間を乗り越えてこられました。それは今迄余り経験なされたことのないひとときではなかつたでせうか。そこでは普段友達とお喋りをする言葉は絶え果て、長い沈黙もあつたでせうし、お喋りはもういい、君の言葉が聴きたいといふ息詰まる瞬間があつたかも知れません。結局そこで問はれてゐるのは、自分はかう思ふといふ実感のこもつた言葉が自分にはあるのかといふことではなかつたでせうか。

文章を読んでも友達の発言を聴いてもなかなか自分の言葉が出てこない。そこを努力して自分の感じたことを口に出してみる。それは拙い意見かもしれませんが、飾らずに述べた自分の心は必ずや班の人達の心を揺るぶるものです。そして自分も十分ではないが何か言ひ晴らしたいといふ悦びもあるわけです。思へば言葉の重みといふものが肚にこたへた輪読や討論

の時間ではなかったでせうか。そしてかういふ努力は実はこれから始まる歌を作るといふ努力と無縁ではないのです。さういふことを考へてゆくと、もう皆様の心には歌の出来る用意がすでにとのへられてゐるといっても良いのです。

ところで私は今高校の数学の教員をしてをりまして、クラスの者に時折短歌を作らせるのですが、かういふ創作の手引の話を殊更しなくても全員作ってくれるのです。勿論渋る者もをりますが、ともかく千三百年もの前の万葉の人たちが作ってきた形式のままに今の人も同じリズムで短歌が作れるのです。考へてみると実に驚くべきことです。

そして天皇をはじめとして名も無い大勢の日本人は今迄無数の短歌をよんできた、それは殆ど気の遠くなるやうな数でせう。この夜久先生と山田先生の御共著になる『短歌のすすめ』にはその真実をうたひつづけて来た日本人の道統が刻まれてゐるのです。一人の人間の真実の思ひの尊さ切実さは何百年何千年経たうと読む者の心に焼きつけられます。かうして無数の人々が短歌に自分の本心を託してきたのです。現在この短歌を懐古趣味で一般の人々には縁遠いもののやうに考へる人もゐますが、けっしてさうではなく日本人が古来から踏んできた大事な道だったので。だから短歌を作ることをご昔から「敷島の道」を踏むとも言はれてきました。歌を作ることは日本人としての生き方の基本と考へられてきたのです。

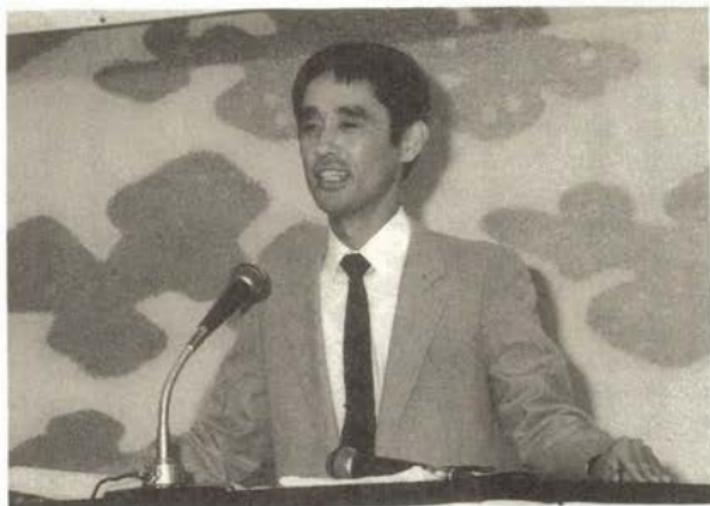
感動は必ず歌になる

さて前置きが長くなりました。ここで歌を作る上で基本的な態度を申し上げませう。第一に「自分の感じたことを、正直に、正確に、五七五七七の定型詩に盛り込む」といふことです。短歌は叙情詩です。先づ自分の感じたことでなければならぬ、あたり前のことですが、作者の感動が前提になります。

例へば次のやうな歌があります。

屁をしても笑ふ人なし屁をしても怒る人なし部屋の
孤独に

これはある新聞の歌壇に入選した歌ですが、この歌をよんで孤独のさびしさに浸ってゐる人の姿が本当に浮かんできますか。屁にしても笑ひを誘ふ言葉だし、



孤独といふ言葉にしても一寸洒落れてみるといった具合で、一見その気分も想像できないこともないので、要するに感情を弄んでゐるにすぎないのです。作者の感動は薄いのです。感動が薄ければ、言葉はどうしても上つ滑りになり抽象的になつて歌にはなりません。しかし真面目に真剣によめば感動は必ず歌になるものです。

次の歌はどうでせうか。生徒の歌です。

雨ふりて雷鳴りし稲妻の空を走りて空を切りさく

初めて作つたにしては下二句の緊張した表現にはとさせられますが、よく読んでみるとどうも変なんですね。自分の感じた刹那の感動を何とか表現しようとして一所懸命に作つたとは思ふのですが、やはり正確ではないのです。それは「雷鳴りし稲妻の」といふ所でせう。雷とは空中の放電によつて起る音、響きですから雷の音は稲妻が走つた後で聞こえる筈です。しかしこの歌では稲妻が光る前にすでに雷の音が鳴つてゐるのです。

或いはかういふ光景は私達もよく経験しますが、ここかしこで稲妻が走り、雷の音も遠く近く聞こえる。だから雷が鳴つた、あつ稲妻も走つた、といふ錯綜緊迫した自然の推移の中に作者は身を置いてゐたのかもしれない。しかしこの歌はどうもさういふ情景でもないらしい。要するに不正確なのです。正しく感じて正しく表現するといふ短歌創作の大眼目から

してやはりこれではいけないのです。

同じ情景ではありませんが、九州大学の志賀建一郎さんといふ方が次の歌をよまれました。
稲妻の閃めくやいなや地響をたつるが如き雷音とどろく

「地響をたつるが如き」といふのは、実際に地響きはたつてゐると思はれますので、一考の余地はありさうですが、随分良くなつてゐるのがお判りでせう。即ち表現が正確になつてゐるため情景が彷彿としてくるのです。

「ことわり」からの脱却

さて、正岡子規といふ人は皆様多少御存知かと思ひますが、明治時代、脊椎カリエスといふ病魔に冒され乍ら、その激痛に耐へつつ、殆ど病床の中で短歌俳句の大改革をやり遂げた人です。子規といふ人は心から人の素朴さ実直さを愛してやまなかつた人で、その歌論の代表的なものに「歌よみに与ふる書」といふのがありますが、その中で繰広げられてゐる当時の歌壇への痛烈な批判と、本物の歌に対しての心からの激賞を読むと、心洗はれ勇気が湧いてくるのが不思議です。

子規は短歌のもつてゐる本当の価値を甦らせた日本文化の大恩人ですが、その子規が歌論の中で「理屈は歌にならない」「感情が歌の本である」といふことを繰り返して指摘し、理屈といふものを執拗に排除しようとしています。何故でせうか。それは私達はともすれば具体性に付き合はうとせず、抽象的な觀念に陥り易いからなのです。自分の感動は揺れ動いて不安定ですが、その不安定なままが、一つの形になる迄辛抱しきれずに待てないときに理屈の影が忍び寄るのです。例へばこの言葉は気に入ったから、この言葉は動かしたくないと考えたと、つまり部分に囚はれると、本当は豊かに感じてゐる筈なのに、その感情を台無しにしてふことがあります。即ちその言葉が理屈っぽく響いてくるのですね。本当に難しいものです。ここで子規の言ふ、理屈を排した態度に徹してゐながら、沁み透るやうな感慨が滲み出てゐる歌を『短歌のすすめ』から二つ御紹介させて戴きたいと思ひます。一九三頁に次の歌があります。

石いはばしる垂水たるみの上のさ蕨わらびの萌えいづる春になりにけるかも

万葉集の代表的な歌で、精しい解説は以下是非お読み戴きたいのですが、千三百年前に作られたとは思はれない、本当にみづ／＼しい、真直ぐによみ下された春のよろこびの歌です。この滑らかな感じがたまたまなく、直ぐ覚えたくなくて口ずさみたくなりはしませんか。ここ

には理屈や技巧やことわりのかけらも無く、そして何か分ったといふやうな歌ではありません。美しいとか嬉しいとかの言葉はありませんが、写生に徹する凄さと言ったらいのでせうか、作者の悦びが真直ぐに伝はって参ります。もう一首、二一七頁です。

野伏する鎧よろひの袖も楯の端もみなしろたへのけさの初雪

これは戦国時代の武将上杉謙信の歌です。戦場の一こまでせうか。戦で野伏する、野原で寝てゐるわけです。どういふ風にして寒さを凌いでゐたのでせうか、さういふ辛い戦の或る日、野営をしてゐて朝目を覚ましてみると初雪が降つたのであらう、鎧の袖も楯の端にも真白な初雪が積つてゐるといふ、夜が明けたときの非常に鮮烈な感慨をよんでをります。

一生を戦にあけくれた武将がこのやうな秀れた詩人であつたとは驚くべきことです。ひそかに「心の艶」を磨いてゐたのですね。この歌にも因果関係とかことわりとかのかけらもありません。写生に徹してゐながら真直ぐに読む者に伝はって参ります。

歌を作るとは、この「ことわり」を少しでもなくさう、そして素直に豊かに感じたいといふ必死の心のたたかひとも言へます。

さて、次の歌は幕末の人で加納諸平しよへいらといふ人の手になるものです。私は最初この歌をよんで大層な雄壮感に打たれたのですが、子規はこの歌を木っ葉微塵に粉碎してゐるのです。

雲かかるわたのみなかにあら汐を雨とふらせて鯨浮べり

先づ「雨とふらせて」といふ「せしむる」的な表現がこの歌一番の瑕瑾であると言つてゐます。「鯨の噴いた汐が雨となつた」と何故素直に歌はないのか。こんな小細工をするから歌が台無しになるのだと実に重大な指摘をしてゐます。真直ぐに読み下すことをしないで論理的な操作を弄んでゐるのですね。又第一句の「雲かかる」の五字が極めて拙く、「雨とふらせて」と照応するために、この蛇足の語を後でつけ加へた痕跡歴然でありみつとも無いと喝破してゐるのです。また「海の真中に雲がかかる」といふ言ひ方もかしく、漫々たる海上にある雲を「かかる」とは言はない。「雲かかる」と言へば一片の雲と見える処ではないか。諸君試みにこの歌の光景を想像せられよ。海は漫々として広く、空は一面に晴れわたりたる処に海の真中に鯨が汐をふけばその鯨の真上ばかりに一塊の雲がかつてゐる。これが天然の光景と言へるか。自分には人間が拵へた雲としか見えない——。

いい加減な言葉遣ひに対する恐しいまでの迫り方です。このやうに自分ながらまあまああの出来ではないかと思はれる処にも必ず問題があるものです。明日皆様方が作られた歌をお互ひに批評し合ふひとときがありますが、班の人がその人の心を推し量らうと言葉を辿つてゆくと、自分には全く気付かなかつた自分の不完全な姿が言葉を通してあらはになつてくると

思ひます。それは一面辛いことだけでも本当に心和む心楽しいひとときでもありません。
ところで、この歌をある人が改めました。

青海原沖さけ見ればあらしほを空にいぶきて鯨浮べり

「雨とふらせて」「雲かかる」の二句を除いたのは大賛成で実に良くなかったが結末が今一步であるとして子は評してゐます。本当の歌の完成といふのはないのかもしれない。でも歌の姿が良くなってゆけば、その人の心の姿も良くなってゆくといふことははっきり言へると思ふのです。

次の歌は生徒の作です。

冬の朝しらすぎ舞いくる川底の冷たくないかと我思いけり

もうお判りでせう。いい歌だと思ふのですが作者は自分の感動に最後迄付き合つてゐない、それが下二句によく出てゐます。言葉を捜すのが面倒臭くなったのです。冬の朝凍えさうな寒さの中、しらすぎが飛んできて冷たい川に身じろきもせず立つてゐる。だがそれを冷たくはないだらうかと心配するのは嘘ではないでせうが、第二義的な心の動きなのです。感動が分散してゐて、訴へて来る力が弱いのです。

ところがもう一人の生徒は同じやうな情景を次のやうに詠んでゐます。

夜市川に逆波立つる木枯に凍てて白さぎ身じろきもせず

これが初めて作った人の歌かと思ふと嬉しいといふより本当に感動して了ひます。

経 験 の 意 味

私達の持つてゐる語彙なんて高が知れてゐますが、持つてゐる語彙で十分なのです。自分の氣持にぴったりした言葉を探すのはなかなかどかしい作業ですが、自分なりに何とか歌ひ晴らしたといふ処まで放棄せず、自分の持つてゐる語彙を総動員して迫って戴きたいのです。曲りなりにも出来たときは何とも嬉しいものです。

いい歌が出来るのは作歌経験の深い浅いとは余り関係無いやうに思ひます。初めての人も切実な感動と、それを何とか表現したいといふ氣持さへあれば、必ずいい歌が出来るものです。生徒の歌をもう少し紹介しませう。

山裾に雷鳥見たしと思えどもかなわぬこの日雨の立山

水族館頭をこするかわいさはらっこに勝るやすなめりくじら
朝起きてみんなの寝顔ふとみると童のように吐息を立てて

二首目は少し判りにくい歌ですが、「すなめりくじら」といふ全長一m位のくじらがガラス越しに頭をすり寄せてくる仕種が何とも可愛らしいといふ様子を詠んだもので、噂のらっこ以上に印象に残ったのでせう。これらは修学旅行から帰って作らせたのですが、百枚の写真より、手一杯の御土産より、一首の歌の方が永久の記念になると言ったら言ひ過ぎでせうか。自分の経験をもう一度振り返って自分の眼で眺めてみる。そしてそれを苦勞して言葉に託してみる。ささやかな経験をおろそかにせず、その経験を本當の経験として心に定着させる働きを歌は持つてゐるのです。私達はいろいろな経験をしますが、その経験はもう一度よく味はつてみて初めて本當の経験になると言つてもいいのです。

感動すればどうかして形に残しておきたいと思ふのは人間の欲求かと思ひます。しかし、感動を例へば絵にするとか音楽にするとかいふのは特殊の才能が要りませうが、日本語を知つてゐれば誰にでも出来る第一級の芸術が身近にあるのです。それが歌です。次の歌も生徒の作品です。

冬枯れの古木のうろにびっしりとてんとう虫の越冬の群れ

冬越せず遠くへ逝きし愛犬の我見し瞳永遠とほに忘れじ

通知表どきどきしながらひらけば一つの赤がいように目立つ

夜はふけておつるぼたゆきしんと町はいつしか衣をまとふ

友だちの指先見れば初夏の夜に美しく光る螢一匹

一首目、うろとは穴のこと、てんとう虫の群を発見した驚きがよく出てみます。二首目、その頃同じ経験をした私にとっては一ときは胸に沁む歌でした。三首目をクラスで披露したとき、思はず爆笑の渦が巻き起こりましたが、無論憫笑ではありません。四首目、五首目はそれぞれ季節の風物詩を題材に取ってありますが、「衣をまとふ」や「指先みれば」の表現には、幼いながら何か読む者の心に残るものがあります。

いろいろ直す処はありませうが、ここに挙げた歌はいい部類に入ります。生徒達の歌は実に面白い。上手下手をこえて面白い。生徒達の多感さにしばしば驚かされます。そして何よりかういふいい歌に出遇ふと生徒がいっぺんに好きになります。生徒を見る眼が今迄と違ってきます。実に新鮮な気持になります。自分の欠点を欠点として素直に告白出来る人に私はこよなく惹かれるのです。

作歌上の留意点

ここで短歌をよむ上での留意点を三点申し上げます。先づ一首一文といふことがあります。感動のポイントをしっかりと押へて、頭からすつと読むといふこと、即ち一首の歌が一つの文章で出来てゐるといふことです。例へばぼつんと断片的な言葉が出て後が続かないといふことによく勝ちですが、さういふときはその言葉に囚はれずもう一度ひと続きの文章をよむやうな気持で言葉にしてみても、それから言葉を整へていくといふ風にしてみると良いかと思ひます。

次に五七五七七といふ定型は守つて戴きたいが、多少の字余りは読んでみて不自然さが感じられなければ、それ程気になさることはありません。不自然さが無いといふことは歌全体が部分的な語調の乱れを統一してゐるからです。反対に字足らずは往々にして舌足らずで不自然に響くものです。かういふときはもう一度初めから感動のポイントは何なのかを自問しながら作り直してみた方が良いでしょう。

最後に言葉遣ひは本来文語でよむべきでせう。文語には口語に無い深い味はひがあります。又仮名遣ひも文語的な表現でなければならず、正しい歴史的仮名遣ひにも習熟して欲しいも

のです。ただ初めての方は今日は余り無理をなさらずに日頃使ひ慣れた言葉で構ひませんか、自分の心に沿ふ言葉で存分に表現してみして下さい。

連作短歌のすすめ

一首よめるかどうか心配なのに、何首も作ってみよとは冗談ぢやないと思はれるかもしれませんが、一つの感動を三首ぐらゐによんでみようと思ふ方がかへって作り易くい歌が出来るものなのです。三十一文字に自分の思ひを総て盛り込まうと悶々と苦吟を重ねて無理をするよりも、何首かによりこんでゆく方が心伸びやかにおほらかに歌ひ晴らすことが出来るものなのです。そして一首一首感動の中心をはっきりさせるべく推敲してゆくのです。さうすると全体として一つの感動に貫かれるといふ姿になってゆくのです。これを意識的方法的に確立したのも子規の功績であると言はれてをります。

連作の例を挙げませう。

嵐

ただならぬ風吹きすさびとざしたる雨戸はためき波打つごとし

雨戸はげしく鳴るがまにまに家なべてゆらくごとしもすさぶ嵐に

時折りは霰にかあらむ一しきり降る音はげし屋根もどろに

窓の外の立ち木庭草闇の中をもだゆるさまの目に見ゆるがに

宵の間に静かなりしにたちまちに荒れゆく嵐たゞならぬかな

うつしよのまがごとごとく拂はむと神の力に吹ける嵐か

まがごとのここだおこりてとりすべむたどきも知らに国乱れゆく

みだれゆく国の行末思ひをれば神のみ声とすさぶ嵐よ

二首目の「まにまに」はままにといふ意、「家なべて」は家全体といふ意です。三首目、「どろに」は、とどろくばかりに、四首目、「見ゆるがに」は見えるやうだ、六首目の「うつしよ」とは現世のことで、「まが」とはよこしまなこと、といふ意です。七首目を解釈すると、よこしまなことがたくさん起って、それらを統一する、たばねる方法もわからないままに国が乱れてゆく、といふ意味合ひであらうと思ひます。

この歌をよまれたのは昨日輪読導入講義をなされました小柳陽太郎先生です。これらの歌をよむと、歌にも果てしない深さがあることを思はしめられます。単なる叙景詩では無論ない。作者の深いお心が、吹きすさぶ嵐に心を潜め乍ら、波打つやうな言葉のしらべになって

をります。叙景を歌ひながら正しく作者の心のしらべになつてゐる見事な叙情詩です。その深いお心はただくよんで味はふ他ないもので、よめばよむ程無限の心の深さと広がりを感じられ、言葉のもつ素朴な力に今更ながら驚かされます。

一首目の「ただならぬ」から五首目の「ただならぬ」に至る情景のうねりはそのまま言葉のリズムとなり、文字通り「ただならぬ」さまが彷彿として参ります。雨戸がはためき家が揺れ、屋根を打つ激しい霞もある。眼に見えぬ外の庭の荒れ狂ふ様も作者の激しいリズムのままに読む者もその場に居合はせた如くに感じられます。

外の嵐は文字通り作者の心の嵐であつて、乱れゆく国の行末を思はれる心は嵐の真只中に投げ出され、嵐に身を晒されてゐます。そして吹き荒れる嵐に身も心も委ねてちつと聴き入る処に、何かその前ではひれ伏すとしか言ひ様のない激しい啓示を受けられるのです。それを神の力、神のみ声と表現せられてゐるのでせうか。もうこれは主観も客観も通り越えた痛切な深い作者の思ひであつて、読む者にも沁み沁みと伝はつて参ります。

二首目の第一句、三首目の第二句など字余りがあちこちに見られますが少しも不自然さが感じられないのは、作者の思ひの痛切さがその破格を支へてゐるからです。

もう一つ連作の例を挙げます。

長女道子結婚式に出発の朝

高島田ゆひて内掛装ひて吾子はすわりぬ別れの膳に

身内皆今とつぎゆく吾子かこみ御酒くみかはすゆく末祝し

二十あまり四とせの月日悲しみつ泣きつ笑ひつ共にくらしし

かなし子はわぎ家出てゆく永い間御世話になりしと両手つかへて

ちちのみのちちは泣きにきこし方の思ひ一時に胸をふたぎて

あまたひとつどひてあれば心強く持ちて居らむと誓ひ居りしに

今日よりは内田と名のり背の君に仕へまつれや白髪生ゆるまで

この歌をよまれた青砥宏一といふ方は国民文化研究会の道統につらなる方で、日本人の心を鍛へる道は和歌をよむことであるといふ信念を持たれ、それを身を以て実践された方です。私達は先生の人生姿勢を仰ぎ、幾度も導きを受けて参りました。

そして青砥先生は十五年間に亘り「青砥通信」といふガリ版刷りの歌の通信を私共に送って下さいました。この「青砥通信」は全国の同信の人たちが先生の手許に折々の感慨を歌にして寄せられ、先生も又必ず歌で返されるといふ、その生き生きとした魂の交流がしるされたものです。この青砥先生は今年の一二月病気のため亡くなりました。

二つの連作短歌に何もつけ加へることはございませぬ。おこころのままが読む者のところに惻々と迫つて参ります。五首目の「ちちは泣きにき」といふ一句に作者の思ひのすべてが集約されてゐるやうです。「泣きにき」の「き」といふ助動詞に殊のほか胸が締めつけられます。連作全体がこの一語に無限の余韻を与へてゐるやうです。「ちちのみの」は「ちち」に掛る枕詞ですが、この歌は二句切れになつてをります。しかし倒置法を用ひてあるため一首が二文に切れることなく、りっぱな一首一文でありますし、かへつてこの二句切れが切実さを支へてゐると言つてもいいのです。永い間慈しんで育ててきた吾が子が今家を出てゆかうとしてゐる。その永い時間が「一時に」といふ言葉に凝縮されて、まことに緊迫した、文字通り絶唱と言へる歌かと思ひます。

娘を嫁に出すよろこびもかなしみも世の親といふ親はこの歌を読んで、まるで自分の気持ちを全部歌ひはらして貰つたかの如く感ずるのではないでせうか。そこに渦巻いてゐる思ひ、整理出来ないままである不安定な心に一つの動かぬ姿が与へられたのです。ここに一つの安堵があります。この歌を読めばかういふ経験が無い私達も作者と深く共感することが出来るのです。それは思へば何といふ有難いことでありませうか。素直な飾らぬ言葉のしらべといふものが、かくも力を發揮するといふことに私達はもつと驚いていいと思ひます。

最後にやはり青砥先生の次の御歌を御紹介させて戴き、拙い御話を終らせて戴きます。

我等はも言の葉もちて全宇宙うたひはらさむ生けるしるしに

生きてゐるあかしをとどめたい。それを言葉でやってみよう。何も身構へる必要は無い。素直な言葉が全宇宙をうたひはらすことだつてあるのです。私達の無数の先人達は、この歌のやうに心をこめて日本語を磨き、それを短歌といふ形に結晶させていったのではないでせうか。太古の昔から無数の人たちがよんで来た歌はよんでは消え、この世にはもう残つてゐないかもしれないが、その一首一首はそれを積み重ねながらこの日本列島を埋め尽くし、日本語の正統を伝えて来たといふ感じが致します。

今からの数時間、一所懸命、真剣に、自分の持つてゐる言葉を全部使つて挑戦してみて下さい。

創作短歌全体批評

熊本市役所技師

折
田
豊
生



齊明天皇御陵より葛城山を望む

はじめに

添削と批評

はじめに

これから皆さんが昨日お作りになつた短歌について、幾つかの作品を取り上げながら批評させて戴きます。この全体批評の後皆さんは班毎にそれぞれがお作りになつた短歌について相互に批評をし合ふことになつてゐるのですが、その際に注意して戴きたいことや批評のポイントなどについてお話しして参りますので、参考にする心算でお聴き戴きたいと思ひます。さて、批評と申しますと、これは良い歌これは悪い歌といふやうに、勢ひ作品の優劣を論あげつらひがちになるのですが、この後の相互批評においては、そのやうなやり方は努めて慎んで戴きたいといふことを、先づ、申し上げておきたいと思ひます。皆さんは、昨日レクリエーションの後の僅かな時間に、各々精一杯の努力をして短歌を作つて下さつた訳ですが、その折に、自分の思ひを言葉にすることがいかに難しいことであるかといふことを改めて認識して下さいであらうと思ひますし、同時にまた、何処迄行つてもきりのないやうな言葉の世界の奥深さといふものも充分にお感じになられたことだらうと思ひます。人の営みが永遠に完璧を期し難いのも同じやうに、その言葉による表現もまた常に不完全性を孕んでゐるといふことは寧ろ当然のことと言つて良いのかもしれませんが、私達が陥つて了つてゐる主観的な

ものの見方を少しづつ払ひ落してできるだけ客観的な表現を試みようとすることは、心の練磨において、またそのための言葉の修練においても、極めて大切な意味を持った営みであらうと思ひます。ですから、相互批判においてはそこに主眼を置いて、班の友達同士精一杯の知恵を出し合ひ、それぞれの短歌の独り善がりの表現をその動機から探り起こして正し合つて行くことに努力して戴きたいものだと思ひます。そしてそのためには、先づ以て各々の短歌を丁寧に見、作者の心を深切に推し量るといふことが必ず要求されてくる筈ですから、それを一つの大きな前提として批評をスタートさせるやうにして欲しいと思ふのです。

合宿のこれ迄の日程の中で思ふやうに口に出すことができなかつたことも多分に様々な形で短歌に表はされてゐると思ひますが、お互ひに心の奥底を推し量ることによつて、或いは初めて友達の真心に触れることができるかもしれないし、これ迄以上に心のつながりが深められて行く機会が得られることになるかもしれない。言つてみればそこにこそ相互批評の眼目がある訳で、学問の深まりといふものが人と人との心のつながりといかに深い関りを持つてゐるかといふことも、充分に認識しうるであらうと思ひます。ですから、今申し上げたルールを良く守つて批評をし合ひ、くれぐれも、はたから冷淡な評価を下すやうな批評は慎むやうに注意して戴きたいと思ひます。

批評のポイントについては、昨日宝辺矢太郎先生が短歌創作導入講義の中でご指導下さつ

たことを思ひ返して下されば良いのですけれども、先生は、第一に自分の感じたことを正直に正確に詠む（感情に流されてはいけない）、第二に真面目に真剣に詠む（途中で投げ出さず、最後まで自分の気持ちに付き合つて詠む。安易に読んではいけない）、第三に理屈を詠んではいけない、第四に一首の短歌が一文で成り立つてゐて一息で読めるやうに詠まれてゐなければならぬ（一首一文）、そのほか、字余り、字足らず（短歌の語句が五七五七七の音数律から外れること）などに注意して下さいとおつしやいました。これらは短歌を作る場合の極めて基本的なルールなのですが、私の批評も、当然のことながら、皆さんがこれらのルールをきちんと守つて下さつてゐるかどうかといふことを主として検討しながら進めさせて戴きたいと思ひます。



批評と添削

窓ごしに清澄の空雲仙見ればわが心もなごみけり

この短歌は、三句目が字余りになつてゐる代はりに四句と結句が字足らずになつてゐます。多少の字余りは却つて心の充足感が感じられて良い効果を生む場合があるのですが、字足らずは舌足らずで納まりが悪く、必ず短歌のリズムを損つて了ひます。言葉のリズムは心のリズムの表はれと言つても良いのですが、字足らずによつて音数律が乱れると躍動感や充足感と言つたやうな、言はば短歌の生命感が著しく失はれて了ふことになります。或る物事に対する心の動きが或程度判然と意識され深められてくれれば、短歌は、心の躍動がそのまま表はれてくるやうに、単なる説明的な口調を脱して自づと五七五七七の音数律に従つて整へられてくる筈ですから、字足らずの場合には、今一度自分が詠みたいと思ふ心の中心をしつかりと見つめ直すといふところ迄立ち返つて戴きたいと思ひます。

また、この短歌のもう一つの問題点は二句目で文章が切れて了つて一首一文になつてゐないといふことです。「わが心もなごみけり」といふのが詠みたいことの中心であつて、「澄

み切つた空にそびえる雲仙岳を見て心がなごんだ」といふのが主たる内容ですから、

澄みわたる空にそびゆる雲仙の山を仰げば心なごみぬ

と直してみました。もとの歌の「窓ごしに」といふ言葉は注意を表現するのにはそれほど必要な言葉ではないので省略したのですが、自分の詠みたいことの中心が深く意識されてゐないと、必要な言葉と不要な言葉の選択がどうしても曖昧になつて了ふやうに思ひます。

○

日の本の心を守り伝へむと古事記つくりし御心深し

江藤淳先生の御講義の中の古事記の編纂にまつはるお話についてその感想を詠んだものですが、天武天皇は、当時、史実が曖昧になつて行くことを深く憂へられて古事記の編纂を思ひ立たれたと伝へられてゐるのですから、そのことを「日の本の心を守り伝へむと」とするのは、かなり一方的な解釈に基づく概括になりはしないかと思はれます。「日の本の心」といふ表現はこれを読む者の受け取り方次第で幅広い解釈が可能となりますから、この短歌のみ

を通じて作者の心情を正確に追体験するのは極めて困難なことになつて了ひます。

江藤先生は、古典に接するに当つて大切なことはその内容を把握することではなく具体的な言葉に触れてそれを真にじつくりと味はふことだ——日本には歴史の断絶がなく、私達にとつては、時代の流れを越えて古い昔の古典に触れ得る道が充分に保たれてきてゐる、それはとても有難いことだ——とおつしやつたのですが、概括的に物事を捉へるといふことは先生の御講義の内容にも反するのではないかと思ひます。

ともあれ、作者が御講義をお聴きしながら感じたことについてはそこに幾らか心の起伏があつた筈ですから、そのやうな場合は無理に一首に詠み込まうとしないで、何首かの連作形式にして詠めば或程度の濃やかさを保つことができるのではないでせうか。

具体性に乏しい作品なので直しやうがないのですが、次の国文研の北林さんが詠まれた連作などを参考にして、より具体的に詠むといふことの大切さについて検討して戴きたいものだと思ひます。

江藤淳先生の御講義を拝聴して後詠める

いにしへの人の心をそのままに残さむとて成るか古事記は

からごころすてて御文をつづらむとつとめられにし人のたふとさ

千余年の時隔つとも祖先みおやらのこころ偲おもばるこの御文読めば

○

仁田峠登りて見ゆる島原の深き歴史の滲む景かな

「仁田峠登りて」は「仁田峠に登れば」とすべきでせう。「深き歴史」、「歴史の滲む景といふのはかなり独善的な表現であつて内容がよく分かりません。多分バスのガイドさんの説明をお聞きになつて詠んだものでせうが、誰が読んでも分かるやうに言葉を正しく使つて正確に詠むべきです。短歌は作られたら直ぐに独り立ちしなければなりません、説明が必要なら短歌はそれだけ客観性が乏しく不正確であるといふことになります。絶対に安易な自分勝手な表現をしてはいけません。

仁田峠にて

島原の歴史を思ひ浮かべつつ麓の景色を眺めやるかな

と直してみましたかどうでせうか。「仁田峠にて」といふ言葉を短歌の前に付けましたが、

この説明のやうな前書きを「詞書」と言ひます。詞書の助けを借りるとその言葉が抜けた分だけ他の言葉が使へるので、短歌そのものの表現をより具体的にすることができるといふことになります。

友どちの心開けしその姿我が全身も振えてやまぬ

「開けし」は「開きし」、「振えて」は「震へて」、「やまぬ」は「やまず」とすべきでせう。「その姿」の後にはやはり「に」といふ助詞が必要です。「に」を抜かして了ふと不正確であるばかりでなく、短歌自体も腰が折れたやうな感じになつて了つて柔軟性がなくなり、本来に印象の強い経験をなされたことが良く感じられる作品で、もう少し言葉を練ると良い短歌になると思ひますが、ここでは不正確な部分だけを訂正してみました。

友どちの心開きしその姿に我が全身の震へてやまず

ただひたに前を見つめて降り下ればひばりの声を耳元に聞く

「耳元に聞く」といふ表現は不正確であり、ひばりの声が耳元で鳴いてゐるやうに聞こえるといふ状況もオーバーで不自然です。また、「ただひたに前を見つめて」といふのは下り坂が非常に険しい状況を表はさうとしてゐるのでせうけれども、何だかまどろっこしい。「降り下れば」も内容が重複してゐます。言葉数が多ければ具体的になるかと言ふと必ずしもさうではなく、かへつて冗長な表現になつて了ひます。常に簡素にしかかも正確に詠むやうに心懸けるべきなのです。そのやうな点に注意しながら、ひばりの声が大きく聞こえたといふ主題を損はないやうにして直してみますと、

妙見岳の険しき道を降りくればひばりの声の間近に聞こゆる

といふやうな表現になるのではないでせうか。

○

江藤淳先生のご講義を聞きて

古への文に親しむ幸せを師はのたまひぬ力込めつつ

「古へ」の「へ」は不要です。江藤先生は「私達が時代を隔てて古い昔の本を現代においても読むことができるのは、それは、とても幸せなことだ」といふ風におつしやつたのですから「親しむ」と表現しては不正確で、やはり「親しみうる」とか「読みうる」とかいふやうにしなければならぬでせう。また、「幸せを……のたまひぬ」はこのままでは対応のしかたがかしいので、「幸せと……のたまひぬ」或ひは「幸せを……説きたまふ」といふやうにすべきでせう。

古の文を読みうるは幸せと師はのたまひぬ力込めつつ

○

さまざまの思ひを抱き集ひたる友の言葉にちつと聞き入る

これは内容が逆転してゐて不正確です。友の言葉にちつと聴き入るといふ経験を通して初めてその友がさまざまの思ひを抱いて合宿に来てゐることが分かるのですから、

さまざまの思ひを胸に抱きつつ来しこと知らる友の言葉に

といふやうに、先入観を捨てて自己の経験に即して詠むやうにすべきだと思ひます。

○

ゴンドラの窓より外に顔を出しおそるおそるに下にみとれる

「おそるおそる」はそれだけで副詞として使はれるのですから、これに「に」を付けるとをかしくなつて了ひます。この「に」は単に音数を合はせるために入れて了つたのだらうと思ひますが、短歌の表現も国文法を外れる訳にはいかないのですから、いかなる場合でも文法に従つて正しく表現するやうにしなければなりません。

また、「みとれる」といふのは何かに心が奪はれて了つてゐる状態を示すのですから、「おそるおそる……みとれる」といふのは不自然です。このほか、窓から顔を出すのは外に出す

に決まつてゐるのですから、「外に」といふのはここでは unnecessary 言葉になります。

おそろおそろゴンドラの窓から顔を出し下方の景色に我はみとれたり

と直してみました。が全体的に自己の行為の説明をするといつたやうな色合ひが抜けません。景色に見とれたといふのが事実でそれがポイントであるとするなら、見とれた対象を中心にして詠んだ方が良い短歌になりやすいのではないかと思ひます。

○

反発を感じながらも友だちの一途な思ひに心動きつ

これは本当に良い内容を持つた短歌だと思ひました。物事を理論的に正しく理解することが大切なことは言ふ迄もないことですが、薄つぺらな理解に止まらず物事をしつかりと深く掘り取るためにはそこにどうしても心を強く動かされる経験が伴はなければならぬやうに思はれます。この短歌を読むと、そのやうなきっかけが友達同士の真摯な心の触れ合ひの中に潜んでゐるといふことを教へられるやうな思ひがします。

訂正すべき点を挙げますと、「感じながらも」と「一途な」は口語的表現ですからそれぞれ「感じつつも」、「一途なる」とすべきであり、また、「心動きつ」は正しくは「心動かさるる」あるいは「心動かされけり」とすべきでせう。

反発を感じつつも友の一途なる思ひに心動かされけり

○

これ迄幾分問題のあるやうな短歌についてお話しして参りましたが、今度は比較的良く詠まれてゐる短歌を紹介して参りたいと思ひます。

展望台のベンチりに座りて東ひんがしのふるさとの方に眼を
こらすなり



木もれ目のまぶしき小道語らへば心しずまり疲れ忘るる

「小道」の後には「に」が必要です。また、「しずまり」は「しづまり」となります。

木もれ日のまぶしき小道に語らへば心しづまり疲れ忘るる

頂上に立てばたちまち霧わきて木々もかくるる真白になりて

江藤淳先生の御講義終はりし後に

師の講義聞いてうれしと先輩は吾が手を取りて声つまらせぬ

「聞けて」は口語的表現ですから「聞きえて」と直されたら良いでせう。

師の講義聞きえてうれしと先輩は吾が手を取りて声つまらせぬ

さて、この合宿に何人かの高校生の皆さんがアルバイトで事務の手伝ひに来て下さつてゐるのですが、全員が短歌を作つて下さつたので一首だけ紹介しておきたいと思ひます。

霧かすむ山々の間の湖にきらり輝く陽のひかりかな

「霧」の後には「に」を入れるべきですが、ポイントをきちんと捉へてさりげなく詠まれた爽やかな短歌です。見たまま感じたままを率直に気負はずに詠むことの大切さを教へてくれるやうな作品だと思ひます。

歌稿の後の方には国民文化研究会の先生方の短歌が沢山戴せられてゐます。この合宿で皆さんとほぼ同じやうな経験をなさつてをられる訳ですが、どのやうなことに目を止められ、また、どのやうに詠んでをられるのかに注意しながら詠んで戴ければ、作歌上のさまざまな問題について気付かされることが多々あるであらうと思ひます。

時間もなくなつて参りましたが、相互批評を行ふに当つては、当初申し上げましたやうに、先づ短歌を丁寧に読み、作者の心情を十分に推し量り、その上で厳しく指摘をし合ふといふルールを忘れないやうにして、それぞれの魂が響き合ふやうな充実した相互批評の時間を送つて戴きたいと思ひます。

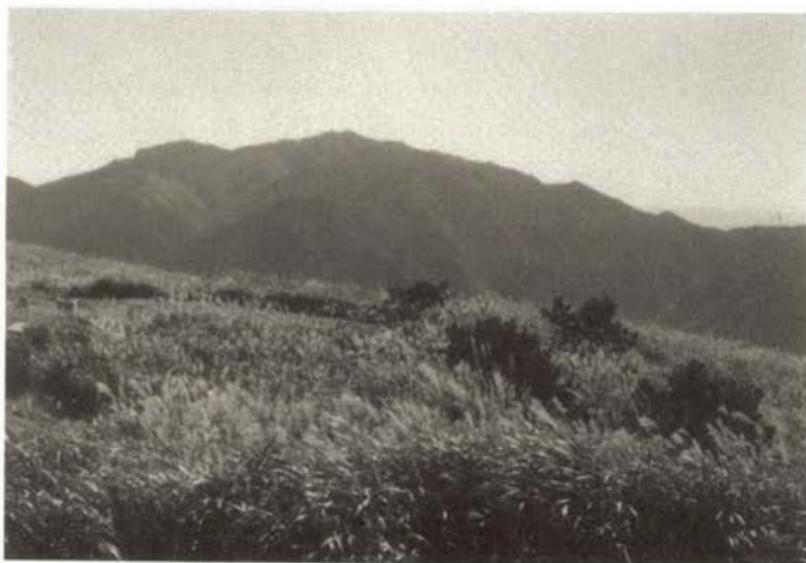


青年のことば

正岡子規に学ぶ

運輸省港湾局防災課

久
米
秀
俊



葛城山頂より金剛山方面を望む

私は昭和五十一年九州大学に入学致しましたが、高校時代からずっとラグビーをやってをりましたので、大学でも是非続けたいと考へ、ラグビー部に入部致しました。同輩や先輩達と試合に勝つことに目標をおいて厳しい練習を繰り返すことは苦しいことではありましたが、その充実感しかは確と感ぜられ、クラブでの活動を中心として大学生活が展開してゆくといふ感じでした。

結局、ラグビー部は四年間続けるのですが、運動や専門の勉強だけで自分の一回限りの大學生生活を終つて了ふことに対しては、反発を感じながら大學生生活を送つてみた様に思ひます。さういふ中で、ラグビー部の友達で、今回の合宿教室で導入講義を担当してくれた長澤君に誘はれてこの合宿教室に参加致しました。そして幕末や明治時代などに生きた人物の具体的な文章に接する中で、驚くべき生き方をした多くの先人達があることを初めて知つたのです。今日は、その中で、正岡子規から学んだことについてお話させていただきます。

私が正岡子規の文章を読み始めたきっかけは、小柳陽太郎先生の御宅で、子規のことについてお話を伺つたことに始まります。正岡子規は愛媛県松山市の出身ですが、私も同郷でしたので、子規が日本を代表する俳人であり歌人であるといふことは知つてをりました。しか

し、高校当時は、俳句や短歌といったものは老人の趣味ぐらゐにしか思ってをりませんでしたので、具体的な子規の作品や業績などについて殆ど知らなかつたのです。

小柳先生が子規についてお書きになつた文章をその時紹介していただいたのですが、その中に、「全身を嵐に打たせてゐる偉丈夫の力強い眉根を思はせる」といふ箇所がありました。先生は、荒々しく、堂々とした子規の生き方に着眼してをられるのですが、俳句や短歌を詠むといふ文学者のイメージから想像される姿とは程遠い言葉に驚きと興味をそそられ、それ以後、折りに触れて子規の文章を読む機縁ともなつたのです。

まづ、私の好きな一首の短歌を紹介させていただきます。これは、当時の専門歌詠み達が技巧的な巧みさ、題材の奇抜さを競つてゐることを痛烈に批判した「歌よみに与ふる書」の発表後、直ちに子規が当時の歌詠み達に叩きつける様な形で更に世に問うていった実作短歌の中の一首です。

世の人は四国猿とぞ笑ふなる四国の猿の子猿ぞわれは (明治三十一年)

この中で「猿」といふ言葉が使はれてゐますが、子規が「猿」に対してどの様な思ひを抱いてゐたか、この短歌だけからではよくわかりませんので、少し補足をさせていただきます。子規は、自分の志を継いでくれる者はやはり田舎者だとし、「其第二の田舎者といふ奴は今頃

何處かの山奥で高い木の上に乗って椎の實をゆすぶり落して居るかも知れない」（「ホトトギス第四卷第一號のはじめに」明治三十三年）と言ってみます。高い木の上に乗って椎の實をゆすぶり落してゐるのは正しく猿でせう。子規は、粗野ではあっても生命感に溢れた猿の姿を思ひ描いてゐるのです。

したがって、この歌は、世の歌詠み達は、自分のことを四国の猿と言つて馬鹿にして笑ふが、確かに自分は三十ばかりの若造で、学問も才能も足りず礼儀もわきまへない正しく子猿である。しかし、野や山や木々の上を駆け巡る活きのいい子猿なのだといふ意味だと思ふのです。この歌は子規の歌の中で必ずしもすぐれた歌とは言へないかもしれませんが、しかし、世の歌詠み達は猿を馬鹿にして笑ふが、その猿の荒々しく新鮮なところをどれだけ持つてゐるか、よく反省してみてはどうか、といふ当時の歌詠み達に対する挑戦状であ



る様に思へるのです。

この歌に感ぜられる様に、子規がやらうとしたことは、短歌や俳句を作り、評論を書くといった机上の作業に止まるものではありませんでした。明治維新後、日も浅い我が国の緊迫した動きに対しても敏感に心を働かせてゆくのです。

明治二十七年に日清戦争が勃発し、子規は従軍記者として従軍するのです。その時の決意を自分の後継者と頼む高浜虚子と河東碧梧桐に対して書き送った手紙の一節を次に紹介したいと思います。

「今や日清事有り 王師十萬深く異域ニ入ル 誠ニ是レ国家安危ノ分ル、所東洋漸ク将ニ多事ナラントス 僕亦意ヲ決シ一枝ノ筆ヲ挟ミ軍ニ従ハント欲ス（中略）僕才能学問無シ又財資地位無シ而シテ志ヲ立ツルコト徒ラニ遠大ナリ 乃チ草莽ニ伏シ肝膽ヲ嘗メ機ヲ伺ヒ勢ヲ待ツヤ久シ 苟モ機ノ以テ利スベキアレバ之ヲ利シ勢ノ以テ乗ズベキアレバ之ニ乗ゼント欲スル者ナリ」（明治二十八年）

この文章中の「徒ラニ」といふ言葉は、「むやみに、やみくもに」といふ意味です。したがって、ここでは「自分の志は分を超えて遠大である」といふ意味でせう。一度啖血した自分に、厳しく不自由な従軍生活がやってゆけるかどうか、大きな不安があったでせうし、何も危険を冒して従軍しなくても文学上の志を遂げる作業は出来た筈です。しかし、子規は、さ

ういふ理性的な判断に依るのではなく、日本の運命をかけた大国、清との戦争にあたって動いた心のままに従軍を決意したのだと思ひます。そして、この従軍は、自分の力を試し鍛へる絶好の機会であると思へたのではないでせうか。

一首の歌と日清戦争に従軍する決意を述べた文章とを取り上げましたが、私が子規の生き方から学びたいと思ふのは、自分の力を限るのでもなく、また、過信するのでもなく、直面する出来事に対して敏感に心を働かせてゆく生きた姿勢なのです。皆さんが居られる大学では、就職の準備としての専門の勉強と、趣味としてのスポーツや文化サークルでの活動に自分の生活の場を限りがちです。また、学校を卒業したあとの社会人生活では、職場での忙しい仕事と、マイホーム主義といふ言葉に代表される様な個人的な家庭生活とに自分の生活の領域を限って了ひがちなのです。これらは、子規が目指した「猿」の生き方とは全く逆の生き方です。しかし、さういふ自分の力を限る生き方からは、子規が脊椎カリエスといふ恐ろしい病気に打ち克った様な精神の活力は生まれてこないし、また、自分の国の動きに対しても敏感に心を働かせてゆく様な豊かで広やかな心を持つことはできないのだと思ひます。

最後に、大学時代から子規の友人であった夏目漱石に宛てた書簡の一節を紹介しておきます。

「ずるいこともずるいが忙しいこともいそがしいので御無沙汰致候

苦しいことも苦しいが忙しいことも忙しいので筆ははなさず候

胃が悪いことも悪いがいそがしいこともいそがしいので大食も致候」(明治三十年)

御無沙汰を謝する手紙の書き出しですが、同じ様な言ひ回しのままに病状が悪化したこと、手術しなければならなくなったことなど生活の近況報告へと拡がってゆくのです。身体に悪いがつい／＼大食もして了ふ、といふユーモラスな表現には、病床の苦しさや仕事の忙しさに負けないおほらかな生活ぶりが感ぜられ、勇気を与へられるやうなおもひがいたします。

子規がここで使つてゐる「忙しい」といふ言葉についてですが、とかく私も「忙しい」といふことを言ひがちです。私は、運輸省港湾局といふ役所に入りまして五年目になりましたが、現在は我が国の海岸部を津波や高潮による被害から守るための護岸や堤防を作る業務に従事してをります。大蔵省へ提出する予算要求資料を作成する時など忙しい時期には、帰宅が連日十一時十二時を過ぎる状態で、一日々々が慌しく過ぎてゆくといふのが正直な感想です。ともすれば忙しさに流されて了ひがちな日々の生活の中で、この子規の文章には力づけられる思ひがしてをります。

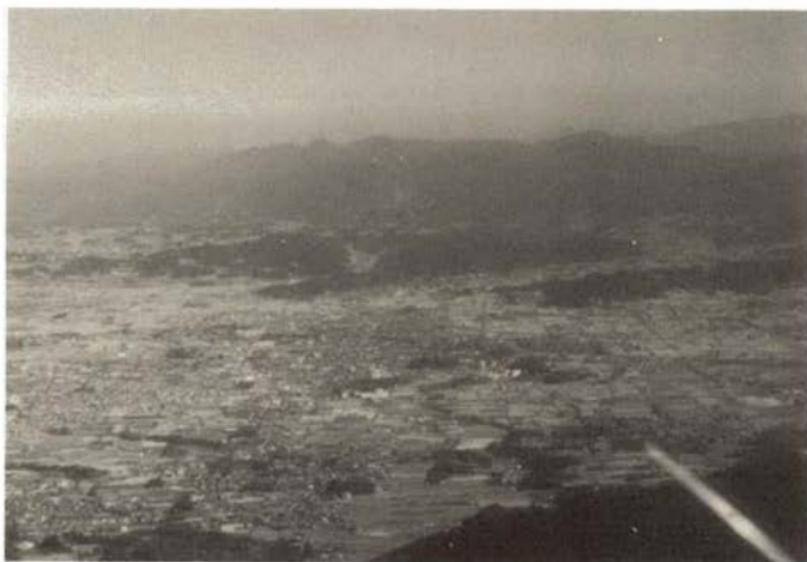
この活き／＼とした文章には、外的な忙しさや病床の苦しさに負けない内心の充実感、心の忙しさで一杯の子規の生活ぶりが感ぜられ、この様なおほらかで健康な生活ぶりを思ふ時、私も日常生活の忙しさに負けてはゐられないと強く思はされるのです。

(昭和五十七年、九州大学工学部大学院卒)

心に残る言葉

鳥栖市役所下水道課

西
山
八
郎



葛城山頂より大和国原を望む

唯今御紹介戴きました西山です。現在、鳥栖市の下水道課で工事の契約や検査などを担当してをります。皆さんは、昨年話題になりました「ピルマの竖琴」といふ映画のことは御存知でせうか。親に行かれた方も多いと思ひますが、原作となった同名の本の中で、著者の竹山道雄先生は、戦後の混乱したわが国のありさまを嘆いて次のやうに書いてをられます。

「いま新聞や雑誌をよむと、おどろくほかはない。多くの人が他人をのしり責めていはつています。『あいつが悪かったのだ。それでこんなことになったのだ』といつてごうまんにえらがつて、まるで勝つた国のようです。(中略)ところが、あの古参兵のような人はいつも同じことです。いつも黙々として働いています。その黙々としてゐるのがいけないと、えらがつている人たちがいうのですけれども、そのときどきの自分の利益になることをわめきちらしているよりは、よほど立派です。どんなに世の中が乱脈になつたやうに見えても、このやうに人目につかないところで黙々と働いてゐる人はいます。こういう人こそ、本当の国民なのではないでしょうか？」

戦争が終り、混乱したわが国を何とか再建していかうといふ大変つらい時代に、さうなつた事をまるで他人事のやうに批難する人が多いなかで、黙々と地道に働いてゐる人も矢張を

られたのです。

仕事を通じて地元の方や工事に携はつてをられる方など毎日いろいろな方と出会ひながら実感致しますことは、私達が生活してゐるこの社会が、実に多くの人々に支へられながら営まれてゐるといふことです。そして、さういふ人々のひたむきな姿に接してをりますと、この「ビルマの豎琴」の一節がフツと浮かんでくるのです。

私が大学に入りましたのは今から約十四年前になりますが、当時は、大学紛争がまだ終結してをらず、ヘルメットを被り角棒を持った過激派の学生達が授業を妨害したり、学内のあちこちでマイクのポリウムをいっぱいにかけてアジ演説をするといった光景が屢見受けられました。そして、皆さんにはとても信じられないでせうが、大学の構内において、大学側や対立する思想集団との間で、流血の争ひが頻繁に行はれてゐたのです。私はこのやうな大学の現状を見て、大学で行ふ本当の学問とは一体何なのかと少しづつ疑問に思ふやうになつてゐました。

その頃、学内で開かれた講演会で知つたある先輩に勧められて、毎週一回の輪読会に参加するやうになつたのです。テキストは、皆さんが昨日読まれた太子の御本でした。初めの頃は、言葉が難しくて意味もよく分らないまま読んでをりましたが、難しいながらも、お言葉をじつと見詰め、先輩の言葉に耳を傾けてをりますと、それ迄分らなかつた言葉の意味がま

るで霧が晴れるやうに少しづつ分っていく。それが本
当に不思議に思へました。

そのやうにして参加するやうになった何度目かの輪
読会のことを、私は今でも忘れることができません。
それ迄は輪読会に参加しても殆ど回りの先輩の話を聞
くだけでした。でも、その日は私も思ひ切って自分が
思っていることを発言してみたのです。ところが、私
のその発言をめぐって長い時間議論になりました。そ
れは、先の大東亜戦争で戦死した若者達のことについ
てでした。私はそれ迄戦争や戦争に結びつくことであ
れば何でもいけないことだと思ってるました。ですか
ら、悪い戦争に参加して亡くなったのだから、それら
の人々の死は無駄死にだったのだと主張しました。と
ころが、私の話を静かにじっと聞いてをられたある先
輩は、次のやうに私に繰り返し説かれたのです。「あの
戦争について、それをいろいろと論じることはできる



かもしれない。しかし、大事なことは、一国の存亡をかけた戦争に、わが身を惜しまず出征して行った若者達がゐたといふことをよくよく考へてみることはないのか。精一杯生きて、そして死んで行った若者達の思ひを偲ぼうともしないで、簡単にあの戦争が悪かつたのだから若者達の死も無駄死だったと片付けてしまふのは間違つてゐるのぢやないか。」と言はれたのです。

その日以来、私はこの問題を何度となく自問自答しました。戦争が良いことでないことは誰でも分つてゐます。進んで戦争をしようといふ人などゐないでせう。では、何故戦争は起るのでせうか。今でも世界のあちこちで戦争が行はれてゐます。わが国も四十数年前戦争を体験しました。これらの戦争は何故防げなかつたのでせうか。この問題を突き詰めていくと、大変大きな問題になっていきます。しかし、戦争が起きたといふ事實は紛れもない事實であり、その戦争に参加して掛け替へのない命を失つた大勢の若者達がゐたこともまた事實なのです。

私は、先輩に紹介して載いて彼らが出征する前に書いた手紙や短歌を読みました。そして、その純粹な思ひに本当に心を打たれました。私は知らなかつたのです。彼らが自分の置かれた苦しい時代の中でいかに真剣に自分の生き方を悩み、短い人生をまっしぐらに生きていったかといふことを。彼らが残したそれらの言葉に直接触れて、私の心の中のわだかまりも消

えていきました。

このやうな経験の中で、もう一つ今も心に残ってゐることがあります。それは、私の母の里の近くにをられた廣尾彰大尉といふ方のことです。昭和十六年十二月八日、日本はアメリカやイギリスなどに対して宣戦を布告してハワイの真珠湾を攻撃しました。この時、空軍と共に作戦に加はった五隻の小型特殊潜航艇がありました。二人しか乗れない小さな特殊潜航艇に乗り組んだ十人の兵士達は、一人を除いて総て戦死されました。この廣尾大尉もその一人でした。

この方は、私の母や叔父達と同年代の方で、お盆に墓参りに行きますと、祖母はいつも近くにある廣尾大尉の墓迄連れて行き、いろいろと大尉のことを話してくれました。幼い私にこの方がどのやうに偉い人なのかよく分るはずもなかったのですが、何かとても尊いものに対するやうな態度で廣尾大尉の墓に参り、そして墓に向つて苦勞を^{ねぎら}言葉をかけながら大事さうに掃除をしてゐた祖母の姿を今でもよく覚えてゐます。

その廣尾大尉は、いよいよ作戦が開始と決定されると、自分は転属になつて暫く戻れないとだけ両親に言ひ残して出征されたのださうです。祖国を離れ、遠い異国の湾上で、目の前に迫つた自らの死を前に廣尾大尉は何を思つてをられたのでせうか。長く厳しかった訓練期間、自分に課せられた任務の重大さ、そして、これからの日本がどういふ運命を辿るのかを

心の中で思ひ巡らし、自分が辿ってきた二十有余年の人生を振り返り、幼い頃の思ひ出をなつかしみ、そして、何も言はずに別れて来た両親のことを思ひ、万感の思ひが胸中を渦巻いてゐたこととせう。

先の大戦では、約一八五万人の国民が戦死し、残された国民の多くも住む家さへ失ひました。多くの生命を犠牲にし、絶望と深い悲しみだけを残したあの戦争は、民族の悲劇としか言ひやうがありませんが、この戦争を一つ概念として捉へ、その概念に対する評価に基づいて具体的な事実を裁いてゆけば、私達が人として本質的に備へ持つてゐる喜びや悲しみといった感情は一体どうなるのでせうか。それでは、青春の総てをかけて戦陣に参加し、肅々として死地に赴いて行つた若者達のあの無量の思ひは一体誰に受け継がれてゆくのでせうか。このことを思ふ時、私はあの輪読会で言はれた先輩の言葉が、今も心に蘇ってくるのです。

私にとつて、大学に入って始めて経験したこの輪読会は、私のそれ迄の生き方を根本から問ひ直させるものでした。二、三度しか会つたことのない先輩に自分が確信してゐたことについて正面から反論されるのにはびっくりしました。言ってみれば他人の私に、この先輩は何故これ程迄本気で語りかけてこられるのか、くやしきもありましたが、思ひがけない体験でもありました。何の遠慮もなく率直に、そして心を込めて語りかけて下さつた先輩の姿を今思ひ浮かべると、自分の心を赤裸々に披瀝し合ふ本当の付き合ひといふものを学ばされた

やうに思ひます。

私は、現在も時々佐賀や福岡でこの聖徳太子の御本の輪読をさせて戴いてをりますが、これからも輪読を続けながら私の人生を精一杯生きて参りたいと思つてをります。

（昭和五十一年、西南学院大学法学部卒）

一年のあゆみ

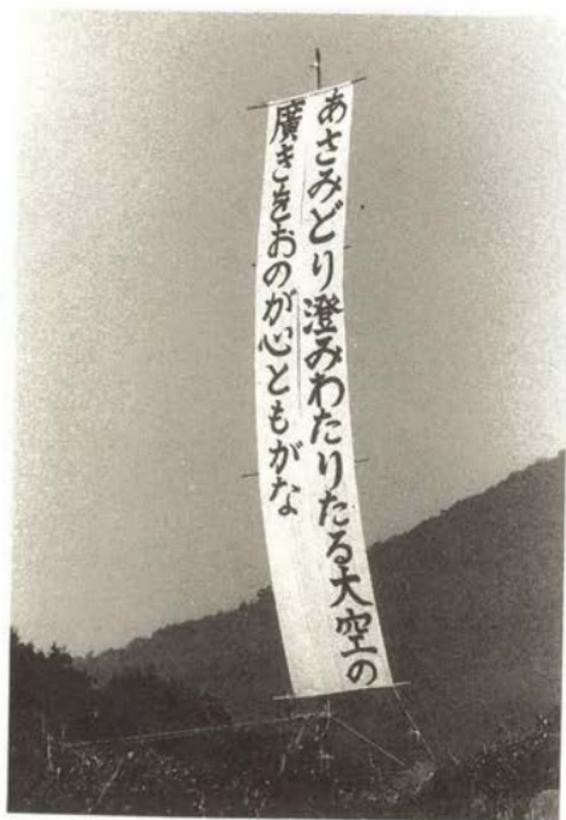
亜細亞大學法學部四年

國

分

俊

喜



合宿地の幟—明治天皇御製

昭和六十一年五月、「日本を守る國民會議」がつくつた高校歴史教科書『新編・日本史』の内閣検定合格が決定された。これに對して數年前の教科書問題と同様、十分な事實確認が無いまま、朝日新聞をはじめとするマスコミの非難が行はれ、さらにそのマスコミによつて作られた虚像に基づいて中國、韓國政府からの抗議が日本政府に對して行はれた。この教科書問題に續いて、藤尾正行文部大臣の發言について、一部マスコミをはじめ、中國、韓國政府からの抗議が行はれた。これらの一聯の出來事についての日本政府の對應と言へば、近隣諸國への配慮といふ名目の下に、外國からの内政干渉に右往左往し、相手の機嫌を伺つて、干渉に屈するといふ態度に終始した。さうして、教科書問題では、たび重なる改定、藤尾文相事件では文相更迭といふ結果に至つたのである。

敗戦後、四十年を経た今、わが國は世界の中で主導的な役割を果たしてゐるにも拘らず、外交姿勢に於ては依然として敗戦國、被占領國のそれである。日本政府の對外政策は、外國の干渉に屈し、東京裁判史觀による自虐的對外關係を持續させ、その場しのぎの態度をとつてゐるに過ぎない。そこには諸外國に對して自國の姿勢を正面に掲げ、對等な立場に立つて理解してもらはうと努力する、眞の獨立國としての外交姿勢は失はれてゐる。かうした事は

單に中曾根首相の政治姿勢に問題があるといふ單純な事ではないと思はれる。自國に對する誇りが失はれた、現代日本の思想にこそ本質的な問題があるのではないか。

西郷南洲遺訓の一節を掲げる。

「正道を踏み、國を以て斃るるの精神なくば外國交際は全かるべからず。彼の強大に畏縮し、円滑を主として曲げて彼の意に順從する時は輕侮を招き、好親却つて破れ、遂に彼の制を受くるに至らん。」

なんと嚴しい言葉であらうか。まさに現日本外交に對する痛烈な警告と思はれるが、同時に「國を以て斃るるの精神」といふ言葉には、南洲の國に對するかけがへのない愛情と誇りとが満ちあふれてゐる點は見逃してはなるまい。

大學學内において顯著な通り、現代の思潮では「國家」は極めて概念的に捉へられ、日本といふ國家とそこで爲されてゐる個々人の生活とは完全に分離したものとして考へられてゐる。そこには、祖先の方々が築いてこられた長い日本の傳統の中に私達が生きしめられてゐるといふ事實への健全なる心の働きが脱落してゐる。日本人一人ひとりが、長い傳統に培はれた日本の歴史に思ひを致し、心を盡す努力を行ふ所に、日本といふすばらしい國に抱かれてゐる事を実感出来るのではないだらうか。さうした所にこそ、國を思ふ、國を守るといふ眞の獨立の心が起こるのではないのだらうか。

以上の事と、現代の私達が、先人の言葉に觸れる機會が非常に少なくなつてゐることとは無關係ではあるまい。先人の言葉に觸れることによつて、先人の心を偲ぶ、ひいては歴史に學ぶといふ經驗が無くなつてゐる中では國の眞の獨立を考へ、先人の業績を讀へ、維持し續ける事は不可能である。私達はかく考へ、合宿や輪讀會等の研鑽を通じて先人の言葉に觸れ、自らの心の内に、先人の思ひを、日本の歴史を、正しく映し出さうと努めて來たのである。

昭和六十年八月、第三十回合宿教室が終り、私達は「學問・人生・祖國」といふ大きな自分自身への問ひかけを胸に、再び大學生活に戻つて行つた。しかし、大學の中では、既に述べた如く概念的思辨や合理的經驗に基づく事實にのみ着目する學問が尊ばれ、自分の身の回りの事どもに心を働かせる、或は心を盡す、といふ人間的經驗を深める努力が甚しく稀薄であるといふ現實にぶつかつた。さうした大學生活の中で私達は、合宿教室で學んだ事をしかと自らの心に甦らせ、そして學内、學外の友へ學びの輪を擴げんと全國各地區に於いて、輪讀會、短歌の會、研究發表などを営んでいつた。さうした中で古典に觸れ、先人の言葉に宿る思ひを偲び、或は、己が氣持ちを正確に見つめ、歌に現はし、研鑽を積みながら自らの生き方を暗中摸索しつつ、問ひ續けていつたのである。

この間、各地で開催された合宿は次の通りであつた。

〈地方合宿〉

主催	年月日	場所	参加大学
早大積誠会	昭和60年 10月26日～27日	埼玉 廣木寧先輩宅	早大・慶應大
東京信和会	昭和60年 11月9日～10日	千葉 「川きん」	亜大・千葉工大・中大・早大
福岡信和会	昭和60年 11月22日～24日	福岡・津屋崎 「花波荘」	九大・西南大・福岡大・徳山大 山口大
東京信和会	昭和60年 12月13日～15日	東京 「正大寮」	亜大・千葉工大・中大・早大
東京信和会	昭和61年 2月25日～28日	東京・府中 「府中青年の家」	亜大・中大・早大・千葉大・千葉工大
東京信和会	昭和61年 5月31日～ 6月1日	横浜 「神奈川ユースホステル」	亜大・中大・早大・千葉大・千葉工大 日本文化大

○
 かうして、それぞれの地區での學内、學外に於ける輪讀會、小合宿等が地道に續けられ、明けて昭和六十一年一月六日、七日、九州より二名の學生が上京し、東京、正大寮に於いてリーダー會議が行はれた。リーダー會議では、各地區の研鑽の成果を確認し合ふと共に、春季合宿についての話し合ひがなされた。話し合ひの焦點は、四月の新入生勧誘と來たる島原での合宿教室への勧誘、つまり私達の歩んで來た學びの道を如何に新しい友へ披瀝するか、といふ事であつた。その結果、今回の春季合宿は例年とは異なつた展開が爲されることになつた。一つは東京地區だけの春季合宿を全體での春季合宿前に行ふといふ事。もう一つは、全體での春季合宿は、從來の研鑽を中心としたものではなく、私達が友を誘ひ、また自らの生き方を内省し續けて來た學びの道の原點となつてゐる合宿教室にそれぞれがどの様な思ひを抱き參加して來たかを披瀝し合ひ、その上で、四月からの勧誘活動をいかに活潑化するかといふことを討議する場にしようといふ事であつた。

まづ、東京地區の春季合宿が、東京、府中市にある「府中青年の家」で三泊四日の日程で開催された。合宿は、開會式、所懷發表に續き、早稲田大學教育學部二年の大日方學君が、小林秀雄氏の『好き嫌い』の輪讀に當つて、小林氏の『學問』を基とした輪讀導入發表を行つた。小林氏の『學問』の中で、伊藤仁齋にとつて「讀書するとは、知識の蒐集ではなく、

いかに生きるべきかを工夫する事であつた。」といふ箇所を引用し、それに對して「仁齋の學問の根本となつてゐるもの、また仁齋の行つた讀書とは一體どういふものだったのかを感じとりたいと思ふ。」と述べ、「好き嫌ひ」の文章が、長時間に亙り讀み込まれていつた。

三日目は吉田松陰の『杉藏を送る叙』の輪讀が行はれた。参加者の中には松陰の文章に初めて觸れる學生が多かつたが、讀み進むうちに、松陰の力強くかつ美しい筆致に引きずり込まれる様な感さへ覺え、また、時勢を適確に把握し、湧き出づる憂國の思ひを杉藏に語りかける松陰の熱き心が、参加者全員の心の内に鮮やかに甦つていつた。さうした中で、ある友は、「僕は、春から友人を輪讀會や合宿に誘ひたいとは思ふけれども今一つ勇氣が出なかつた。だが、松陰の文章を讀んでみると、松陰が自らの爲すべき所をしかと見据ゑ、自ら心に湧き出でる思ひを行動に現して全身でぶつかつていつた姿勢が胸に迫つた。僕はこの姿勢に學びたい。これから僕は、大學の友人に自分がしかと感じ得た事を自分の言葉で拙いながらも語りかけてゆきたい。」と述べて呉れた。この友の言葉は参加者全員が等しく抱いた思ひでもあつた。輪讀後、春からの勧誘活動に向けての具體的な方策を検討し、東京地區の春季合宿を終へた。

東京地區の春季合宿を終へ、二週間後の三月十四日から十七日までの三泊四日、福岡縣糸島郡二丈町深江にある「丸八旅館」に於いて春季合宿が営まれた。

合宿參加者の内譯は左記の通りである。

〈東日本〉 亜大五・早大二・中大二

〈西日本〉 同志社大一・九大七・西南大二

〈國民文化研究會〉 九名

總計 二十八名

今回の春季合宿は、前述した通り例年の輪讀等を中心とした研鑽合宿とは異なり、來たる第三十一回合宿教室への參加學生數の増加を圖るべく、各大學、各地區での春からの活動について「今夏の合宿教室に向けての勧誘活動の新展開」といふテーマのもとに討議がなされることになつた。しかし、單に方策を出し合ふ合宿ではなく、一人ひとりが合宿教室、或は輪讀會に何を求めて參加し、研鑽を續けてゐるのか、自らの内心への問ひかけを明確にした上で、全国各地區の友がお互ひに心を響き合はせ、四月からの勧誘活動を活潑化させようといふことだつた。

開會式後、西南學院大學文學部三年の日比生哲也君がリーダー學生による所懷表明を行つた。その中で「僕は、合宿教室に今年も是非參加したい。それは、合宿教室に全國から集ふ友らの虚飾なき眞劍なる言葉に觸れ得ることが出來、また講義を通して、日本の長い歴史、傳統を守り傳へて來た先人の生きた跡を辿り、日本人としての自らの生き方を求めてゆきた

春季合宿日程表

	3月14日(金) 第1日	3月15日(土) 第2日	3月16日(日) 第3日	3月17日(月) 第4日	
7:00					
8:00		朝の集ひ 朝 食	朝の集ひ 朝 食	朝の集ひ 朝 食	
9:00		学生発表(國分俊喜)	夏合宿日程 検 討		
10:00		討 論	各地区の活動 計 画 検 討	合宿教室勸 誘へ向けて の所懐発表	
11:00				感想文執筆	
12:00			昼 食	昼 食	昼 食
1:00		討 論	映画鑑賞 (天皇陛下)	合宿決定事項確認 学生発表(野中武朗)	
2:00		学生発表(大日方學)		閉 会 式	
3:00	開 会 式	討 論		散 策	
4:00	リーダ一 所懐発表 (日比生哲也)	入浴 夕食	入浴 夕食		
5:00	各自の 所懐発表				
6:00	入浴 夕食	輪 読	各地区の活動 計 画 検 討		
7:00	所懐発表				
8:00	占部賢志先輩 御 講 話				
9:00					
10:00	就 寝				
11:00			夜の集ひ		
12:00					
1:00					
2:00					

いからだ。そして、その學びの輪を擴げてゆきたい。その爲にも、一人でも多くの友を誘へる様な展開を繰り擴げたいと思ふ。」と述べた。引き續き、参加者全員が春季合宿に望む所懷表明を次々と述べた。ある友は、「自分は昨年、初めて合宿教室に参加した。その中で、具體的に何に感動したのか、といふ事を言葉に現すことは出来ない。しかし、全國から未知の友を迎へ、お互ひ心を盡して語り合ふといふ經驗は、今まで皆無であり、また驚きでもあつた。」といふ率直な胸の内を語つて呉れた。その夜、福岡中央高校教諭の占部賢志先輩に御講話をしていただき、その中で「自分にとつて合宿教室は『自分』を不問に附して何事かを語れる場ではなかつた。」と語られた。その御言葉からは自分自身の内心からの思ひが發露した着實な行動、或は言葉によつてのみ、友に對して働きかける事が出来る、といふ眞劍な姿勢が感じられ、日頃、出來合ひの言葉で友に語りがちになる私達の胸に大きく響く御言葉であつた。そして先輩は、「氣持ちが緩んで來ると自己が消滅し客觀的になつてしまふ。さういふ時、どこかで自分を奮ひ起さなければ主體性は滅びる。」と續けられ、主體性といふ確かな自己への問ひかけ、思想の練磨が、現代の複雑な社會、或は目的を失つたかの様な學内の現状に目を向けると、如何に重要な事であるかを、参加者一同深く心にかみしめたのである。

二日目は、亜細亞大學法學部三年の國分俊喜と早稲田大學二年の大日方學君が、前日の所懷發表を受けての思ひを、それぞれの大學での學問、或は友人との生活を基として語つた。

それは、自分らが今まで行つて來た學問といふものは、決して机上だけで語られる質のものでは無い。自らが如何に生きるかといふ内心への問ひかけのもとに發露するものであり、その上で初めて、友の思ひを偲ぶことも出来るのではないだらうか、といふ問ひかけであつた。その夜、先輩の方々が全國の大學を訪ねた時の巡訪報告を記した『國民同胞』を輪讀した。その中の、當時、上智大の學生であつた北崎伸一先輩の報告の中に、「相手に訴へるだけの力のある言葉を吐き得るか否かといふことは、言葉がたくみであるといつた事とは全く別の、生き方の眞價が問はれるのだと思ひます。」といふ文章があつた。ある友は、この文章に觸れ、「たとへ、様々な勧誘の方策が考へられようとも、一對一で友に語りかけ、自分の内心から湧き出した思ひを友にぶつけていくことに變はりはない。合宿に誘ふだけの勧誘ではなく、生涯つき合ひ續ける事の出来る友を見つきたい。」と語つて呉れた。一人の友を誘ふといふ事が如何に大變な事であることか、そしてそれは、自らが如何に生きるか、といふ問ひかけによつてのみ發露する事であることを參加者一同が痛感させられる言葉であつた。また、元日特金屬工業(株)常務、加納祐五先生が、合宿教室の最終日での経験を省みられ『疑ひのないこと』と題して書かれてゐる『國民同胞』の文章を輪讀したが、その文章も忘れることが出来ない。「皆さんの氣持ちもいろいろであつたと思ひますが、ただその中で絶対に信じられることが二つだけであつたと思ひます。一つは、たとへその結果はどうであれ、お互ひに心を開いて

相手の心を本當に偲び合はうといふ懸命の努力をしたといふこと、これは疑ひないことです。もう一つは、一緒に話し合つた友達の心は、あるいは十分には理解は出来なかつたかもしれないけれども、その真心については恐らく皆さんは少しも疑ふことはなかつただらうと思ひます。この二つは絶対に間違ひないことだと私は確信してゐます。私達はこの御言葉こそが、友を誘ふ私達の力であると實感した。

合宿三日目、内心の思ひを十分に見つめた前日までの研鑽を踏まへて、その思ひを行動に現はさうといふことになり、いよいよ春からの活動に向けての様々な具體的な計畫、検討がなされた。

合宿最終日、合宿教室勧誘へ向けての所懐發表が行はれた。その發表はみな力強く、ある友は「これから大學に戻り、一對一で友に語りかけようと思ふ。しかし、そこには心を開き、友の心を偲ぶといふ謙虚な思ひがなければ、どの様な方策を掲げようとも意味がなくなつてしまふ。腹を据ゑて友を誘つてゆきたい。」とさはやかに語つて呉れた。かうして三泊四日の春季合宿が終り、來たる島原での合宿教室での再會を約して、それぞれの學生生活に戻つて行つた。

○

四月の、最も騒然としてゐる、そして自分の生き方への問いかけを失ひ、集團の内に属す

ること安住してしまつてゐる學内の雰圍氣の中で、一人の友に眞剣に語りかけ、その言葉に心を開いて呉れる學生に出會ふことは非常に困難なことであつた。その様な中で、案内文を一人一人に手渡し、或は學内で講演會を開いたり、自らの内心の思ひの發露となつた言葉により、地道に勧誘が續けられた。さうした私達の思ひに應へるが如く、新たな友が集ひ始めた。一人の學生の心の呼びかけに新たな友の心が響く。その共鳴が少しづつ學内、學外に擴がり、島原に於ける第三十一回全國學生青年合宿教室へと向かつて行つたのである。

〈講演會〉

主催	年月日	場所	講師・演題
早大積誠會	昭和61年 4月3日	早大7号館 二一八教室	国武忠彦先生（横濱翠嵐高校教諭） 「『本居宣長』（小林秀雄）にみる 学問と人生」
中大信和會	昭和61年 4月17日	中大 七〇五教室	講演テープを聞く會 「小林秀雄」―「信ずることと考へること」―

中大信和会	九大信和会	九大信和会	西南大信和会	亜大 日本文化研究会
昭和61年 5月21日	昭和61年 5月17日	昭和61年 4月26日	昭和61年 4月24日	昭和61年 4月19日
中大六号館二階 六二〇二教室	九大教養部 二五番教室	九大教養部 学生会館二階 大ホール	西南会館二階 一号会議室	亜大 五二三番教室
柴田悌輔先生 (株方栄産商) 「現代社会に思ふ」 「学生時代に学ぶべきこと」	小柳左門先生 (九大病院医師) 「日本人としての豊かな生き方を求めて」 「アメリカ留学経験を通して見る日本文化」	長澤一成先生 (九大病院医師) 「大学で何を学ぶか」 「学生生活をスタートする諸君へ」	小柳陽太郎先生 (九州造形短大教授) 「歴史を見る目」 「学問の出発点に立つて考へるべきこと」	東中野修先生 (亜大助教授) 「アメリカ体験談」 「ひとつの比較文化論として」

<p>日本文化研究会 亜大</p>	<p>早大積誠会</p>	<p>千葉工大信和会</p>
<p>昭和61年 6月26日</p>	<p>昭和61年 6月18日</p>	<p>昭和61年 5月26日</p>
<p>亜大 四四一番教室</p>	<p>早大七号館 二一八教室</p>	<p>千葉工大津田沼校舎 一号館四階 一四四教室</p>
<p>奈良崎修二先生(株日産自動車) 「学生生活と学問 —自由闊達な学問を求めて—」</p>	<p>夜久正雄先生(亜大名誉教授) 「詩と政治 —明治の詩魂—」</p>	<p>講演テープを聞く会 「小林秀雄—「信ずることと考へること」—」</p>

合宿教室のあらまし

西南学院大学文学部四年

日比生 哲也



合宿宿舎の屋上にて

第三十一回全国学生青年合宿教室は、昭和六十一年八月六日から十日までの四泊五日間、長崎県島原温泉、島原グランドホテルにて開催された。合宿地からは、島原の町を隔てて、あまたの小島が浮かぶ有明海が眺望でき、また背後には緑濃き眉山が壮大に聳え立つてゐる。合宿三日前には準備及び運営に当たる国民文化研究会々員、並びにリーダー学生、二十余名が集合し、事前の合宿が行なはれた。僅か一泊二日間の研鑽ではあつたが、発表・討論そして輪読に真剣に取り組む中で合宿教室に臨む気持ち次第に高められていつた。合宿前日は、受け入れ準備のため終日作業に当てられた。分担された作業は着々と進められてゆく。会場玄関横には「友よ！とよべば友は来りぬ」と力強く大書された横断幕が掲げられ、また朝の集ひが行なはれる広場には国旗掲揚台と並んで「あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな」といふ明治天皇の御製が書かれた幟が立てられた。日の丸も御製も眉山の緑に映えてとても鮮かである。夕刻、作業終了。あとは翌日の開会を待つのみとなつた。

参加者の内訳は次の通りである。

（学生班 五五大学）

宮城教育大2、千葉大2、防衛大5、富山大2、京大1、大阪外大1、大阪教育大1、岡

山大一、島根大一、広島大三、徳島大一、九大六、北九州大二、福岡教育大一、佐賀大二、長崎大六、熊本大六、宮崎大一、北海道工業大一、北海学園大一、東北学院大一、東京国際大一、千葉工大一、拓殖大26、亜細亜大16、早稲田大11、中央大12、日本大5、専修大2、高千穂商大2、国学院大2、東京理科大1、東洋大一、日本文化大一、明治大一、法政大一、帝京大一、津田塾大6、江戸川女子短大一、東海大一、愛知学院一、立命館大一、京都女子大一、武庫川女子短大一、徳山大5、安田女子大一、西南学院大8、福岡大2、九州産業大一、九州女子大8、九州造形短大一、佐賀女子短大2、東筑紫短大一、尚綱大3、福岡教員養成所1

計一七三名（うち女子四一名）

（社会人・教員班）会社員 高校教員など

計二〇名

（招聘講師）二名

（国民文化研究会）八八名

（事務局）一一名

総計 二九四名

参加者は、合宿申込書のアンケートを基に七名乃至八名を単位とする班に編成され、事前

合宿参加学生及び国民文化研究会々員が班長となつた。男子学生班は二十箇班、女子学生班は六箇班、社会人班は三箇班に分けられた。

以下、合宿教室の流れを記すが、各講師の講義内容については印象を記すに止めた。講義内容の詳細は、本書に掲載されてゐるのでそちらを御読み頂きたい。

第一日（八月六日）

〈開会式〉

午後二時。愈々開会式が始まる。全国から集まつた友らは期待と不安を胸に、少し緊張した面持ちで講義室に整列した。九州大学三年荻原憲介君の力強い開会宣言により第三十一回全国学生青年合宿教室の幕は切つて落とされた。国歌斉唱の後、参加者一同、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し、一分間の黙禱を捧げた。

続いて主催者を代表して、国民文化研究会理事長、小田村寅二郎先生が登壇され、「この合宿は、日本人であるお互ひが大学差、年令差などを越え日本の国の流れをより正確に知り、同じ思ひで国の過去を偲び将来を思ふ道を切り開かうといふ念願で開催されてゐます。お互ひにうそ、いつはりなく付き合ひ、語りあふ世界が展開されれば、心の底からの、本当のう

8月8日(金) (第3日)	8月9日(土) (第4日)	8月10日(日) (第5日)
—(起床)—	—(起床)—	—(起床)—
朝の集ひ 朝食	朝の集ひ 朝食	朝の集ひ 朝食
(講義) 東京工業大学教授 江藤淳先生 (質疑応答)	(講義) 国文研理事長 小田村寅二郎先生	運営委員長所感発表
全員写真撮影	班別討論	全体感想自由発表
班別討論	映画上映 伊勢の遷宮	(合宿をかへりみて) 沢部寿孫先生
昼食	昼食	感想文執筆と 第2回和歌創作
(和歌導入講義) 宝辺矢太郎先生	(講話) 夜久正雄先生	班別懇談
レクリエーション (雲仙仁田峠登山)	(和歌全体批評) 折田豊生先生	閉会式 (昼食・解散)
和歌創作	班別 和歌相互批評	
夕入散 食浴歩	大学別・地区別懇談	
青年体験発表	(講話) 国文研副理事長 宝辺正久先生	
慰霊祭	班別懇談	
班別懇談	夜の集ひ	
(就床)	(就床)	

合宿教室のあらまし（日比生）

	8月6日(水) (第1日)		8月7日(木) (第2日)	
	6:30 -			—(起床)— 朝の集ひ食 朝 朝
8:00 -				
9:00 -			(講義) 筑波大学教授 村松剛先生 (質疑応答)	
10:00 -				
11:00 -			班別討論	
12:00 -			昼食	
11:00 -				
2:00 -			(講義) 山田輝彦先生	
3:00 -	開会式 合宿趣旨説明			
4:00 -	班別自己紹介 『日本への回帰第21集』 班別輪読		班別討論	
5:00 -				
6:00 -	夕入散	食浴歩	夕入散	食浴歩
7:00 -			(全体輪読指導) 小柳陽太郎先生	
8:00 -	(合宿導入講義) 長澤一成先生			
9:00 -	班別討論		班別輪読	
10:00 -			(就床)	

第三十一回「合宿教室」日程表

れしさを感ずることが出来るのです。さういふ道をお互ひに探し求めて下さい」と合宿教室の趣旨を述べられた。次いで参加学生を代表して西南学院大学四年、日比生哲也が「これからの四泊五日を思ふと期待と不安で胸が一杯になります。共に学ぼうといふ気持さへあれば私達にとつて必ず有意義なものになると信じます。頑張りませう」と呼び掛け、開会式を終了した。

続くオリエンテーションでは、福岡県立福岡中央高校教諭、占部賢志合宿運営委員長が登壇され、班構成、運営体制を紹介された後、「これからの四泊五日間の全く未知の世界に繰り広げられてゆく人との交流の中では、これまでの自分の知識や考へ方は何にも役に立ちません。今、皆さんの胸に湧き起こつてゐる不安や期待が入りまじつた心のふるへ、その活力こそが、物に鋭敏に反応し自分の思ひを正直に語つてゆく力を導き出すのだと思ひます。その活力を心の中に湛へ合宿に臨んで下さい」と御自身の合宿経験を踏まへつつ皆に呼び掛けられた。最後に合宿全般に亘る注意事項が、福岡市立弥永小学校教諭・是松秀文指揮班長より伝達された。この後、参加者一同は各自の班室へ入り合宿参加の動機や日頃の生活ぶり等を含めた自己紹介を行なひ、昨年の合宿教室のレポートである『日本への回帰―第二十一集』の輪読を行なつた。

〈講義〉

合宿導入講義として、九州大学医学部循環器内科勤務の長澤一成先生が「学問の再生のため」に」と題して話をされた。先生はまづ、御自身の合宿教室の経験について「人の話を『聴く』といふことが如何に難しいことであるかを知つた」と述べられ、学問をやつてゆく上で物事を正確に受けとめることの大切さを押へられた。続いて本題に入られ、現代の学生の風潮について「今の若者の多くは、『自分の人生を如何に生きるか』といふ問ひに眼を向けなくなつてゐる」と指摘され、それは「自分の人生が歴史と切り離されてしまつてゐるところに原因があるのではないか」と問題を提起された。そして、このことについて先生は、学生の折に、茶谷武といふ戦没学徒の方の遺書に触れた体験を通じて次の様に語られた。「茶谷さんが切実なおもひを托した『第二の国民』とは自分達のことではないかと思つた時、『自分はこのままでいいのか。自分の人生の目的は何であるのか』といふ問ひが心の中に生じて来た。」さらに、小林秀雄氏の『美を求める心』『本居宣長』の一節を引用されながら「過去の人間から呼びかけられる声を聞き、これに現在の自分が応へねばならぬと感じたところに学問は始まる。自分がどう生きるかといふ問ひ掛けを歴史や古典に求める、人生と直結した学問を今こそ取り戻す必要があるのではないか」と参加者一同に訴へられた。最後に、山鹿素行の、武士が農工商の三民の長たる所以は「他なし、よく身を修め、心を正しくして、国を治め天

下を平かにすればなり」といふ文章を紹介され、「自分たちもこの武士と同じ立場にゐるのではないか。何故自分が大学に行かせてもらつてゐるかを考へれば、自づから学問に対する誇りや使命を感じるはずだ」と私達を励ますやうに力強く語られ御講義を終へられた。

〈班別討論〉

講義に引き続き、班別討論が行なはれた。自分の言葉しか頼るものが無く、班員一人一人の心持ちが問はれる時間である。しかし初めは、その場をつくらふ様な発言や講義の内容から離れたところでの意見が続き、何かしら空しい気持ちのまま時が経つてゆく。討論がかみ合つてゐないといふ実感と、このままで良いのかといふ不安。そして自問自答が始まる。「一体自分は講義で何を感じ、皆に何を語らうとしてゐるのか」。この自分自身への問ひは、自づと友の語る言葉に敏感に反応しようとする心の働きへと広がつてゆく。ここに真の対話が開始されるのである。班別討論は、講義終了後毎回行なはれ、少しづつではあるが、一人一人が心を開いて真剣に語り合ふことの歓びを味はつていつたのである。

第二日（八月七日）

〈講義〉

二日目は筑波大学教授、村松剛先生の御講義で始まった。演題は「日本の外交の歴史と現況」である。先生はまづ外交といふことに就いて「外交とは、物事にどう対処するかといふ国の主体性の問題であり、それは精神文化を抜きにしては語れないものである」と述べられた後、本論に入つてゆかれた。古来、日本人はどういふ態度で外国と接して来たかに就いて、聖徳太子が大国隋に対して送られた国書に触れられ「これは日本の自立宣言を意味するものであつた」と述べられ、さらに「日本人は、祖先の魂に対する敬虔な信仰心を失はず、主体的に異文化を摂取して来た」と我が国の外交姿勢が神道精神に基づいてゐたことを強調された。



続いて現代の日本外交の問題に言及されて、日本の生命線たるペルシャ湾の安全確保を他国に委ねてゐること、また経済力に見合ふ防衛力を怠つてゐること等を挙げられ「国際的責任をとらうとしないことは、独立国として責任感がないといふことではないか」と指摘され、さらにクラウゼビッツの『戦争は別形態の政治である』といふ言葉を引用され「これは『政治は別形態の戦争である』と言つてもよい。国際政治とは各国が自国の利益のために鎬を削つてゐる場であることを日本人は忘れてゐる。厳しい国際社会で日本が存続してゆくためには、我が国の過去の外交史に学び、自主的な外交を行なふ努力をしなければならぬ」と強く訴へられ御講義を終へられた。先生の御話により、参加者一同、国際社会に於ける日本の置かれた現状を直視せねばならないと強く思はされた。

（講義）

昼食後、九州女子大学教授、山田輝彦先生が「乃木希典——明治人の『原型』——」と題して講義をされた。まづ、先生は「全ての価値観が不鮮明な現代に於いては、物事を概念的に相對的に捉へるために、青年はどういふ生き方を求めたら良いのか非常に分かりにくくなつてゐるのではないか」と指摘された後、人の生きた跡を正確に味はつてゆくべきことを訴へられ、乃木希典の生涯を丁寧に通つてゆかれた。

先生は、明治天皇に殉死した乃木大将の遺書を紹介される中で、西南の役の折、軍旗を失った時以来死処を求めてみたといふその心境を、小林秀雄氏の文章を引用されつつ深く偲んでゆかれた。次に日露戦争に於ける旅順攻撃における乃木大将に就いて「乃木は愚将であつたと言ふ者もゐるが、日本はその当時近代要塞の攻略法を知らず、肉弾突撃を繰り返さざるを得なかつたのです」と語られ、そして自分の子息をも含む六万九千人の部下を失つたこの戦ひが行なはれた二〇三高地を漢詩に『爾靈山』と呼ばれたことを紹介され、乃木大将の当時の深い悲しみに思ひを馳せられた。

続いて「この多くの人の苦しみを犠牲に戦つた日露戦争を語る時、何故今の教科書には与謝野晶子さんだけしか出て来ないのでせうか」と歴史の事実を正確に見ようとしない現代の風潮をきびしく批判された。また、乃木大将の殉死に就いての鷗外と漱石の文章には感動があらはれてゐるが、大正期の作家には乃木大将の「至誠」といふものがわからなくなつてゐると指摘され、最後に「乃木大将の殉死は本当に日本の民族が立派であつた時代の最後の儀式でした」と述べられ御講義を終へられた。

〈輪読導入講義〉

夕食後、九州造形短期大学教授、小柳陽太郎先生が「黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想

と日本文化創業』輪読のために」と題して全体輪読指導をされた。先生はまづ輪読の意義に就いて「輪読は学問の出発点です。輪とは心を輪の様にひとつにすることであり、読とは一言一言を大切に声に出して唱ふることによつて古典の中にこめられた先人の思ひを偲ぶことです」と述べられた。さらに古典を読む姿勢に就いて「先人が心をこめて書いた文章に接する時には、自らの心を整へて読まなければなりません」と語られた。

続いて、聖徳太子の憲法十七条第一条の「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆黨あり、亦達れる者少し」といふ御言葉を引用され「この言葉には、太子が現実の人間関係をじつと見つめられ、その中から和を貴ぶ事を切にお求めになつてゐる御心が偲ばれます」と語られ、太子の御言葉が単なる理想ではなく、きびしい現実生活から生まれてきたものであることを諭された。次に、輪読テキストの著者、黒上正一郎先生の紹介をされた後、数名の学生を指名し、輪読箇所を音読させ、語句や意味の分かりにくいところを指導された。そして最後に「これから皆と共に言葉を辿り、真実の心に触れる歓びを味はつて下さい」と参加者一同に呼び掛けられ御講義を終へられた。

〈輪読〉

全体輪読指導の後、各班室に戻り班別輪読が行なはれた。輪読箇所は『聖徳太子の信仰思

想と『日本文化創業』の序説である。各自、黒上先生の御言葉に迫つてゆかうと輪読に臨んだが、はじめは語句の解釈をすることにとらはれてしまふ。文章の意味を把握することはもちろん大切な営みである。けれども、それが全てではない。皆は自分の心と著者の心がだんだんと離れてゆく心地になり、しばらく沈黙が続いた。そこで、小柳先生の「声に出して唱へることによつて先人の思ひを偲ぶ」といふ言葉に立ち帰り、皆で声を出して読むことから始めた。御言葉を自分の心の中で響かせるやうに読む。さうして、少しずつではあるが胸内に言ひ表はし難い情感が湧き起こってくるのが感じられ、また友の語る感想によつて、御言葉が心の中で豊かに広がつていくのを実感したのである。残された言葉を通して先人の思ひに接した歓びは、これから学問をやつてゆく我々にとつて貴重な経験となつた。



第三日（八月八日）

〈講義〉

合宿三日目の朝、東京工業大学教授、江藤淳先生が、「ことば」と「ところ」と題して講義をされた。まづ先生は、紀貫之の『古今和歌集』序の冒頭「やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなりにける……」を紹介され、「こころ」と「ことば」が深く繋がつてゐることについて述べられた。さらに本居宣長『古事記傳』一之巻の中の言葉を引用され、「意ココロと事コトと言コトバ」との関りに就いて「古代人の業績を近代人の言葉で辿つてゆけば、その業績にこもつてゐた古代人の心は見失はれてしまふ。古代人の心を知るには古代人の言葉を読むことが大切である、古代人の言葉をぬきにしては古代人の心は決して理解出来ない」と語られた。

そして次に『古事記』の編纂の意義に就いて言及され「六、七世紀、大陸の文化の影響でそれまで口伝へされてゐた日本の歴史が漢文で表はされるやうになつた。その結果、日本の歴史に重大な変化が起こり、文化的危機を迎へたが、漢文化された歴史を日本本来の歴史伝承の形である「声」に還元し、次に漢字を音標記号として表記するといふ『古事記』編纂の

大変な努力によりこの危機を乗り越えることができたのである」と強く語られた。

また、もう一つの文化的危機として、先生は戦後の占領軍による検閲を挙げられ、川路柳虹作の詩『かへる霊』の原文とそれが検閲によつてどう変へられたかを示され、「検閲によつてつたづたにされた詩は作者の心までつたづたにしてしまつた。日本語で書いてあるがもはや日本語ではない」と切々と述べられた。

最後に、この占領政策による影響が現在も目に見えぬ形で残つてゐるけれども私達には千年以上も離れた万葉人の歌をそのままの形で読むことができる。これは外国では全く考へられないことであつて、私達には努力すれば先人の心と触れ合ふ道が大きく開けてゐることを力強く呼び掛けられ御講義を終へられた。

〈短歌創作導入講義・短歌創作〉

午後の日程は、山口県立高森高校教諭、宝辺矢太郎先生による講義「短歌創作の手引き」で始まつた。短歌創作は合宿教室の一つの柱である。先生は歌を創つたことのない者も多い私達に「今日とはとにかく一人一人が歌を創る決心をして下さい」とその不安を察するかの様に声を掛けられた。そしてどの様な心持ちで歌を創れば良いかといふことに就いて正岡子規の言葉を引用しつつ「理屈は感情を壊すものです。自分の感情をもとに歌を詠んで下さい」

と述べられた。

続いて、歌を詠むことは決して懐古趣味的なものではなく、古来から「敷島の道」と呼ばれ日本人が慣れ親しんできたものであることを論じられた。最後に幾つかの秀歌を紹介されたあと、故青砥宏一先生の「我らはも言の葉もちて全宇宙うたひはらさむ生けるしに」といふ歌を読みあげられ「和歌を詠むことによつて生きてゐる証をこの世に留めたいといふ御氣持が直に伝はつてくるやうです。かういふ先人のことを偲びながら、心をこめて歌を詠んで下さい」と、さはやかに呼び掛けられ御講義を終へられた。

御講義の後、参加者はバスに分乗し、雲仙、仁田峠へと向かつた。仁田峠では展望台より眼下に広がる有明海や周りの山々を眺め、さらに徒歩やロープウェイで妙見岳まで登つた。雄大に広がる大自然の中での友との語らひは格別なもので、心洗はれるひとときであつた。

〈青年体験発表〉

夕食後、青年体験発表が行なはれた。最初に、運輸省港湾局防災課勤務の久米秀俊氏が登壇され、学生時代に出会つて以来、氏の精神的支柱となつてゐる明治の歌人、正岡子規に就いて発表した。氏は自分と同郷である子規の歌や書簡を紹介しながら所懐を述べていつたが、その中で子規三十二歳の折の歌『世の人は四国猿とそ笑ふなる四国の猿の子猿そわれは』を

読み上げ「私達はこの子規の様な荒々しさをもつてゐるだらうか」と私達に呼びかけられ、さらに夏目漱石に宛てた手紙の一節を紹介して「ここには、病床にありながら病気の苦しきや外的な忙しさに負けない内心の充実感、心の忙しきで一杯の子規が感じられ、私も日常の忙しさに負けてはゐられないと励まされるおもひがします」と述べて発表を終へた。

続いて、鳥栖市役所下水道課勤務の西山八郎氏が登壇した。氏は学生時代の輪読会での経験をもとに一言一言かみしめる様に語つていつた。氏は学生の頃は、大東亜戦争に対して否定的な感情しか持つてをらず、その事を輪読会の場で発言した。しかし、ある先輩に「君は当時の人がどういふ気持ちで戦ひ、死んでいつたかを考へたことがあるのか」と言はれ、戦没学徒の遺書を読んだとき、愕然と目がさめたやうなおもひをした時の事を振り返られ「私はこのやうな方々がをられたといふ厳然たる事実を知らなかつたのです」と声を震はせながら語つてゆかれた。そして、真珠湾攻撃の際、特殊潜航艇に乗り込み亡くなられた同郷である広尾大尉を偲ばれた後、「あの戦ひを概念的に論ずることは簡単ですが、我が身を顧みず出征して行つた自分と同年代の方がをられたといふ事実を思ふとき、自らの生き方を問はれる思ひがします」と切々と語つて話を結ばれた。

〈慰霊祭〉

慰霊祭に先立ち、北九州市立療養所松寿園勤務の森田仁士氏によつて慰霊祭の説明が行なはれた。その後、澄み切つた夜空の下、屋外に設置された祭壇の前に全員が整列。篝火が焚かれ、厳かな雰囲気の中で慰霊祭が始められた。まづ、お祓ひに代へて松吉基順先生により、故三井甲先生の遺歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

が二度朗詠され、次に関正臣先生の警蹕と共に、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊に対し黙禱を捧げ、降神の儀が行なはれた。献饌の後、参加者一同を代表して、加納祐五先生が祭文を奏上され、明治天皇と今上天皇の御製を小田村四郎先生が拝誦された。続いて玉串奉奠の後、皆で「海ゆかば」を斉唱、最後に昇神の儀が行なはれ慰霊祭は終つた。

左に慰霊祭に於ける祭文と拝誦された御製を記しておく。

(祭文)

昭和六十一年八月八日、われら第三十一回合宿教室に集ひ学べる者らこぞりて、ここうま

し国筑紫の国の島原の眉山の麓の里に齋庭設けまつり、
きよめまつりて、とこしへにみ国まもります遠つみ祖
たち、またみ国のために尊きみいのちをささげましし
同胞友らのみ霊をなぐさめまつらむとみ祭仕へまつれ
ば、今宵み空に星かげあまたつらなり神のみ霊うつし
くわれらが上にのぞみまします。願ればわれら明治天
皇今上天皇の御製にまた聖徳太子のみ教へに国民のゆ
くべき道のしをりを仰ぎつつ合宿教室のいとなみはは
や三十あまり一つの回を重ねたり。いまこの里に三百
の友ら集ひて講義に班別討論にはたまた短歌の創作に、
もろ心かたむけ、かたみに心を開きて語りかはせば、
われらが心はやうやくに友らの心に通はむとしわれら
のいのちはただちに見祖らのいのちにつらなりである
を覚ゆ。

国の内外に憂ふべきまがごとども数々のおこるとき
み国の上を思ひつつ行かむとする道はよしけはしくと



も、我らもろともにみ国まもらむとおのおのも心さだめて、いまよりのちまなびやにはたまたつとめにはに、かしのみのひとつ心にもろともにたすけかはしてひとすぢの道をしたひ学びゆかむとうけひまつることのよしを、いましみことたちきこしめしたまひわれらのゆくてをまもらせたまへと第三十一回合宿教室参加者一同に代り加納祐五謹み敬ひ恐み恐みも白す

○

(明治天皇御製)

虫

たたずめば聞えずなりぬむしの声このくさむらとおもひしものを

薄

いづこをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり

演習地にて

もののふのせめたたかひし田原坂まつも老木となりにけるかな

往事

おもはずも夜をふかしけり国のためたふれし人のものがたりして

子

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし人のいさをを

光陰如矢

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に

神祇

わがくには神のすゑなり神まつる昔のでぶりわするなよゆめ

（今上天皇御製）

遺族のうへを思ひて

忘れめや戦の庭にたふれしは暮らしささへしをのこなりしを

稚内公園

樺太に命をすてしたをやめのこころを思へばむねせまりくる

祭り

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

第四日（八月九日）

〈講義〉

合宿四日目は、国民文化研究会理事長、小田村寅二郎先生の『聖徳太子憲法十七條』を正確に読みながら日本及び日本人について所懐を述べる」と題する講義で始まった。先生は本題に入られる前に、本年五月出版されて大きな話題を呼んだ『新編日本史』について触れられ「この教科書は、人物やその言葉を大切にしていり、学生が歴史をなつかしむことのできる道を開いたのです」と新しい歴史教科書出現の意義について述べられた。

そして聖徳太子の「憲法十七條」を一條づつ声に出して読まれ丁寧に意味をとつてゆかれた。その中で第四條の「群卿百寮、禮を以て本と為よ」、第五條の「頃訟を治むる者、利を得るを常となし、賄を見て訴を聴く」といふ言葉について、「政治を司る人が禮を尽さないと国はうまく治まらず、また役人はその権力を我がものにする傾向に陥りやすいといふ、現代にもそのまま当てはまる事を千三百年前に太子は具体的にズバリと指摘されてゐるのです」と語られた。さらに「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ」といふ言葉で始まる第十條を読みあげられ「ここには、現代と全く変はらない様々な感情が渦巻く人間のありのままの社会生活があり、これらの言葉は、その様な人生の眞実を正確に見つめ率直に指摘してゐます。しかし現代に於いては、人の心の内面に目を向けず、お互ひに誤魔化し合つてゐるのではないか。その様なところからは、自分の心を見据ゑて生きてきた人間の美しくりっぱな姿は絶対に見えてきません」と太子の言葉を通して現代の日本人の意識をきびしく

批判された。続いて第一條の『和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す』といふ言葉について、「人間社会では忤ふことになりがちであるから和を以て大切なこととしよう。むづかしいが和を目標にしよう。これらの太子の御言葉は現実社会を離れてはみないのです」と憲法十七條が、唯、理想社会を描いたものではなく、現実をしつかりと認識した上で書かれてゐることに注意を向けられた。そして最後に「太子の時代も今も少しも変はらないんです。それに気づけば古典を読むことは楽しいでせう。どうぞ太子の御言葉を読み味はつて下さい」と古典に触れる歓びを語られ御講義を終へられた。

〈映写会〉

小田村先生の講義のあとの班別討論の後、映画「伊勢の遷宮―御神木編」が上映された。これは、伊勢神宮少宮司、幡掛正浩先生の御厚意により実現したものである。上映に先立ち、舞岡八幡宮宮司、関正臣先生が御遷宮の意義に就いて御話をされた。「二十年毎に内宮、外宮とも新殿舎が『全てを新しく、元通りにする』ために造営されるといふ伊勢神宮式年遷宮は、『皇家第一の重事』と言はれ天武天皇のお定めにより始められたが、実は既にそれよりはるかな遠い神代のころより行なはれてゐたといはれる。そして戦前までは御皇室の伝統として受け継がれて来た国家的行事であつたけれども、戦後になつて宗教的行事と見なされ、現在

では皇室と神社本庁により行なはれてゐるのである。」

映画では、遷宮の際に使はれる御神木が古式に則り切り倒され、伊勢神宮まで運ばれてゆく様が写し出されてゐた。御神木が通過する町や村では、老若男女こぞつて御神木を祝い、その周りで歌ひ踊る。ある人は、御神木に向かつて手を合はせてゐた。このやうに、御神木は多くの人々の心を結びあはせながら伊勢神宮に到着するのである。参加者一同、神代より続いてきてゐるこの伝統と、それが今日でもこのやうに国民によつて大切に守られてゐる姿に深く感動した。

〈講話〉

昼食後、亜細亜大学名誉教授、夜久正雄先生が「今上天皇の御歌について」と題して講話をされた。先生はまづ「短歌を創るといふことは、自分の心を見つめることであり、人の基本的修養である」と述べられ、また万葉の歌人、山上憶良の「皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国」といふ言葉を引用され「我が国は天皇の『知らず』国で、万葉の時代から歌が盛んに創られてきた国である。だから私達が短歌を詠むといふことは、日本の文化伝統に直接触れることである」と短歌と日本人は密接につながつてゐることを語られた。

そして、毎年一月の初めに行なはれる「宮中歌会始」の事に触れられ「これはまさに『言

「靈の幸はふ」日本の国の姿を示す、日本の国柄にとつてこの上もなく重要な儀式である」と述べられ、さらに全国にある今上陛下のたくさんの歌碑について「国民の陛下に寄せる思ひの結晶であつて、ここに陛下と国民の心が一つになつてゐる」と沁み沁みと語られた。続いて先生は、今上陛下の生物について、地名について、御家族について詠まれた御製を紹介され、小さな生物にまでも深き愛情を持たれる陛下の大きく広やかな御心を偲ばれ、また陛下の御家族を思はれる御歌について「われわれ国民が理想とすべき家族的団樂の雰囲気がこれらの御歌に強く感じられます」と述べられた。

〈和歌全体批評〉

前日に提出された参加者全員の和歌は、国民文化研究会の先生方による選歌、若手会員によるガリ切り作業、深夜に及ぶ高校生アルバイトによる印刷作業といふ過程を経、一冊の歌集となり皆に配布された。この歌集をもとに、熊本市役所技師、折田豊生先生が短歌全体批評をされた。先生はその中から数十首を取り上げられその一首一首を作者の感動の中心をしっかりと押へながら丁寧に直してゆかれた。先生のユーモアにあふれる批評で、時折、講義場は爆笑につつまれ、楽しい時間であつたが同時に参加者一同は言葉一つ一つの重みを改めて感じさせられたのである。

この後、各班毎に短歌相互批評が行なはれ、作者の思ひに班員のすべてが心を働かせてるうちに自づと皆の心は一つの輪の様になり、共感の世界が実現されていった。

〈講話〉

夕食後、国民文化研究会副理事長、宝辺正久先生が「昭和史の一端」と題して講話をされた。先生はまづ、青年期をその渦中で送られた大東亜戦争を振り返られ「それは実に悲痛な体験であつたが同時に感動的な事件でした」と大きな国民的感動の中で自分も共に戦つたといふ実感を語られた。そして当時の緊迫した状況に就いて「明治以来、日本の独立、満州に対する外国からの干渉があり、大東亜戦争はそれらに対する民族的な戦ひだつた」と述べられた。

次に明治天皇の御製を拝誦され「国民のことを思はれる陛下の御歌に私達国民が感動した時、国民の心と陛下の心が真すぐに結びつく」と沁み沁みと語られ、また学生時代共に学び戦ひに征かれ亡くなられた御学友を偲ばれつつ「友達と御製を拝誦しながら送つた数年間の学生時代に、私の一生を支へる全部があつた」と声をつまらせながら語られ御講話を終へられた。

〈夜の集ひ〉

合宿教室も愈々最後の夜を迎へ、大広間には宴席が設けられた。今年も又、坂東一男先輩（朝日麦酒(株)新潟支店長）から心尽しのビールが届けられた。乾杯の声と共に、参加者は班毎、大学毎、地区毎に次々と舞台に上がり、寸劇を演じ歌をうたふ。短い時間ではあったが皆は合宿の疲れも忘れ打ち興じた。最後に、三井甲之作詞、信時潔作曲の「神州不滅」「進めこの道」の大合唱で宴が閉ぢられた後も、各班室では尽きぬ語らひが深夜まで続いた。

第五日（八月十日）

〈全体感想発表〉

合宿教室の最終日は、合宿を振り返つての思ひを披瀝する「全体感想発表」で始まつた。この時間の冒頭



で、合宿教室運営委員長である占部賢志氏は次の様に所感を述べた。

「私達はこの四泊五日間、『学問と人生と祖国』といふテーマに取り組んで来ました。しかし、それは決して自分の普段の生活から離れて天下国家を論じたといふことではない。皆さん、班別討論を思ひ返して下さい。講義を聞いたあと班に帰つて色々な意見を述べてみるがその言葉がなかなか班員の心に入つてゆかない。さういふことがたびたびあつたと思ふ。それは自分といふものを抜きにして、知識の世界であれこれと比較検討しながら自分の意見を出したからでせう。そこには『君の意見はさうか』といふふうにすぐ納得し合ふ対話ではなく、それだけでは済まない非常に厳しいものがあつたと思ひます。しかし、さういふ経験を重ねてゆくうちに皆さんは自分の人生を見つめるといふことと、例へば国家の問題を考へてゆくことが一つに重なつて語られて初めて相手の心の中に自分の言葉が入つてゆくことを感じられたのではないか。討論の途中、しばらく沈黙がつゞくやうなことがある。それは『自分に照らして言葉を語らないと駄目だ』と思つて、知識としての言葉ではなく、心の中から生れた言葉を選んでゐたからなのでせう。けれども今の世の中では自分自身はどう思ふのかといふことを不問に付して、評論家気取りで物事を論ずることが如何に多いことか。しかしそんな話してもちつとも面白くはないのです。自分自身は一体どうするのか、どう受けとめるのか、それが語られなければ私達の精神は歓びはしない。この『自分流に考へる』とい

ふことが基本にあつて班別討論が行はれたのです。この合宿で、自分流に、世間の雰囲気に惑はされずに物事を考へるといふ努力をお互ひの力でやつたのだといふことは間違ひないのです。この努力をこれからも続けていつてほしい」

占部運営委員長の言葉は、私達の心の中に直接飛びこんで来る様であつた。そして、この言葉に応へるかの如く、つぎつぎと参加者は登壇し、はつらつと、又は声をつまらせながら己が思ひを語つていつたのである。

〈合宿をかへりみて〉

全体感想発表の後、日商岩井LNG部部长補佐、澤部寿孫氏が登壇された。氏はまづ全体感想発表を受けて「皆が自分の心を働かせようと努力された結果、この合宿教室が本当に内容的に充実した素晴らしいものになりました」と語られた。そして「私もこの合宿教室の中で先生方の御講義を通して、その時代を生きた人がどういふ気持ちで生きたのかといふことに就いて学びました」と話され、先生方が講義の中で何を私達に伝へんとされたのであるかを汲み取られながら、御講義の要点を振り返つていかれた。次にこの合宿教室で私達が学んだものを踏まへて「現代の風潮は本当にさういふ大事なことを抹殺しようとしてゐる。この事に私達は真剣に取り組まなければならぬ」と参加者に訴へられた。

続いて「皆さんは今、自分がどう生きるかといふことを定める大事な時期にゐる。自分が得た感動を大切にして、自分の生き方を決め、現代の風潮に流されることなく決然として生きていたゞきたい」と私達を励まされ、最後に「私達の祖先が築いた歴史の真実をしつかりと見極め、この日本を良くするため力を合はせて頑張らうぢやありませんか」と切々と参加者一同に呼び掛けられ御話を終へられた。

〈閉会式〉

つひに閉会式の時がやつて来た。全員で歌ふ国歌が場内に響き渡る。そして学生を代表して早稲田大学三年大日方学君が登壇し「私は班生活を通して、互ひの思ひが通じ合ふ体験をしました。是非この体験を大学に帰つてからも拡げてゆきたい。互ひに頑張りませう」



と力強く語り掛けた。

次に主催者を代表して、国民文化研究会の加納祐五先生が登壇され、「私達はお互ひに初対面でありながらも一つの気持ちとなつて語り合ふことができました。それはお互ひに心から信じていることができたからです。私はそこに国のいのちを感じます。この合宿で得た機縁を大切に、これからも友達との友情を深めていつて下さい」と語られ閉会の挨拶を終へられた。その後、全員で「神州不滅」を斉唱し、中央大学二年久保田真君が力強く閉会宣言を行った。

最後に参加者一同、壇上に上つて頂いた国民文化研究会の先生・先輩方に御礼の言葉を述べ、全員で「進めこの道」を力強く歌ひ、ここに第三十一回全国学生青年合宿教室の幕は閉ぢられた。

愈々、四泊五日間共に学び合つた友との別れの時が来た。ホテル一階ロビーでは、あちらこちらで別れを惜しむ光景が見られ、「手紙を交はさう！」「来年また合はう！」との声が飛び交ふ。そして最後に堅く握手を交はし、それぞれの地へと合宿会場を後にした。友らの顔は皆、晴れやかだつた。

合宿詠草



仁田峠 頂上にて

学生・社会人

合宿地につきて

来年も必ず来ると言ひし友の姿見だし走り行くなり
近寄りて顔合はすればお互ひに変はらぬ姿に喜び話す
約束を守りて来にし我が友を我はうれしくたのもしと思ふ

○

青空にくつきり浮かぶ眉山のすがすがしさよ朝の集ひに
九州女子大学 文四 林 典子

けふからは座右の書とぞ思ひつゝ、太子の御本に我が名書きたり
厚木市教育委員会管理部 宮崎 修一

先人の想ひをしのぶ心こそ歴史を学ぶはじめと知りぬ
東北学院大学 法一 石川 賢治

津田塾大学 学芸一 林田 聖子

垂細垂大 経四 松吉 基光

まつすぐに眼まなこ見つめて話したる友の気持ちの我が胸を打つ

九州女子大学 文二 戸田 祐子

心より語れる友のことはを聴きて心は素直になりゆく

日本大学 文理三 渡辺 善正

あなうれしはじめて会ひし友なれど心を開きて語り合へるは

班別で別け隔てなく語り合ひて得たりし友の尊からずや

拓殖大学 外国語四 田部井 繁夫

輪読をくり返しゆくうちいつしかに友のことばに勇気づけらる

国学院大学 文一 亀井 正弘

心より出でし言の葉のやりとりに夜のふけゆくをも気づかさざりけり

○

九州女子大学 文四 麻生 えりざ

乃木大将夫妻を偲びて

背の君の覚悟を知りて諸共に果てにし夫人の心偲びぬ

西南学院大学 文四 一ノ瀬 健二

広尾大尉の戦死の御話をする西山八郎氏の姿を見て

大尉殿と声つまらせる先輩の御姿見れば胸にせまりく

○

熊本大 法四 増住 康之

霞たち水平線は見えねども海の向かうに山のはのみゆ

拓殖大 外三 住川 宏幸

島原の海を行きかふ船々が赤く染まりし夕焼けの海

西南学院大 文四 日比生 哲也

うみやまをはるかに眺め友どちと語れば涼しき風の吹きけり

北海道工業大 工二 佐瀬 竜哉

登山の折に

雲仙で我を気づかふ班長のそのまごころを嬉しとぞ思ふ

立命館大 経二 矢口 律男

我が友と声をかけあひ励ましつ登る山道すがしかりけり

○

厚木市教育委員会管理部 難波 浩

慰霊祭の和歌朗詠を聞きて

万感の思ひをこめてうたはれしみ声悲しもわが胸を打つ

長崎大学 教育一 加賀 義

慰霊祭にて

神代よりうけつぎきたるひとすぢの心に我もつらなり生きたし

○

九州大学 法四 與 島 誠 央

宝辺先生の御講話をお聴きして

国のため亡せにし人を思ふかなと御歌誦みます御声かなしも

暮れてゆく秋のみ空に亡き人を思はるる御歌のしらべしづけし

東京国際大学 教養三 渡 邊 潤 子

宝辺先生の御講義を拝聴して

友想ふ心の深さはいつの世も変はらず貴きことと思ひぬ

武庫川女子大学短期 国文一 松 永 知 子

宝辺先生の御講話の中の松吉正資氏の御歌を拝聴して

美しき大島を離れ戦地にて散りにしますらをの心惚ばる

故郷を慕ひつつ逝きし友思ふ師の悲しみの伝はりて来ぬ

班別和歌相互批評の後に

いい歌になりぬと思ひずんずんとひびきてやまぬ胸の高なり

中央大学 文一 三 林 浩 行

京都大学大学院 農修士二 富 永 晃 行

夜遅くまで班員と共に和歌相互批評せし折

いくたびも言葉さがせどあふれくる思ひははれず心苦しき
みともらのみまへに座して吾が歌をうたひ終りて心すみたり

東北学院大学 文二 根 岸 一 成

班別和歌相互批評の折に

とつとつと語りし友のひと言にこころ尽して耳傾けぬ

その友の語りし思ひしみじみと伝はり来りて胸つまりたり

中央大学 経二 権 東 一

和歌相互批評の折

夜も遅くなれど短歌を見つめをる友のまなざしに熱きものあり

○

○

最後の夜の集ひにて

熊本大学 法一 北村 公一

九州の男なればと我もまた肩を組みつつ元寇うたひぬ

東洋大学 社二 吉川 敦夫

合宿最後の夜に

八人がひとつになりて友どちの歌を直せる時ぞ楽しき

夜ふけまでねむさをこらへ友どちの心偲びて言の葉えらびぬ

岡山大学 文一 十時 浩司

友どちとの別れに臨みて

つまりつつ素直に語る言の葉はゆり動かしぬ我の心を

さまざまの思ひを抱き集へるも今日を限りとなりにけるかな

閉会式にて

福岡教育大学 教育四 柳 池 圭伊子

みともらとつたひあげたる君が代につよきしらべに胸のせまりく

大学教官有志協議会・国民文化研究会

国民文化研究会理事長・前亜細亜大教授 小田村寅二郎

三十一みそひとと回を重ねて島原に初の集ひを開くはうれし

全国すのくにゆ馳とほせ参まゐりける三百の友らを迎ふるうれしからずや
皇国の永久すゑにの生命いのちを偲おもふなる道さだかなり継がでやむべき

（株）宝辺商店代表取締役 宝 辺 正 久

和歌創作導入講義を聞く

かなし子を嫁にやりたるなき友のうたを聞くなり合宿講義に
面ほてらし若きがよみゆくなき友の歌をしきけば胸迫るかも
よみをへてなき人しのぶ若き子が涙ぬぐへば堪へがたしわれも
亡き友の歌よまれたりと書きやらば熱き思ひせむ青森の友は
はればれと雲仙岳に行けよかし雲一つなきけふの登山日

九州造形短大教授 小 柳 陽太郎

帰途、島原より大牟田への船中にて

合宿の友ら若きら次々に浮かびてやまず去りゆく船に

新たなる力めぐまれて島原の集ひ終へにきつとめざらめや

遠ざかる島原の町よ眉山よけふのおもひはとはにつきざらむ

岸辺遠く船はさかりてはるかなる雲仙の嶺の見えそめにけり

合宿は無事終れりと北国の友がみもとに告げやらむかな

合宿にまみゆるなけれどこの集ひ見守りたまふ友あまたあり

み友らのあつきおもひに守られて今し終りぬこの合宿は

白雲のよそに求むなといふ大みうたしるべと生きむ心あらたに

元日特金屬工業(株)常務取締役 加納 祐 五

班別討論にて

くさぐさの思ひもちよりつどひこし友ら語らふ心へだてず

思ひかたみにかよふなるべしはりつめし顔ばせしなごめる見れば

へだてなくともに語ればくさぐさの思ひひとつにとけゆくごとし

もろびとの心ひとつにつながるを国のいのちのくしびといはむ

亜細亜大名誉教授 夜久 正雄

慰霊祭

たまよばふ警蹕けいひつの声とほながくみたまたちいまし天降あめりますらむ
星ぞらのもと「海ゆかば」うたひつつなき友たちのいまはをしのぶ
なき友のみたまもありたまふらむ星ぞらのもとこれのゆにはに
みたまいまもありませばか何となく心にぎはしくさはやかにして
みおやかみまつるゆにはにかしこめばそよふく風のようにさやかなる
みおや神のほりたまひし天つそらあまたの星のかけもせずしき
みまつりををへて星ぞらうちあふぎ友と語れば心なごむも

九州女子大教授 山田輝彦

にぎやかに飯食いひひをれど青砥なく長内病めるつどひ淋しき
有明の海に水脈み曳をきゆく舟を見つ、たまゆら心安らぐ

ともかくも若きらつどひ事もなくいのちあふる、つどひ終りぬ
わがよはひ三十路みそぢのころに始まりてはや還暦も五つとせ過ぎぬ
年ごとのならひとなりしこのつどひ果てしよろこび何にたとへむ

尚綱学園常務理事・事務局長・尚綱大講師 徳永正巳

占部運営委員長に捧ぐ

いとし子の重き手傷の報らせにも君は帰らず務め果せり

家事しげく心は千々に乱るとも君はもだして務め果すも
一言もなげきの言葉漏らさずて重き務めを果せし君はも
閉会式も見事に終へて今ははやみ子待つ町へ帰りませ疾く

日本銀行監事 小田村 四郎

大御歌に詠ませたまひし大阿蘇はけむりて見えず雲のかなたに
西のかた千々石の海も霞めども夏日きらめき波しづかなり
大御歌きざみまつりしいしぶみは筆跡しるく山かげに立つ
花咲かば美しからむ道すぢにむらがり生ふるみやまきりしま

舞岡八幡宮宮司 関 正臣

合宿第一日、長内兄からホテルに來信あり

その便り今手にしたり青森の消印しるき思はぬこの文
自らは病みこやりつつ合宿と亡き友の上を思ふこの文
この葉書我が身につけて同行二人臨まんとする今年の合宿に
慰霊祭のつとめ叶はず済まないと記すその文字繰り返し読む
この便り班の友らに示しつつ縁えだしに生くる幸を語れり

東福岡高講師 小林 國男

「朝の集ひ」にて

まなかひに眉山せまれる広庭に仰ぐ幟のぼりの大御歌はも

眉山の山の緑に浮き立ちて目にもしるけき大御歌かな

江藤淳先生の御講義を聴きて

ひたすらに教へて止まぬ師の君の熱きみ言葉わが胸を打つ

こころこめ思ひをこめて説き給ふ深きみ教ただ有難き

さかしらのはからひ捨てて上つ代のこころにかへれと師はとき給ふ

思はずも涙ぐみたり今日の日にかくも尊きみ教をうけて

㈱不動産コンサルタント代表取締役 松吉基順

すめろぎのみ歌のいしぶみ拝さむと野岳の小径を汗ばみたどる

野岳なる小径あゆめばひぐらしの鳴く音かほそく夏の陽まぶし

ひとりして樹かげに憩へばいづくゆか小鳥さへづる声の聞こえく

野岳なる高原のみ歌のいしぶみの彫り深くして筆あとうるはし

㈱千代田コンサルタント常務取締役 上村和男

もれいづるかすかな光あさあけのしじまの海面うみに紅さすごとく

みはるかす島々美し朝あけのしじまのなかに船ゆくが見ゆ

(株)日商岩井LNG部部长補佐 澤部寿孫

村松先生の御講義を聴きて

主体性いづこにありやと嘆きますみ言葉激しも国を憂へて
祖先みおやらの思ひ偲おもはず如何にして国守らむと説うかるる大人おとしは
み心に連なり生きむ吾もまたやまとをこの一人にしあれば

神奈川県立湘南高教諭 山内健生

最後の班別懇談

若きらとともに過せし合宿もいよ別れの時の近づく
口数は少なけれども胸内に湧きくる思ひを友ら語りゆく
これからは本当の意味の日本人になるべく努むと友はいふなり
さらにさらに己が心をふくらませ学び行きたしと語る友あり
これからがまことの学びの始まりと決意をのぶるたのもしき友
つぎつぎに胸内の懐ひ語りゆく若き友らの面輪は輝く
あらためて友らのみ手をにぎりしめその感触を身にとどめけり

神奈川県立五領ヶ台高教諭 原川猛雄

神宮式年遷宮の映画を見て

道の辺に神の木迎へしひとびとのみ顔輝きたふとく見ゆる
年おいしをみなのあるありて一心に手を合はせたる姿たふとし

中島法律事務所弁護士 中島繁樹

「伊勢神宮式年遷宮」の映画を見て

町毎に人々こぞりて神木を迎ふる祭のにぎはしきかな
古いにしへゆ木曳き祭のにぎやかに続くぞ国の基もととぞ思ふ

戸田建設(株)事業計画部主任 青山直幸

「短歌相互批評」にて

み友らの示唆を受けつつ自らの歌を心傾け直しゆく友
顔かんばせを赤く染めつつ懸命に言葉選びゆく友の姿よ

ただひたに己が歌にらみ黙したる姿を見れば胸あつくなる
にはかにも目の輝きて「できました」と友は言ひけり喜びに満ちて
直したる歌詠みあぐる友の声ははつらつとして部屋に響きぬ

(社)日本教育会 大島啓子

聞きしをれどはや始まるか六十一回むせひとたびの古式伝ふる御遷宮の準備は縁ゆかりりある町々を経て御神木ははるかかなたの伊勢路へ向ふ御神木を迎ふる町の人々の面輪の輝き我が胸にしむ

福岡県立福岡中央高教諭・合宿運営委員長 占部賢志

長内俊平先生に

師の君のふるさとなりし青森の消印押せるハガキ届くも
なつかしきやさしき文字なり師の君の御声聞くがに読みまつるかも
病みふしてはがゆき限りと綴ります御言葉よめば胸ふたがりぬ

吾子のこと案じたまへる数々の御言葉ありがたく涙にじみき

熊本市役所技師 折田豊生

宝辺矢太郎君の御講義を聴きて

こまやかに心をこめて語らるることのは深く胸にしみ入る
学びやにつねづね子らしきしまのみち学び合ふ様のしのばゆ
ことのはにこもるいのちのたふとさをあらためて思ふ君が講義に

鳥栖市役所下水道課・合宿事務局 西山八郎

あはただしく事務に追はれて過ごしこし合宿も今終らんとする
み友らと力合はせて合宿の支へと思ひつとめきにけり
初めての重きつとめを無事終へし局長ともしの苦勞はいかにありしか

防衛庁調達実施本部検査官 鏡 信弘

西山八郎君の「青年体験発表」を聞いて

思はずもわが胸あつくなりにけり飾らず語る友の言葉に
ひのしと日本の行末を案じて征きし人を偲ぶ言葉に力こもれり

鹿児島県吾平町立神野小教諭 南田 武法

宝辺先生のお話の中で、旅順戦勝利の報のことをききて

戦勝の号外のふれにどの家も手旗うちふり祝ひたりしと
戦ひに立つも立たぬも一心に国のゆくすゑうれひたまふか
おのが身と国の危急を共に思ふ明治の御世のすばらしきかな
あしざまに国の歴史を教へゆく人の心のあさましきかな

佐賀県立武雄高教諭・合宿事務局長 名 和 長 泰

さはやかに朝風わたる海原のさざ波ゆたかに輝ける見ゆ

北九州市立療養所松寿園 森 田 仁 士

占部賢志先輩へ

大任を務め下さる先輩のもとへいとし子入院の報ありとふ
昼飯にて先輩と会ひしもなぐさめむ言葉みつからず語りかねつも
くぐもれる面あほぎつついとし子の怪我の軽きを我も祈りぬ
いとし子の入院の報受けつつも役目はたせし先輩ぞますらを

夏の陽に眉山映えて緑濃し御歌の幟白くはためく
元最高裁秘書課・速記業・合宿記録班 西川 伍朔

合宿に寄せられた歌

長野県駒ヶ根総合文化センター所長 宮脇 昌三
しきしまの大和の歴史正しくぞ教へ伝へん時し来れり

元八代市助役 加藤 敏治

心しる友らとともに微笑かはしかたらふ夢のはやさめにけり
朝明けにやまばとしきなく島原につどひし友らしのびてあれば
集れば神となるてふみことばのうつしくなるらん友らつどへば

開発電子技術(株)参与 長内俊平

やすらげとみ友らかたみにのたまへど心安らはず合宿せまれば

夕陽のあかあか炎えて地の果てに沈みゆくみつつ友らを思ふ

みまつりのゆにはつくりはいかならむとしごとみ友とつかへきにしを

それぞれに重き責負ひ壇上へのぼるみ友らに声かけましを

あきつしまきたのはたてのみちのくゆ友らの上に祈りささげむ

(小林國男選)

あ と が き

合宿を終へて島原の地をあとにした時、岡山大学の或る学生は友と別れるおもひを次の二首の歌に託してゐる。

つまりつつ素直に語る言の葉はゆり動かしぬ我の心を

さまざまの思ひを抱き集へるも今日を限りとなりけるかな

合宿教室で私たちはさまざまなことを学んだ。しかしその中で一番心に残つたことは、普段何げなく使つてゐる言葉が、こんなにも大切なのか、友の言葉に心をこめて耳を傾けてみると、その中にはこんなにも豊かなおもひがこもつてゐるのかといふ痛感だつた。それはこれまでの大学生活では到底味はふことの出来ない世界だつた。その率直な感動の中で、この歌はよまれてゐる。「つまりつつ素直に語る」友の言葉、その友はこの合宿ではじめてめぐりあつた友に違ひない。開会式のと不安なおもちで「さまざまな思ひを抱いて」顔を合せた友と、僅か四泊五日のつきあひの中でこのやうな心の通ひ合ひが経験出来たのである。それは不思議にさへ思はれるけれども動かすことの出来ない事実だつた。

古典の輪読、和歌の創作、それらの修練の中で、江藤淳先生の御講義の中でもふれられた、ここ

ろ”と”ことば”、それを一致させようと心を励ました時に、このやうな世界が生れたのだらう。そしてこの”ところ”と”ことば”の一致した世界こそは、遠い時代から日本の祖先が限りなく大切にしてきた道―しきしまの道―であつた。時代はいかに変転を重ねようとも私たちの行く道、心を鍛へる道はこれ以外にはない。

今年の合宿教室は八月五日(木)から九日(日)まで四泊五日、阿蘇内牧温泉のホテルプラザ、望蘇閣において行はれる。講師には終戦時の総理大臣鈴木貫太郎氏の御長男で、終戦後天皇陛下のおそばに侍従次長としてお仕へになつた鈴木一先生と、東京大学教養学部教授小堀桂一郎先生をお迎へすることに決定してゐる。全国各地の若い友らの御参加を心から待ち望んでやまない。

昭和六十二年二月

編集委員 山田 輝彦

小柳陽太郎

—— 日本への回帰 ——

(第 22 集)

昭和六十二年三月二十日発行

定価 六〇〇円

〒 二五〇円

編 者

大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小 田 村 寅 一 郎

発 行 所 社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七—一〇—一八柳瀬ビル

振替（東京）六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

